

巻頭言

こと あ
言挙げせず

Naomi KAWASE

河瀬直美 (映画監督)



生まれ育った奈良で映画を撮り続ける。『殞の森』(2007)でカンヌ国際映画祭グランプリ受賞。『玄牝—げんぴん—』などドキュメンタリー作品も多数。なら国際映画祭ではエグゼクティブディレクターを務める。宇多田ヒカル最新曲『桜流し』のミュージッククリップを制作するなど幅広い分野で活躍中。最新劇映画製作準備中。公式サイト www.kawasenaomi.com 公式ツイッター @KawaseNAOMI

奈良の吉野には丹生川上神社が三社あり、それぞれに上社、中社、下社と名付けられている。その下社の宮司さまとお話する機会を得、いのちやこころに関することを深く感じる時間をもった。

下社のある吉野郡下市町は、ごろごろ水を汲みに行く途中で通る場所だ。ごろごろ水とは、大峰山脈から湧き出る清水でアルカリ成分が多く、身体にとっても良い。そこで、おとしの秋から我が家の飲み水と調理に関わる一切のものにこの水を使用している。丹生川上神社は今から千三百年前に天武天皇が創建し、雨を司る神様を祀る。つまり日本最古の水の神様がいらっしゃる場所というわけだ。

水は人間の身体のほとんどを占めるとても大切なものである。その清らかなものを体内に宿すことで、こころも清らかでいられるだろう。ましてや人間が生きる上で必要な作物はこの水がなければたちまち枯れてしまう。

いつのころからか、外国産の水を販売し消費するようになった日本人ではあるが、本来は山を守りそこに湧き出る清水からいのちをいただくことに感謝をする生き方が主であったはずだ。けれども経済優先の時代であって、苦勞の末の約束されない恵みよりも、お金を出せばすぐに手に入る簡単な生き方を選んでしまっている現実。

どうすれば本来の日本人としての精神世界の豊かさを取り戻せるのだろうと宮司様に問うたところ、こんな答えが返ってきた。

「『言挙げせず』という言葉を知っていますか？」

勉強不足のわたしは「いいえ」と答える。そんなわた

しに宮司様はやさしく、これは万葉集の中に出てくる言葉で日本独自の精神を伝えるものだと説いてくださった。

さて、「言挙げ」とは。「言葉に出す」という意味だそう、ならば「言挙げせず」とは「言葉に出さない」ということだ。それは「主張」を第一に掲げ、グローバル時代をゆく人々にとって「??」の答えだろう。しかし、かつての日本人は他者の感情を察し、こころを感じ、お互いの、言葉ではない精神部分をもっとも重んじながら会話をしてきたのではなかったか。

余談だが、20代の頃おつきあいをしていた彼に手紙をしたためたことがある。内容はこうだ。

「言葉ではわたしの気持ちが伝わらない。言葉なんてなければいいのに。ただ、そばにいて触れているだけでいい」

自分がまだまだ成熟したこころを有していないのに、想いだけは万葉人と近いものがあつたのか。

それはさておき、こころがいかにか自分を複雑化させているか、本来のそれがいかにかあさはかであるか、に思い至れば、その逆、いかにシンプルにまっとうであれるのかに力を注げばいいのだ。そうして、自分というものが元気であって、「言挙げせず」とも他者のこころを思いやる清らかで優しい精神を持ち合わせたい。なんでもかんでもルールや規則でがんじがらめになり人を信頼できない社会よりも、そういったものがなくとも人を信頼し、成熟した社会に生きる自分として立てるよう、まずは自分のこころを磨こうと思う。きっとそれは美しい日本の、いや世界の到来とも結びついているはずだから。

すべてを患者さんのために

福島孝徳先生インタビュー

聞き手

吉川左紀子（こころの未来研究センター長）

Sakiko YOSHIKAWA

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

Thoji KAMATA

阿部修士（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

Nobuhito ABE



福島孝徳（ふくしま・たかのり） カロライナ頭蓋底手術センター所長、デューク大学脳神経外科教授、森山記念病院附属福島孝徳脳神経センター最高顧問。1942年、東京都生まれ。1968年、東京大学医学部卒。東大病院脳神経外科助手、三井記念病院脳神経外科部長、カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授、南カリフォルニア大学医療センター脳神経外科教授、ペンシルバニア医科大学アルゲニー総合病院脳神経外科教授などを歴任して現職。患者の身体的な負担とリスクをおさえる「鍵穴手術」を開発。脳神経外科顕微鏡手術の「全米トップの権威」と評され、手術や講義のために世界を駆け巡りながら、後進のため頭蓋底手術実習セミナーを開催している。著書『神の手の提言——日本医療に必要な改革』、『ラストホープ 福島孝徳』『福島孝徳 脳外科医 奇跡の指先』『神の手のミッション 福島孝徳』、コミック『神の手を持つ男』などの関連書が出版されている。



この日、福島先生が手術を担当される湖東記念病院前で。左から、阿部修士特定准教授、福島孝徳先生、吉川左紀子センター長、鎌田東二教授（撮影：坂井保夫、p2の写真も）

1 週間に8日働く

吉川 福島先生は、アメリカを拠点にして、日本をはじめ、世界各地を飛び回って手術をされていますね。

福島 いまアメリカが8か月、南米・ヨーロッパが1か月、日本が3か月という生活です。1年間に約600例のむずかしい脳神経外科の手術をしています。本拠地のアメリカで300例、それ以外の国で300例です。

今日は日本に来てちょうど1週間目ですが、ロスアンゼルスから東京に着いてすぐ大阪へ向かい、それから福岡、鹿児島、函館、釧路に行って東京に戻り、昨日がまた大阪、そして今日は滋賀です。

鎌田 先生のご本に「世界一忙しく働く医師」とありますが、まさに殺人的なスケジュールですね。何十年もそんなふうにお仕事をしていらっしゃるのですか。

福島 そうですね、30年以上同じ生活です。私の信念は、自分の天職に誇りと使命感を持って全力を尽くすということで、「すべてを患者さんのために」を座右の銘にしています。

患者さんの大切な健康を守るのに、休んでられないのです。いま日本だけでも私の手術を待っている人が約300人いますから、夜を日に継いでやっていた間に合わないのです。

私は人が休む土日、祝祭日ほど仕事をしています。年の暮れ、正月も休まない。休むのは罪悪だと考えていますから。休みの日は交通渋滞もないし、病院を回

って、どんどん仕事をして患者さんを助けることができます。ぶっ通しで働くので、「福島先生は1週間に8日働く」と言われています。

吉川 先生のそういうやり方は、お若いときからですか。

福島 そうですね。日曜日とか人が寝ている夜中に勉強して差をつけていました。

「鍵穴手術」の確立

吉川 福島先生は脳外科が専門でいらっしゃるのですが、とくにむずかしい手術ばかりされているのですか。

福島 脳外科の手術のレベルは1から10まであります。1～3はやさしいもの、4～6が普通のもの、7～10はむずかしいものです。7以上のレベルの手術ができるのは、日本全国の脳神経外科医8,000人の中で10人くらいじゃないでしょうか。私のやっているような複雑困難な脳腫瘍の手術ができる人は1人もいません。

吉川 手先の器用さという点では、日本人は優秀だと思いますが。

福島 日本は脳卒中の患者さんが多いので、脳卒中、脳血管系の手術は上手な人がけっこういます。おそらく、日本の脳外科医の脳血管手術の技術は世界のトップクラスだと思います。しかし、その人たちもせいぜいレベル5、6ぐらいまでで、レベル7～10のむずかしい巨大脳動脈瘤や頭蓋底腫瘍は、ほとんどの日本の脳外科医には手に負えないでしょう。

「漏斗型」



「逆さ漏斗型」(「鍵穴手術」)



「漏斗型」と「逆さ漏斗型」の「鍵穴手術」との違い
 (“Fukushima Manual of Skull Base Dissection”より)

吉川 アメリカには先生のような脳外科医はいらっしゃるのですか。

福島 アメリカでもあまりいないですね。だから、私が世界ナンバーワンです。まず技術が違う。私は臨床医になって1年目から先輩のだれよりも手術がうまかった。それは先天的なものですが、でも、才能というのは2%ぐらいで、90~95%は努力なのです。

それからコンセプトが違う。やっている手術数が違う。私は膨大な症例経験を持っています。

阿部 福島先生は、「鍵穴手術 (Keyhole Surgery)」と呼ばれる、顕微鏡を使った脳外科手術を確立されたのだそうですね。

福島 1970年代以前の脳外科手術は肉眼で行われていました。そのため、頭を大きく開き、表面の「術野」、すなわち手術操作を行う部位を広くして、そこから病巣がある脳の深部の狭い術野へ進んでいく、いわゆる「漏斗型」の手術法が行われていました。

70年代になってから、日本でも欧米でも顕微鏡手術の時代に入りました。開頭の大きさも少し小さくなり、10センチからうセンチへ改善しました。そして80年代に、私が鍵穴手術を開発したのです。これは頭蓋骨に直径1~2センチの小さな穴をあけ、顕微鏡で術野を10倍から20倍に拡大した映像を見ながら手術を行う方法です。これによって、開頭する部分を狭くすることができるようになり、それまで行われていた「漏斗型」の手術法とは逆なので、「逆さ漏斗型」の手術法と言われます。

私は三井記念病院の部長になった1980年頃からその手術法の改良に心血を注ぎ、試行錯誤の末、安全で確実な手術法として「鍵穴手術」を確立しました。1987年にスペインで開かれたヨーロッパの脳外科学会で、「鍵穴手術のすべて」という講義を行ったところ、この分野のパイオニアであったスイス・チューリッヒ大学のヤシャギル教授や京都大学医学部の菊池晴彦教授から「私の後を継ぐのは君だね」「君は世界で十分にやっつけていける」と言ってもらい、心の底からうれしく思い

ました。

ご存じのように、脳の中には血管や視覚・聴覚などの無数の神経線維が複雑に張り巡らされています。手術のときにそれらに器具が少し触れただけでも傷がついてしまう恐れがあり、それが術後の半身不随や顔面麻痺などの深刻な後遺症を引き起こす危険性も高いのです。

「鍵穴手術」は、どうすれば患者さんの負担を最小限に抑えて手術ができるかを追求した結果生まれたのですが、それによって脳神経外科の手術は大きく変わりました。小さな入口から器具を挿入して、神経線維などを慎重に扱いながら奥に潜む病巣に到達するには、繊細な配慮、ミクロン・レベルの高度なテクニック、脳の構造の深い知識が求められます。ですから、これまで以上に、医師の能力による差が出てくるのです。

「鍵穴手術」の「鍵穴」はなるべく小さいほうがいいのですが、そのためには、高い才能、現状に満足しないでたえず追求と努力を続けていく姿勢、膨大な手術経験、その経験から得た豊富な知識や情報、経験が培う勘、神の助けなどの要素が欠かせません。それらがそろったとき、はじめて鍵穴の大きさは狭まり、手術の成功率も高くなるのです。そんな手術を私は年間600件手がけています。

モットーは「一発全治」

吉川 そんなむずかしい手術をするために、世界中を駆け回っていらっしゃるのですか。

福島 私は良性脳腫瘍、頭蓋底腫瘍、巨大動脈瘤などのむずかしい手術しかやりません。私にしかできない手術がたくさんありますから。もちろん、リスクはゼロではありません。しかし、どんなに大変でも、私の手術のリスクはだいたい0.3%から0.5%と言っています。それだけの誇りと実績と、私がやらなければいけないという気概もっています。

私のモットーは「一発全治」、つまり一度の手術ですべてを治すことです。脳腫瘍にも約100種類あり、「一発全治」できるのはその7割ぐらいです。残りの3分の1は悪性だったり、腫瘍が大きく脳内に浸潤したり、脳底動脈に食い込んでいたりして、手術しても取り除けないものです。しかし、おおかた70%は手術によって助けられるわけですから、他の医師が匙を投げするような手術でも、私ならできると判断したら全力を傾けて手術を行います。

日本の先生は概して中途半端です。脳腫瘍でも、3分の1とか半分取ってやめてしまうことが多い。そのあと、薬と放射線治療をし、2回目、3回目の手術

をして、また放射線をかけて、メタメタになった状態で私のところへ来られる患者さんがいらっしゃいますが、そうすると放射線のダメージと癒着とで、完全には取れません。最初から私が手術していれば治っていたのに、と悲しくなることがよくあります。そこで、中途半端に手術したら、患者さんの命は中途半端で終わってしまう、と若い医師に教えています。

最先端手術機器の開発

鎌田 三井記念病院の部長になってから、たくさん手術を手がけられました。

福島 私は東大闘争で安田講堂が占拠された1968年に東大医学部を卒業しました。それから研修医になって5年間であらゆる脳外科手術を経験し、脳生理学の研究にも取り組みました。これで一通りのことはできるようになったという確信を得たので、恩師の佐野圭司教授に相談し、外国へ武者修行に行くことにしました。ドイツに2年、アメリカに3年行って、アメリカではメイヨー・クリニックの脳神経外科臨床・研究フェローとして全米各地を回りました。こうして、技術的に大きなスキルアップをして帰国したのですが、帰ってみると日本の大学にポジションがないのです。それで、佐野先生の薦めもあって、三井記念病院の部長になりました。

民間に出ても私は絶対に日本ではだれにも負けないぞと思っていました。東大病院にいたころの年間の手術数は120ほどでしたが、三井記念病院に移った最初の年が200、3年目が300で、ついに年間600にもなりました。おそらく、それだけでも日本一の症例数ですが、さらに、私は毎週金・土・日は必ずどこかの地方病院に行って手術をしていました。

鎌田 手術用の道具もいろいろ開発されてきたそうですね。

福島 私のやっているような高度な手術は、1回の手術で特殊な道具が少なくとも100~200本は必要です。私はこれまで数々の手術用の機器を開発し、たくさんの特許を取っています。最先端の脳外科手術室には、総額1億円くらいの高額医療機器がそろっているのですが、ほとんど全部、私が特許を持っているものです。

脳神経外科の手術は、手術用顕微鏡の進化があっちはじめて発展しました。この顕微鏡の進化にも、私は大きく関与してきました。三井記念病院に入ったこ



福島先生の手術で回復した患者さんたち

ろ、手術用顕微鏡はドイツのあるメーカーのものが一番だと言われていましたが、私は満足できない点がたくさんありました。そこで、ちょうど手術用顕微鏡の開発に着手しようとしていたオリンパスの開発技術者たちと組んで、いっしょに試行錯誤しながら、世界トップの満足できるものをつくってもらいました。

また、脳外科手術では吸引管が欠かせません。手術中に出る血液や脳脊髄液、洗浄した水を吸い取って術部をきれいに保つための器具です。これも医療機器メーカーとともに3年がかりで開発しました。手になじんで自由自在に吸引圧が調節できるようなデザインにし、世界ベストの吸引管を、口径で10サイズ、長さで5種類つくるなど、さまざまな工夫を凝らしました。

頭蓋骨を削る機械もあります。頭蓋底の神経や血管の周りを削るのですから、安定性のいい高速のパワードリルが必要です。高速電気ドリルは性能がいいが熱を持つという欠点がある。そこで、水冷式と空冷式を開発して特許を取った福島ドリルが、全世界で使われています。針、糸、コットン、アンチフォグマスク、通気性キャップに至るまで、挙げればきりがありませんが、来る日も来る日も、何かいいこと、何か新しいこと、何か世界を震撼させることができないかと考えています。

鎌田 先生が開発された機器は、世界中に何百台、何千台とあるのですか。

福島 何万のオーダーでしょうね。世界のトップ・ブランドですから。しかし、地方の病院などに行くと、私の開発した手術器具をきちんと備えているところは少ないので、いつも600種類の器具を収納したケースとともに移動しています。

いま脳外科医療にはコンピューター、ロボティクス、血管内手術とか、いろんなハイテク機器が入ってきて



福島先生の関連書の一部

いますが、あと50年は緻密な手作業というか、フィンガー・ワークが最高の結果を出すかなめでしょう。脳外科以外の外科や整形外科はハンド・アーム・ワークですが、脳外科は指先のミクロン単位の動きができないといけませんので、スーパー・マイクロ・サージェリーといいます。この分野ではあと50年は私と弟子たちの「福島国際グループ」が世界に君臨すると思うので、それだけの誇りを持って世界中を回っています。

渡米して高く評価される

鎌田 先生は、日本の医学教育、あるいは医療体制をどういうふうに見ていますか。

福島 日本の大学システムは明治、大正のころから変わっていません。厳然たるハイエラルキーです。いい仕事をしていても、まだまだ若いと言われる。私が37歳で三井記念病院の部長に推薦されたとき、病院長から「若過ぎます。40歳を超えなければ、三井のような一流病院の部長にはなれません」と言われました。それに対して、推薦してくださった佐野教授が、「間違いのない人ですから、1年使ってみてください」と言ってくれました。そこで部長になって、毎年手術の症例を倍々にして、三井の脳外科を全国一にしたのです。

吉川 先生のご本によると、三井記念病院で部長を10年務められたあと、そのまま病院に残らずにアメリカに行かれたとか。

福島 「そろそろ教授に」という話があったのですが、日本の大学の教授選考基準はとてもおかしいのです。まず、人脈、金脈、それから同窓会の意向などが重視されます。学術業績も、内容ではなくて論文の数とかね。最近は少しは良くなってきているようですけども。私は当時、外国で発表したものを含めて200本近くの学術論文を書いていたし、先ほど言いましたように、「鍵穴手術」を確立して世界的に注目され、病院での治療も実績をあげていました。それでも、いくつかの教授選考会で見事に拒否されてしまったのです。

そこでもう日本に失望して、教授として招聘したいという要請を受けていたカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に行くことに決めたのです。1990年、47歳のときです。

私は日本男児としての誇りと、自分のやっている脳外科の分野ではだれにも負けないぞ、全米制覇、世界制覇をするんだという気概でアメリカに渡りました。しかし、東大の超アウトサイダーといわれていたから、そんなじゃじゃ馬なやり方がアメリカで通用するだろうかと思っていました。ところが、やることなすこと全部当たって、複雑な脳腫瘍と頭蓋底の手術ではアメリカでだれにも負けない、という感触をもちました。

UCLAで頭蓋底外科部門を創設して活躍したあと、南カリフォルニア大学（USC）に招聘されました。今回は医療センターの脳神経外科教授です。ここにいるあいだに、頭蓋底外科では西海岸でナンバーワンとして知られるようになりました。

それからピッツバーグにあるペンシルベニア医科大学に招聘され、そのアルゲニー総合病院・脳神経外科教授になり、その次にいまのデューク大学に移って13年です。アメリカではとても高く評価され、大事にされています。やればやるほど認められるアメリカには非常に感謝しています。

日本は、やってもやっても認められないし報われない。へたをすると、自分のやったことを「オレがやった」と言えない国なんです。

鎌田 日本は、戦後、アメリカ的な、民主主義的な体制を取り入れたはずなのに、どこでどういうふうに関違ったのですかね。

福島 日本の大学病院には講座制と医局という封建的なシステムがあります。そのため、1人の主任教授がピラミッドの頂点に君臨し、医局を取り仕切っているのです。この教授の意見にはだれも逆らえません。「教授、こんなふうにしたいんですけど」などと言えない。

日本は約1億2000万人の人口で医学部・医科大学が80近くありますが、これは多過ぎます。人口約3億人のアメリカに医科大学は120しかない。人口比で言えば日本は50もあれば十分です。そして、やる気を起こすために、全国の国立、公立病院は民間経営にして、自分たちで経営させればいいのです。国鉄でも、JRになってからどのくらいよくなりましたか。

日本には約8,000人の脳外科医がいます。これは世界で一番多いのです。アメリカが約3,800人で、ドイツが約1,500人、イギリスは約200人、スウェーデンも約100人しかいません。日本はバランスが悪い民主主義で、医学部さえ卒業すれば、脳外科医になりたいと思ったらだれでもなれる。アメリカは駄目です。大学でとる

脳外科のレジデントの数は1人か2人と決まっているのです。フランス、ドイツ、イギリスなどのヨーロッパも、脳神経外科専門医は国のメディカル・アソシエーションできちんとマンパワーがコントロールされていて、各国、年間に1人か2人です。そんな歯止めがないのは日本だけの奇妙な現象です。

神様に助けてもらう

鎌田 先生は手術をされる時、明治神宮に向かってお祈りをされるそうですね。それは、ここをクリーンな状態に保つためですか。

福島 そうですね。やっぱりリスクがありますからね。私のいままでの経験から、リスクがどのくらいかはだいたい分かります。生きるか死ぬか五分五分という手術もあります。そういうときには、自分の持てる全力を尽くしますが、あとは奇跡を起こさないといけないので、神様に助けてもらいます。

また、年にだいたい600人手術する中で、2～3人は手術後に、たとえば手足が弱くなる、視力が下がる、聴力がなくなる、などの症状が出る可能性があります。今日のはむずかしいと思ったら、神様に祈るしかありません。そうすると、信じられないようなことも起こります。

鎌田 奇跡のようなこともありますか。

福島 あとで振り返って、どうしてこんなにうまくいったんだろうというケースはたくさんあります。もう感謝の日々です。つい1か月前も、イタリアから患者さんが来しました。右の目が見えなくなって、ちょっと頭がおかしくなってきた。脳の動脈瘤です。血流が悪くなっているので、特殊なバイパス手術をしました。とてもむずかしい手術で、あとで何か出るかなと思っていましたが、信じられないくらいうまくいきました。

鎌田 手術のときに白足袋をはかれるそうですが、それは精神的な効果を及ぼしているのでしょうか。

福島 もちろん、お能の舞台に上がるような、厳粛な気持ちでやらなければならないということもあります。それに、手術のときに白足袋をはくのは、脳外科の手術は一切汚れない、きれいな手術でなくてはいけませんからです。よその脳外科の手術を見たら、もうどろどろです。

それから、私は手術のとき両手両足を使うのです。顕微鏡を見ながら手を動かします。同時に、顕微鏡のズーム、フォーカシング、電気メス、ドリル、超音波、ナビゲーションと、足元にペダルが8つくらいあります。それを左右の足で操作しなければいけない。

鎌田 ドラマーみたいですね。

福島 そうです。実は私は学生時代にジャズに凝って



顕微鏡を覗きながら手術をする福島先生

ドラムを叩いていたので、それが役に立っているのかもしれない。靴をはいてはそんな細かい操作はできないので、白足袋をはくのです。白足袋が一番いい。ガラスも針も刺さらないし、自由に操作できるし、非常に神聖で、きれいで、ところが引き締まる。でも、白足袋をはいて手術するのは世界でも私だけでしょうね。

名医を育てる全世界プロジェクト

吉川 先生は若手医師の教育にも力を入れていらっしゃいますね。

福島 私1人がどう頑張っても、1年間にこなせる手術の数はせいぜい600件です。脳腫瘍の患者さんは全世界に何千人、何万人といるのですから、安心して任せられる名医を育てなければなりません。私のところには、私の手術を見たい、勉強したいという脳外科医が世界中からやってきます。彼らには滞在中の面倒もできる範囲でみています。どこの国でも、だれでも、勉強したいという医師はいつでも大歓迎です。

2001年には米国公益財団の「国際脳神経外科教育研究基金 (INERF)」を立ち上げました。これは名医を育てるための全世界プロジェクトです。学生、研修医、脳外科レジデント、専門医を含めて、高度な技術を実習し、患者さんのために死力を尽くす精神をもった脳外科医の育成を進めています。

この財団の予算は年間3000万円。私が開発した「福島式機器」のpatent料やロイヤリティの全額と私財を1500万円出し、あとは私の考えに共鳴してくれる病院や個人などから寄付を受けています。

脳外科医の指導は非常に厳しくやっています。私みたいに厳しく教える人はいません。ほとんどの教授は、「私がやるのを見て覚えなさい。それができないようなら見込みがない」というやり方ですが、私はそうじゃない。「こうして、こういう角度で、こうやるんだよ。やっごらん」と手取り足取り、事細かにすべてのコツを伝授します。

鎌田 しっかりと、いいコーチングをしているわけですね。そこで弟子たちも、すぐれた術者に育っていく。

福島 これからの医療はよりいっそうの努力と臨床の勉強が必要です。それなのに、みんな努力が足りない。だから、「人の2倍働き、3倍努力しなさい」と言っています。普通の仕事をしていたら普通のお医者さんにしかなれません。トップの医者になりたいんだしたら、みんなが休んでいる土日に働きなさい。家族には許しを請いなさいと。

いまの日本のお医者さんは、大学の医学部を卒業し、国家試験を通過して研修医になり、可愛い看護師さんと結婚して、小さな家庭を築いて、そこそこいい人生が送ればそれでいいというような人が多いです。日本一、世界一になる、どんな患者さんでも治す、という前進改革の気概がありません。

私は脳外科を選んでとてもよかったと思っています。脳外科はワンマン・プレーなんです。私の指先ひとつで決まる。だからゴルフに似ています。同じ医学でも、たとえば、心臓外科、胸部外科、移植外科などはチーム・プレーが大事です。だからサッカーやバスケットに似ています。

鎌田 タイプがあるんですね。

福島 脳外科は手術をする主治医によって患者さんの運命が決まってしまう。だから、私はいつもゴルフにたとえて、「最低パーを取りなさい」と言っています。脳腫瘍を取って、ほんの少し何かが出るのは許容範囲でパー、脳腫瘍を取って何も出ないのがバーディで、いつもバーディか、その上のイーグルを目指しなさいと言います。実際の患者さんの治療で、ボギー、ダブルボギー、トリプルボギー、OBは許されません。

人間としての道徳教育が必要

阿部 日本の若い人たちにはいま何が必要でしょうか。

福島 まず人間としての道徳教育が必要です。日本本来の道徳と精神を幼稚園からきちんと教えることです。こころの学習をしなかったらろくなものにならない

い。

いまは公教育で神道を教えることはできませんが、神道は宗教というより日本国民のこころの拠り所であり、精神の鍛錬ですから、日本人のスピリットなのです。人間として、日本人として、やらなければいけないこと、やっいいいこと、絶対にやっはいけないこと、つまり神の道、道徳が神道なのです。これをしっかり教育することが大切です。いつ神様に見られても恥ずかしくない振る舞いをするのです。私は神道の精神に則って、「神様、私は間違っことをやっいませんね。神様にお褒めをいただくような仕事をしたい」といつも思っています。

昔から日本人は、強きをくじき弱きを助けるというサムライ・スピリットがありました。いまの子どもたちはそういう教えを受けていないから、いじめなんかが起こる。

明治、大正のきちんとした家庭では、毎朝、「お父様、お母様、学校へ行ってまいります」と言っ出かけました。いまは礼儀作法がない。言葉遣いができていない。漢字が書けない、読めない。情けないですね。

そして、若い人には日本人としての誇りと気概を持つてほしい。「気概」と言えるような強い意志を持った若者が、いまいないですね。他国のドラマとお笑いだらけのテレビでは日本沈没です。

子どもさんの通知表にみんな3をつけるとかうをつけるとか、運動会で順位をつけないとか、ゆとり教育とか、何を言っているのかと思います。韓国や中国なんか、国を挙げてものすごい英才教育と愛国教育をしています。

この人は物理、この人は医学、この人は心理学、この人はアート、この人はスポーツと、それぞれのお子さんの能力を見だして、その方向で最大限に伸ばすように手助けするのが教師の役目です。

「こころ」というのは教育と学習によって育つものです。一部の私立の学校は「質実剛健」「勉学第一」という方針でやっしていますが、それを除くと、日本の公立学校はみんな駄目です。人間が形成されていくのに一番大事な小学校、中学校、高校の教育がない。

鎌田 幼児教育からなっいませんね。

福島 親も駄目、先生も駄目、政府も駄目、文科省も駄目。いったいどうなっしているのですか。アメリカでは幼稚園のときから毎朝星条旗を掲げて、「アメリカ、アメリカ」とやるのです。中国も韓国もそうです。

前に日教組の全国大会の記事を読んだことがあります。沖縄の先生が、自衛隊は憲法違反で、日の丸は軍国主義の象徴であるということを生徒にやっ分から

せました、なんていうことを誇らしげに発表している。愛国心なんかないんです。オリンピックで金メダルをとって、「なでしこジャパン」(サッカー日本女子代表)が世界チャンピオンになって、日の丸が揚がった。これで涙を流さなかったら日本人じゃないですよ。

運動会で順位をつけなくて、だれが頑張るのですか。そんなことを言っていたら、オリンピックでメダルもとれない。情けないですね。私は現在の日本の状況については大変に憂えています。

吉川 私は海外出張でJALとかANAの便に乗ると、他の外国の航空便よりもくつろいだ気持ちになります。乗務員のサービスというか人あたりがどこか違うんです。心をこめて人に接する日本の文化や伝統が、そういうところに残っているように思います。

日本の若い人たちに言いたいこと

福島 日本の若い人たちに言いたいのは、常に前進、常に努力ということ。阿部さんは神経科学の基礎研究者ですか。日本一、世界一のことを何かやってくださいよ。日本は叡知とマンパワーしかない。だから、戦争中は「月月火水木金金」、休まず働け。それぐらいの気概がなければ駄目だと言われました。

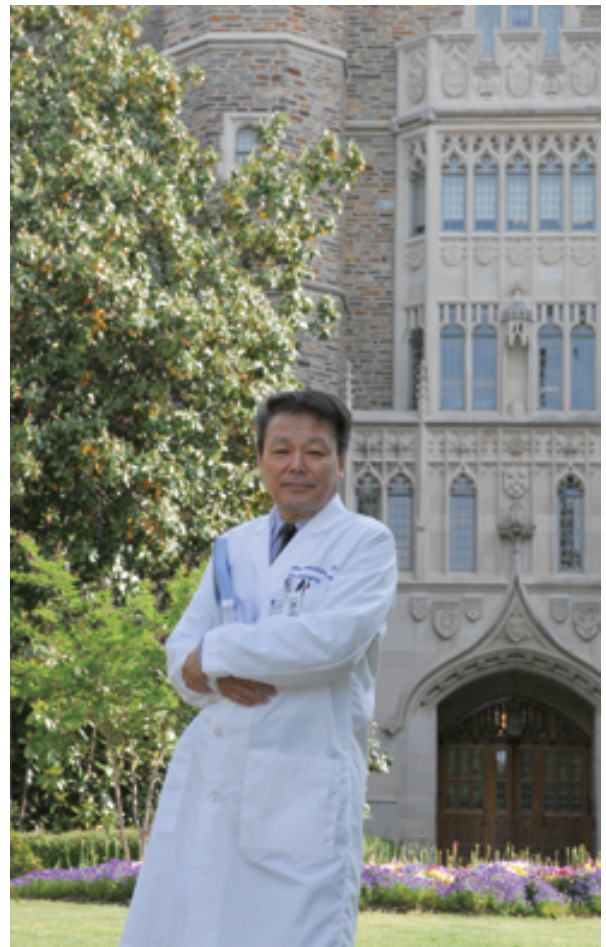
日本は欧米から「日本人は働き過ぎだから休め」と言われてそのとおりにしました。でも、週休2日制なんてとんでもない。かつて日本は土曜日は少なくともお昼まで仕事でした。私はそれに戻すべきだと思います。土日を休むと、何となくテレビを観たり、どこかへ行ったり、遊んで過ごして、人生を無駄にしているわけです。それで月曜日は休みボケであまり働かない。1年間に土日を休んだら104日です。日本はナショナル・ホリデーが世界一多い。国民の祝日が15日もある。なんでこんなにつくるのか、さっぱりわかりません。全部合わせると、約120日がオフィシャルに休みなんです。つまり1年のうち3分の1は働いていない。その上に、春休み、夏休み、冬休み、暮れ、正月でしょう？ おそらく日本人は1年間のうち半分は働いていないんじゃないですか。

東京や大阪の繁華街を歩くと、若い子たちが奇妙奇天烈な格好をして歩いている。何を考えているのかと思います。親はあれがいいと思っているのですかね。

吉川 若い人たちは、何かきっかけがあったら、がらっと変わりますよ。

福島 だから、教育が大事なんです。

鎌田 いま東日本大震災のボランティアに若者もけっこう行っています。阪神・淡路大震災のとき、「ボランティア元年」と言われました。こういう展開がいい形になるように、私たちがいろんな働きかけをしなければ



デューク大学キャンパスにて

ばいけないと思っています。

官僚国家を打破せよ

福島 それから日本の最大の欠点は、無数の規則と許認可制でがんじがらめのコントロールをする中央集権的官僚政治です。官僚構造と外郭団体を調べたらびっくりします。少し前まで、国家公務員が約100万人、地方公務員が約300万人いたのです。また、霞ヶ関の中央官庁の外郭団体は、17省庁で9,000あります。厚生労働省、外務省はとくに多い。厚生労働省だけで外郭団体が900あります。医薬品、医療機器の関係だけで50ぐらいある。そのうち、国民の税金が補助金で垂れ流しになっているところが半分くらいあるのです。いかに国民の税金が無駄遣いされて、高級官僚が天下りして国民の税金をむさぼっているか。この明治、大正以来の陋習、官僚統制システムを打破しなきゃいけない。霞ヶ関で公務員を少し減らしたというけれど、みんな外郭団体に流れています。

高級官僚は天下りと、国民の税金や補助金から自分の高給と退職金を得ることしか考えていない。中から下の官僚は、裏金づくり、カラ出張、あずけ空注文、居酒屋タクシー、年金ネコババ……。モラルがないん

です。

鎌田 日本はいつからそういう体制になったのでしょうか。

福島 明治のころから連綿と天下り先をつくってきた結果です。

鎌田 じゃ、明治維新の改革自体に問題があった。

福島 いや、問題は戦後の誤った社会主義的・左翼的教育です。明治維新から大正、昭和中期までは大和魂や侍魂と、人間としての道徳がありました。

鎌田 いまは国民意識・国家意識もあまりない。

福島 ありませんね。そして、税金の無駄づかいの一番は世界一多い公共事業費です。学校、体育館、道路、ダムなど、公共事業費はかつて60兆円あった。それが反省されて、いまは50兆円と言われていますけれども、そんなに必要ない。20兆円で十分です。先進諸国G7で全部合わせて20兆円ですから、その3倍近いお金を日本国内で土木建設会社にばらまいているわけです。

それから、日本は議員の数が多すぎます。人口に対して世界一議員が多いんです。衆議院は米国上院と同じ100人もいればそれでいい。議員というのはいったん数を増やすと、縄張りやテリトリーがあるから減らせなくなる。

私は道州制、地方分権大賛成なので、ドイツ方式です。ドイツは、各州が全面的な自治をしています。アメリカもそうですね。ワシントンが何と言おうが、最高裁が何と言おうが、各州の自治が認められているのです。

もうひとつ、日本が駄目なのは、国民が国家首班を選べないということ。自民党と民主党の勢力争いや派閥の中で決まっていくから、国民は選べない。

吉川 いまはヨーロッパもガタガタですね。

福島 ヨーロッパなんか破産ですよ。フランスもイタリアも破産です。いい国はドイツだけ。だいたいヨーロッパ人は働かせません。

日本は何も資源がないから、マンパワーで一生懸命働いて、知恵を凝らして、世界各国のどこよりもいいものをつくって、少し安く売るというやり方で、産業経済と輸出で成り立っている国です。ところが、いま韓国と中国にやられつつある。アメリカの家電量販店「ベスト・バイ」に行くと、みんなサムスンかLGです。車だって、これからは韓国製、中国製に取って代わられます。メイド・イン・ジャパンは、まだかろうじてデジカメや時計でセイコーとかカシオとかが頑張っていますけれども、テレビなんかまったく駄目です。全部韓国製品です。

父は明治神宮の宮司

鎌田 先生のお父様は明治神宮の宮司さんだったんですね。

福島 父の信義は、宮司の時代を含めて64年間、明治神宮に奉職しました。私は明治神宮のお膝下、原宿の外輪町で生まれ、原宿から代々木に移って、ずっと明治神宮で育っていますから、明治神宮は庭みたいなものです。ですから、明治神宮は私にとってこころのふるさと、こころの拠り所です。

鎌田 私も明治神宮で竜笛を習って、結婚式も明治神宮だったんです。

福島 明治神宮は1945年4月の大空襲で、本殿、拝殿、東西廻廊が焼失しました。米軍は空襲の際、病院、大学、博物館などは外したので、国立博物館、上野の東大、日赤病院などは全部空襲を免れた。それから、神社仏閣、浅草の浅草寺とか、ああいうのは免れているのですけれども、明治神宮は焼夷弾で全部焼かれたのです。

そして、戦後、マッカーサーは明治神宮を国民公園にしようと思いました。

私の父は、最初、東京外国語大学で哲学を専攻したあと、國學院の神道部で学んで神官になったので、当時、明治神宮の神官の中でただ1人英語に堪能だったのです。そこで、皇居前の第一生命ビルにGHQがあったのですが、そこに行って、「明治神宮を国民公園にすることはできない。明治神宮は日本人のこころの拠り所です。あなた方は日本の国を占領できても、日本人のこころまで占領することはできない」と言った。それで明治神宮が守られたという話があります。

吉川 そんなことがあったのですか。

鎌田 それは昭和21～22年ですか？

福島 いえ、終戦直後です。明治神宮は日本人の天皇崇拜、軍国主義の象徴と考えられました。

鎌田 国家神道の施設として潰そうとしたんですね。

福島 そうなんです。結局、明治神宮は残されることになり、父が新社殿造営を担当する部長に就任しました。全国から浄財を募り、宮大工さんや職人さんを集めて進められました。明治神宮の社殿は、寸分変わらず、戦前のおりに復興したんです。昭和33年に再建され、本殿遷座祭遷御の儀が執り行われました。だから、いまの明治神宮は50年以上経っています。

父に3回勘当された

福島 父は宗教家であり教育家であり哲学者でした。日本人として知っておくべき礼儀作法をまとめた『日本礼法』という本も書いています。いつも「胸を張り



明治神宮は福島先生の心の拠り所である(写真:明治神宮)

背筋を伸ばせ」「お金のことを言うな」「世のため人のために尽くしなさい」と言っていました。

父の実家は東葛飾郡に20万坪の広大な土地をもつ豪農でした。戦後の農地改革でほとんど取られました。それでも2万坪残っていました。父はそれを一切遺産相続しなかった。祖父は世のため人のために、息子の1人は医者にし、1人はお坊さんにし、1人は神職にする、ということで父が神主になりました。

父は明治神宮への奉仕が最優先で、家庭のためには何もしませんでした。それを支えたのが母でした。

吉川 お母さんはどんな方だったんですか。

福島 母は深川の富岡八幡宮の宮司の娘で、府立深川高女を出た才媛でした。私は母親っ子でしたから、いつも母のそばにいました。

鎌田 神主の息子として生まれて、そういう使命感をずっと持っていくのは大変ですね。

福島 私は中学のときは悪がきで、番長グループに入って喧嘩ばかりしていました。学校はおもしろくないし、先生はおかしなことを言うし、学校はあまり行かなかったですね。それで、福島家の息子としてふさわしくないということで父に3回勘当されました。

鎌田 ずいぶん異分子だったんですね。そういう生活から違う方向に変わったのはいつぐらいからですか。

福島 高校受験のときと大学受験のときです。高校受験のときに、「いい高校に入らないと大学に行かれないよ」と母に言われました。それで猛勉強して、元の四中の戸山高校という受験校に入ったからよかったです

けどね。母がいなかったら、私は医者になれていなかった。きっと新宿あたりでヨタっていたでしょうね。

吉川 アメリカでお仕事をされることに、お父さん、お母さんは何もおっしゃいませんでしたか。

福島 むしろ母は、「狭い日本にいたらダメです。どんどん世界に出なさい」と言いました。

晩年の父もすごかった。清廉潔白で、お金のことは一切口にしない人でしたが、神社はそれまで国が管理していたのが宗教法人になったので、明治神宮も自分たちでやっていくために財政の基盤をつくらなければならなくなりました。そこで、もとの憲法記念館を結婚式場にして、明治記念館を拡充、神宮外苑に都内最大の30面のコートをもつテニスクラブをつくり、和食、洋食、中華、フレンチのレストランをつくり、引き出物の会社をつくりました。そういうビジネスを父がみんなやったのです。哲学者で教育家なのに、よくあれだけのことができたものです。そういう意味では偉い人だったなと思います。

吉川 最後に、先生は死についてどんなふうにお考えですか。

福島 私は父も母も亡くなっています。兄と弟がいまいましたが、どちらも亡くなってしまいました。ですから、私はいつ死んでもいいように、毎日一生懸命働いて、悔いのない生活を送るようにしています。私は過去のことはあまり悔やまないほうですね。

(2012年7月20日、湖東記念病院にて)

舞踊から見た「いのちとこころ」 — 着る身体(possession)と脱ぐ身体(ecstasy) —

木村はるみ (山梨大学大学院教育学研究科准教授)

Harumi KIMURA



群馬県生まれ。1986年、筑波大学大学院博士課程体育科学研究科満期退学。1991年、文部省在外研究員(ロンドン大学付設ラバン・センター)。1998年、文部省内地研究員(東京大学大学院総合文化研究科)。現在、山梨大学大学院教育学研究科身体文化コース准教授。2012年、京都大学こころの未来研究センター内地研究員(鎌田東二研究室)。研究テーマは宗教・舞踊・演劇における身体。

人間はいつの頃から踊ってきたのだろう。世界各地には、さまざまな芸能・舞踊がある。日々の生活の中に溶け込んでいた祈りの所作やおどりの所作はやがて、年間の宗教行事となり、さらにそれを専門とする宗教職や芸能集団を作り出し、見る側とみられる側の構造は、そのまま今日の宗教行事や舞台芸術へとつながっている。

東西の宗教文化は、中世期に舞台芸術の萌芽となる芸能や演劇を発生させている。我が国の場合には大和猿楽の発生であり、芸能者は内に呪術的な力を持ちながら能楽という伝統芸能を出現させた。天界や異界の存在そして祖先や死者たちと交流し戯れながら、歌い舞い踊る。そしてある日ある時を語り継いでゆく。神

話や伝説は民族や部族、共同体の記憶である。私たちの身体はその記憶を貯蔵し伝える装置でもある。神々の世界以上に身体は深く興味深い。

舞踊家の身体は特殊である。何年何十年という月日をかけて稽古を重ね修行を積み、変容した身心は舞台の上で美と力の輝きを放ち、観る者を魅了する。この身心変容の背景には長年の試行錯誤とインスピレーションに裏付けられた「技法」の存在がある。表現者の身体は自分の心情を超えて、もっと多くのモノを語り始める。日本の伝統芸の多くは一子相伝の秘伝であるが、しかし、アヴァンギャルドで実験的な演劇はいつも新たな挑戦をし、人間の身体表現技術を更新してきた。技法には精神性が込められている。からだのワザを習得し練磨する中でこころのワザを習得し練磨されてゆく。

個人がシャーマニックに踊る中でマジカルな空間が現出することもあれば、集団の陶酔が異次元の空間を作り出すこともある。舞踊による空間が創造され、時のない世界、アイオーン(永遠)が現れる。

舞踊者の身体は時間と空間を作りモノ語る装置であり捧げものである。

舞台「ハヤサスラヒメ(速佐須良姫)」 における舞踏者の身体

2012年12月1日、世田谷パブリック・シアターにて笠井勲・麿赤兒による舞踏公演「ハヤサスラヒメ(速佐須良姫)」を鑑賞した。2人とも舞踏というジャンルで50年舞台活動を続け、独自のスタイルと身体を持つ巨匠である。この2人の舞踏が織りなす物語の背景を天使館と大駱駝艦の男性ダンサーと女性オイリュト

ミストが彩っていた。70歳になろうとする2人の日本人の男性舞踏手は「舞踏」と言われるジャンルに属するが、舞台の形式はスペクタクルなバレエであった。

若手の男性ダンサーたちは、両舞踊団ともほぼ裸体に近く、大駱駝艦のダンサーは坊主頭に白塗り禪姿、睨みの効く面構え、天使館のダンサーは上半身裸で腰には軽くエレガントな足首まであるロングなフレアースカート、頭も茶髪のロング・ヘアを縛ったり、ショートだったりの自由な感じであった。二つの舞踊団のダンサーとも、激しく動き、形をとり、舞台の中を駆け抜ける。にらむ、からむ、すべる、みせる。どのダンサーも100パーセントの力を出すものすごい気迫で、最前列には汗が飛び散るほどであった。しかし、そのクオリティーはまったく違っていた。

「からだ 身体を脱いで始めてください」

1980年代の後半に初めて笠井勲氏の指導を受けたとき、レッスンに入る前に、柔らかく静かな声で笠井氏は、生徒に話した。「からだを脱いで始めてください」。これは、魔法の言葉のように集まった者の態度を一瞬で変容させた。私たちは、身体を鍛えるために来たのではないらしい。そして、ゆっくりと歩行の練習から入った。当時、笠井氏はオイリュトミーのメソッドをドイツで習い、帰ってきたばかりであった。70年代の暗黒舞踏のイメージはまったくなかった。

さて、話を「ハヤサスラヒメ」の舞台にもどすと、笠井門下の天使館のダンサーは身体を脱いでクライトを

纏い、オイリュトミーのレッスンをしてきた人たちである。こういってよければ地上的な身体を脱ぎ捨て、天界的なダンスを行うためのカラダを獲得している。対して、鷹門下の大駱駝艦のダンサーは地上に縛られた肉体という現実を凝視し、練りながら、鍛えられた身体を獲得してきた人たちと言える。舞台での質的な差異はここにあったのだと思う。同じ時空間で演じたかのような彼らの身体のベクトルは、実は逆であったのではないかと。われわれは、身体を脱ぐことも着ることもできる。舞踊文化における身心変容について考えるにあたって、この観点は興味深い。

舞踊と演劇 (Presentation と Re-presentation)

「悲しそう」「思わず泣いた」これは、表出のレベルであって、表現ではない。expressiveにsadであるのと expression of sadnessは異なる。表現は意図的に行われたら演技(振りをする:pretending)であり、虚構である。「わたし」は全然悲しくなくても、俳優は悲しそうに涙まで流す

のである。そして私たちはそこに人間の悲しみの表現を見て取る。技法はどちらに働くだろうか。見せるためには、悲しくない私を悲しい私に変えなければならない。これは演劇である。悲しいままに動いた(踊った)結果、悲しくなくなっても、悲しいままでもその動きは虚構ではない。この2つの状況であっても、観客は悲しみのサインを読むであろうし(あるいは勝手な解釈をするだろうし)、身体が日常感情の意味を伝えるだけの道具であれば、このレベルの演技は、技術なしでも巷でよく見られる。誰も他人のこのころの内はわからない。本人だってわからない。本当のことは誰にもわからない。だから、真実を示す身体に出会うと驚くのである。

舞踊における運動の生成と技法

1960年代にThe Phenomenology of Danceを書いたM.Sheetsは、動きの発生に人間感情の形(form)を置いており、これは今日の情報工学領域での3D動作情報によるプリミティブ動作からの自動生成の発想とは異なる。深層に働く実の力(actual force)が表層の虚の力(virtual force)を作り出し、幻影(illusion)としての舞踊の動きを作り出しているという現出構造である。

また、人間の日常感情が形式にまで発展しまとまった連続体となり、運動形式と対応し、さらに意味と恣意的に結びついていることを指摘した上で、舞踊家のような芸術的な運動は、純粹感情から生じ、発展した形式となり、日常の意味を離れた運動形式と対応し、その動きは芸術的な意味(意義)と必然的に結びついていると論じている。

舞踊の動作は意味論を離れては語れない。しかも日常を離れたシンボリックな形式によって語られる意味(意義:import)についてである。すなわち舞踊者の技術には、この意義と形式を結ぶ体系も関わっている。

しかしながら、舞踊を演じるもの(行為者)の側からの説明では、動作中の意識は、常に変化している運動形式(movement form)の連続を形成している意識(form-in-the-making)なのである。そしてこの運動形式の連続が「踊っている」「舞っている」という「力の幻影illusion of force」を発生し、純粹でダイナミックな力の流れとして舞踊を生成しているのだと説明している。すなわち舞踊者の指向性はダンスの全体へ、そして意識は個々の変化する運動形式へと向けられている。言い換えれば、舞踊という幻影の中で動いて初めてその運動は「虚の力」となり、舞踊者は舞踊中は運動形式に対する意識がなく、舞踊と舞踊者の関係はエクスタティックなものであり、かつその運動形式は有機的な力の連続の内に幻影産出の構成要素となり、ひとつ



図1 舞台「ハヤサスラヒメ」より。上は鷹赤兒(左)と笠井穀、左下は天使館のダンサー、右下は大駱駝艦のダンサー(©神山貞次郎)

の動きは過去に行われた事柄と、未来に行われる事柄とを含んだ現在形として運動形態 (movement Gestalt) となる。

このような現出構造から技法を捉えると、技法の在り方には以下にあげる個々の要素が階層的に関連し機能していると考えられる。

①運動形式に対応する技法

多様な動きを集約したポーズのような動きの習得

②虚の力に対応する技法

ダイナミックラインの意識化

③運動様式に対応する技法

ダイナミックラインの取得を前提として各ダイナミックラインが無意味な抽象的な流れや配置に終わることなく、import (意義) という純粹

な感情を指向することによってダイナミックラインをまとめあげること

ある様式に対して技法の中核をつかみ学ぶことは個人を生かしつつ、技法による単なるコピーではなくて生きる人間の存在が主体となってその様式を生かすことにつながり、その様式によって主体もまた生かされることへと発展する。

「この肉体は楽譜を書き込む台紙であり、絵の具をのせるキャンパス」
坂東玉三郎

これは、坂東玉三郎のHP上で女形について書かれた芸談の中の一文である。肉体に書き込まれた楽譜を身体が演奏するのだろうか。そして化粧に衣装、髪と道具で描かれた立体絵画なのだろうか。歌舞伎とは、そういうものなのか。

2012年は2回、坂東玉三郎の舞台を鑑賞した。6月に京都四條南座での『壇浦兜軍記』の「阿古屋」と「傾城」、11月に、こんびら大芝居(旧金丸座)で、第一部『雪』『鐘ヶ岬』第二部『いぶき』(鼓童との共演)である。7月に人間国宝になった前後であった。

四條南座では、その豪華で艶やかな女形の演技に感動し、7月は、人間国宝になった男性の玉三郎のインタビューなどをテレビで見て、11月は、江戸時代の舞台空間の中で、振り袖姿の愛らしい娘の情感と鼓童の太鼓軍団の中へ舞い降りた天女のような純白のドレスの玉三郎を鑑賞した。どれも同じ人間とは思えない。もし、別な人であっても不思議ではない、しかし、確かに玉三郎であった。私の観劇した前日に、お忍びで金刀比羅宮にお参りに行ったようである。神社の人がそっと教えてくれた。「かわいらしい、とっても謙虚なひとでした」。昇殿も遠慮したくらいの謙虚さであったという。

「楽譜を書き込む台紙」としての肉体論で気になるのは、「譜」にするという作業である。

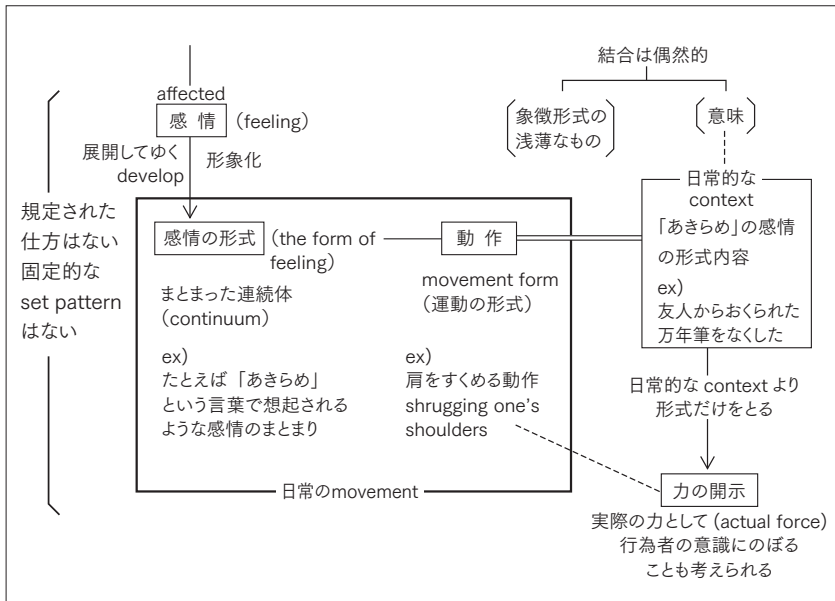


図2 日常感情の形式とその身体運動による現われ

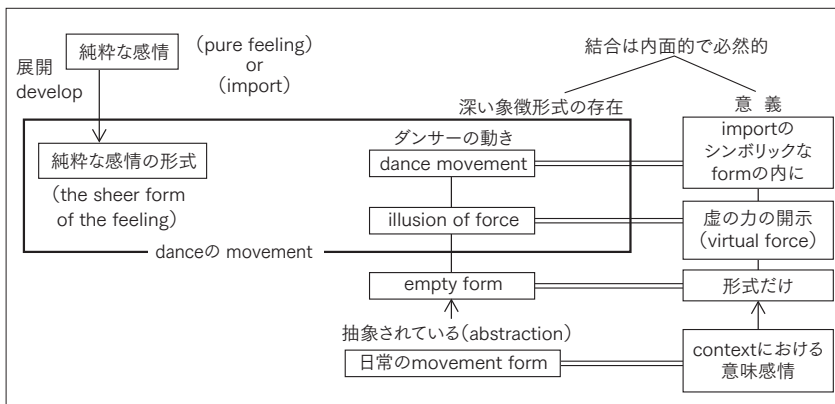


図3 ダンスにおける感情の展開とその身体運動による現われ

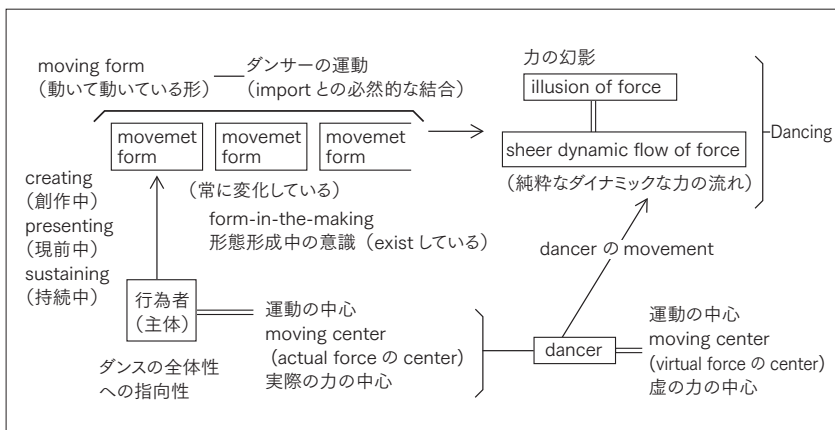


図4 ダンサーの意識とその運動としての現われ

(図2・3・4 作図:木村)

譜の書き込まれていない台紙はただの紙である。では、肉体にとって譜とは何か。すこし、舞踊譜の話に移りたい。

舞踊譜(ダンス・ノーテーション)

楽譜は紙に書かれ、人間の感覚(視覚)で読める形をとっている再現のための指示記号の体系であり、作品再現のための配列である。人間が共通に理解するルールに拠って作られ、再現やアイデアの備忘・構築などにも使用される。音楽や器楽演奏では、よく五線譜が使われ、時にグラフィック・スコアなどの独特な楽譜もある。そのものを指さして言い当てるのではないやり方で、何かを正確に言い当てたい(referしたい)ための枠組みとその中で有意味に働く記号体系である。

一方、舞踊譜は身体動作の再現のための譜である。音楽のように一般化されなかったが、20世紀にルドルフ・フォン・ラバンによって考案されたLabanotationは、アン・ハッチンソンによってさらに整理され、隔年に国際委員会会議も開かれている。現代舞踊の名作や諸外国のフォーク・ダンス、儀礼的所作などの記述もスコアとなっており、映像資料とも併用しながら再演やレパトリーレッスンに使用される。名作の振り付けの分析にも有効である。舞踊のスコアも音楽のスコア同様に、作品を記述するのであって実演を記述するものではない。スコアを解釈し自分の身体で演奏するのである。また身体運動の質的な記述にはeffort/shape記述がある。これもラバンの考案であるが、Marion Northによって感情のアセスメントやセラピー、舞踊教育に応用された。日本にも線画と歌で書かれた一人稽古のためのおどりの譜がある。また古くは雅楽の舞楽譜のように舞名目で記述したものや能の型付けなどもある。しかし、基本的に口頭伝承の世界であり、あくま



図5 春日大社巫女舞のお辞儀

これを「お辞儀」という動作単位で表現できるが、このお辞儀の前に左右の腕が右手に扇を持ったまま、下から開かれ、水平になる手前の45度くらいのところで肘から曲がり、下腕だけが上昇してゆくのがわかる。上がってゆく下腕は手首まで伸びた垂直のラインを描いたところで静止し、その後、先ほどの経路を辿るように降りてくるが、その両腕が降りてくる時に上半身は前傾となってゆき、両腕を内側に納めるようにしてお辞儀の動きに入る。

この動作をYour move というアウトラインを記述するLabanotation系の記譜法で書くと図6のようになる。なお、スコアは、下から上に読んでゆく。(撮影・譜作成:木村)

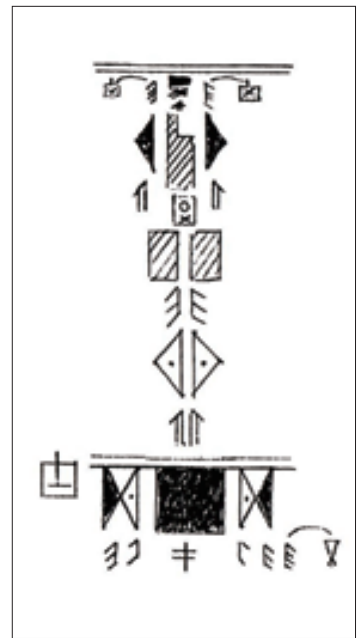


図6 春日大社巫女舞のお辞儀の記譜

でも個人の備忘のためである。忘れないための記号。忘れたくないための記号。玉三郎の肉体にはこの忘れないための無数の記号が書き込まれているのだろう。

身体と象徴

身体の状態は、思いを現出させる。舞踊は身体を見ているようであるが、実は思いを見ているのである。虚実が同居する状態である。形がここに影響したり、ところが形をつくるという、感情と形式の不可分の結合には意味が発生する。意味の世界から与えられた形は思いを見せる記号である。文化コードで読むものも多いが、人間の造った約束事の束ではないものが、そこには含まれている。普遍の象徴の存在である。人類に刻まれたコードを通して、各文化圏の言語を超えた意味のエネルギーが流れ出す。これを留めたひとつの表現を仏像に見る(感じる)ことができる。一瞬の形であり、永遠の形でもある。いのちの形。彫

像から聖なるエネルギーが帰依する者たちに流れてくる。

「演劇の発生は人間が生まれてからの事柄であるが、舞踊は人間が生まれる前の事柄も含む」(笠井叡)。舞踊をするには神話的な思考が必要である。なぜ、ここにいるのかを問うからである。人間の身体がなぜ、このような形になったのかを夢想するからである。そして動きの必然性をさがす。自分にちょうど良い身体をさがす。自分でよくわかっているものである。今の身体ではだめだとか、だから、もっと何かしなくてはとか、医者に行こうとか、美容院に行こうとか、洋服を買おうとか。お腹がすいていたのか、とか。寝ようとか。本が読みたいとか。舞踊は、演劇に比べ直感的要素・肉体的要素の割合が高い。それは、人間のみならず、他の動物たちも持っている生命に共通の行動や衝動に近い。人間的というよりは生命的とも言うべき、より深いレベルを発端としていると言える。

いのちとこころ チベット仏教の意識——生命論

永沢 哲(京都文教大学准教授)

Tetsu NAGASAWA



1957年、鹿児島生まれ。東京大学法学部卒業。宗教人類学(チベット仏教)、身体論。京都文教大学准教授。現在のテーマは、ゾクチェン密教、ブータン仏教、人類の思考における「微細な身体」の観念の発生と展開、仏教哲学と科学のインターフェース。主な著書に『野生のブッダ』(法蔵館)、『野生の哲学—野口晴哉の生命宇宙—』(筑摩文庫)、『瞑想する脳科学』(講談社)、訳書に『虹と水晶』(法蔵館)、『癒しのダンス』(講談社)など。

意識の転移

ある日のこと、ネパールの行場で、くねくねと曲がる狭いでこぼこ道を歩いていた私は、ペマに会った。20代半ばのタマン人(ネパールに住むチベット系民族)、白い肌に赤い頬をしたグラマラスな美人だ。1年ほど前から、この行場にやってきて、チベット人のラマの弟子になり、密教の本格的な修行に入るための準備の修行を始めていた。いつもにこにこしているけれど、今日は、特別だ。大きな喜びで、まるで全身から、まぶしい光を放っているように見える。

「意識の転移の修行をやっていると聞いたけれど、もう口伝は受け終わった？」

そう聞くと、

「終わったわ。修行もやったわよ。たった1日でしるしが出たのよ」

その答えを聞いて、私はちょっとびっくりした。

「意識の転移」は、心を阿弥陀仏の浄土に送りこむ修行だ。

まずは頭の上の虚空に、阿弥陀仏の浄土を観想する。それから、浄土に生まれ変わることができますようにと、くりかえし祈りの言葉を唱える。観想がはっきりしてきたら、呼吸を制御しながら、意識を心臓からしだいに押し上げていく。そして、「ヒック」という鋭い掛け声とともに、頭頂から抜き出し、浄土に送りこむのである(図1)。

この「意識の転移」の修行を行うと、頭頂が盛り上がったり、穴が開いたり、あるいは黄色い液体がしみだしてきたり、といったさまざまなしるしがあらわれてくる。けれど

も、1週間くらいかかるのがふつうだ(ちなみに私の場合も、それくらいかかった)。ところが、ペマはたった1日で、しるしが出たらしい。

「へえ、頭に穴があいたのかい？」

「そうよ。ちゃんと穴にクシャの茎もさしたわ。ラマのご加持のおかげだわ」(図2)。

「意識の転移」の修行は、もともと「ナローパの6つの教え」をはじめとして、北西インドやベンガル地方で発達した後期密教に由来している¹⁾。「ナローパの6つの教え」の体系にそって修行する場合は、下丹田に観想した赤い炎を、めらめらと燃え上がらせ、身体から強烈な熱と快楽を引き出す「トゥムモ」をはじめとする、他の修行の後に行われるのがふつうだ。

けれども、ペマのように準備の修行を終え、本格的に密教の修行に入る前に行うこともある。それにははっきりした理由がある。密教の修行にはいくつもの段階があり、完成するまでにはかなりの時間がかかる。せっかく修行を始めても、道の途中で、死んでしまうことだってある。そんな場合にそなえるためだ。

それだけではない。特に密教の深い知識を学んだり、修行する機会に恵まれない一般の人に、教えることもある。文字を読むことができず、毎日、観音菩薩のマントラをとるだけの人であっても、導師との深い縁と信仰があって、修行すれば、しっかりしたしるしが出る。標高四千メートルを超えるチベット高原に住む牧畜民たちは、たいへん深い信仰を抱いている。「意識の転移」を学ぶために、時には、数千人の人々が、何日もかけて集まってくることも稀



図1 阿彌陀仏の浄土を描いたチベツト仏画



図2 「意識の転移」によって頭頂に開いた穴に、クシャ草をさす行者 (C.Baumer, 2002)

ではない。

不可視の身体——微細身

この「意識の転移」の修行は、「微細身」をめぐる後期密教の精密な理論と深く結びついている。

後期密教の意識論によれば、生きている間、私たちの心は、肉体を「よりどころ」としており、心と体は、深いきずなでしっかり結びついている。「微細身」は、いわばそのインターフェースにあたるものだ。

「微細身」は、脈管、風、精滴 (Skt. nādi, prāna, bindu) という3つの要素から出来上がっている。受胎とともに、胎児のへそのチャクラからは、頭と下半身に向かって、脈管が伸びていき、まるで豊かに葉を生い茂らせた樹木のようなネットワークを作っていく。その脈管の内部を運動しているのが、「風」だ。全身を運動する風は、異なる波動と色彩を帯びた光であり、生命維持の機能にかかわる一方で、さまざまな情動や思考を「運んで」いる (図3)。

そうした「風」の運動のトーンを作り出しているのが、「精滴」だ。父親と母親から受け継いだ2種類の根源的な精滴 (「赤白の精滴」) を土台にして、食べ物から7段階のプロセスを経て作り出される。この精滴にはいくつもの種類があり、それぞれ、脈管の特定の部分に局在すると考えられているのである。

「ナローパの6つの教え」は、呼吸の制御、観想法、身体的ヨーガといった技法を駆使してこの「微細身」を作り変え、大楽に満ちたブツダの悟りを完成することを目的にしている。

「意識の転移」は、そのなかでも、特に死の準備として、とても重要な意味を持っている。老化とともに、脈管と風は少

しずつ衰え、それとともに、運動機能や五感をはじめとする、さまざまな身体的・精神的機能は、しだいに弱まっていく。

やがて、寿命が尽き、死が訪れる。そのとき、脈管の中を動いている風=意識は、徐々に心臓に収束する。それとともに、何かにのしかかられて押しつぶされたり、ゴォーと鳴る風に追い立てられたり、ある



図3 微細身(イメージ)

いは記憶のパノラマ的想起といった、さまざまな体験が生じてくる。

「意識の転移」は、このとき、意識を頭頂から抜き出し、阿弥陀仏の浄土に、一気に送り込むことを目的としている。たとえそれができなくても、生きている間に「意識の転移」を実修して、心臓から頭頂に上向する脈管を開いておけば、容易に、よりよい再生に向かうことができると考えられているのである。

この死への準備にくわえて、「意識の転移」には、もうひとつ重要な意味がある。それは、意識の多層的な成り立ちや、ひいては「心の本性」を理解するうえで、たいへん重要な役割を果たすのである。

さきほど述べたように、「意識の転移」を行うと、体外離脱の体験が起ることが多い。仏教には、この体験を説明することのできる、「意識の身体」（「意成身」）という概念が存在している。生きている間、私たちの知覚は、感覚にかかわる意識作用（「識」）、肉体の感覚器官（「根」）、感覚対象（「境」）の3つの要素から生まれてくる。それにたいして、死後のバルド（「中有」）や体外離脱の間は、肉体から離れた「意成身」がはたしている。そのことによって、知覚が可能になると考えられているのである。

後期密教は、「風」の概念をもとに、この「意成身」の考え方を、はるかに深く彫琢した理論を育ててきた。体外離脱の体験が起っているとき、意識は、微細な風のエッセンスからなる意成身によって、自由に移動することができる。けれども、それは死後の体験とは、かすかにちがっている。より粗大なレベルの風は、肉体にとどまったまま、生命維持の機能を果たし続けているからだ。

「意識の転移」によって、からだの外に飛び出した意識は、肉体にかかわる粗大なレベルの風の運動から相対的に自由になり、より微細なリアリティを知覚することができる。そ

のため、つねに変転してやまない心の現象を超えた「心の本性」を理解するうえで、大きな手がかりとなるのだと、タントラの伝統は語るのである。

心の本性

では、この「心の本性」とは、どんなものなのだろうか？ それは、ちょうど透明に輝く鏡のようなのだと後期密教は説く。鏡そのものには、そこに映しだされるものの形や色が、もともとそなわっているわけではない。けれども、その前に何かを置くと、その姿をあるがままに映しだす。「心の本性」も、それと同じだ。空でありながら、同時に光り輝いているという、2つの側面をそなえている。

ふつう生きている間、「心の本性」は、さまざまな煩惱や概念的思考の雲によっておおわれていて、じかに体験することがなかなかできない。けれども、死に至る過程で、生命維持や情動や概念的思考にかかわる風の運動がしだいに止まり、生命のエネルギーが心臓に収束していくとともに、「心の本性」をおおう雲は、1つ1つちぎれ、飛び散っていく。その果てに、私たちの心の土台をなす「光明」があらわれてくるのである。

密教経典は、この「土台の光明」を、雲ひとつない秋の大空にたとえている。何にもおおわれることがなく、真っ青に晴れ渡った広々とした大空のような心。すべての感覚をそなえた生きものは、仏性をそなえている。だから、誰であっても、死の時には、この「土台の光明」があらわれてくるのだと密教は強調する。

この「土台の光明」の次には、「心の本性」に内蔵されている光が、あらわれてくる。強烈な光に満ちた本尊のマンダラのヴィジョンがあらわれてくるのである（「法性のバルド」）。

生きている間に修行する機会に恵まれなかった場合、こうした「土台

の光明」や「法性のバルド」の体験が生じてきても、それを認識することはとてもむづかしい。ふつうは、ただ一瞬だけで通り過ぎてしまい、認識することができない。そして、六道に再生するプロセスに入ってしまうのである。

それに対して、幸運に恵まれ、生きている間に「心の本性」やその中に内蔵されている光を体験し、深めることができれば、「土台の光明」や「土台の顕現」の体験が現れてきたとき、認識することができる。存在の基底状態にとどまったまま、そこにみずからの心を溶けこませるのである。

瞑想の修行をする人は稀だ。たとえば、修行の道に入っても、生きている間に、心を完全に浄化し、作り変えることは、なかなかむづかしい。でも、かりに修行を完成することができなかつたとしても、死のとき、「土台の光明」の境地にとどまることができれば、ブッダになることができるのだと、伝統は語るのである。

トゥクタム

この「土台の光明」にとどまっていることを示すしるしの1つが、トゥクタム（Tib. thugs dam）だ³。この言葉は、もともと「真実の心」、あるいは「聖なる心」という意味を持っている。だが、死の文脈では、もっと別のことを指している。生きている間に、十分に「心の本性」に慣れ親しみ、三昧を持続することができるようになったなら、「土台の光明」があらわれてきたとき、それをあるがままに認識し、その状態にとどまることができる。その間、呼吸も心臓もとまり、しかし瞑想の姿勢は保たれたままだ。それがトゥクタムだ。

心臓の周囲にはかすかな熱がのこっている。死後硬直も、体液の流出もおこらない。この状態が、数日、人によっては数週間つづくのであ

る。終わると、瞑想の姿勢はくずれ、体液の流出がおこる。チベットやネパール、インド、そしてチベット人ラマたちが定住するようになったヨーロッパ、アメリカの各地で、トゥクタムは目撃されてきた。

故フランシスコ・ヴァレラやリチャード・デーヴィッドソンといった、現代の「瞑想的脳科学」(contemplative neuroscience)を牽引する脳科学者たち——彼らは、「精神と生命研究所」(Mind&Life Institute)を核とした活動を続けてきた——は、数十年にわたって、みずから瞑想を実践するとともに、この「トゥクタム」の実例を身近に見てきた。そして、何とか科学的に計測できないかと、考えてきたのである。

現代科学に深い関心を抱き、長年対話の努力を続けてきたダライ・ラマの協力によって、最初の計測が行われたのは、2008年の秋のことだった。南インドの大僧院で、すぐれた学殖と深々とした瞑想体験で知られる僧院長が亡くなり、18日間のトゥクタムに入った。計測機械をもった医師たちがたどりついたのは、10日目のことだった。それから、瞑想の姿勢がくずれるまでの間、計測はつづいた。数カ月後、2人目の計測が行われた(図4)。

その結果について、リチャードソンたちは分析中で、詳細はまだ公表されていない。けれども、いずれのケースについても、5つのことが、共通に明らかになっている。まず1番めに、計測が行われているあいだじゅう、瞑想のポーズは維持され、体液の流出も、死後硬直も起こらなかった。2番めに、そのあいだ心臓は停止していた。3番めに、呼吸もなかった。4番めに、脳波も、1例についてごく一瞬徐波が検出されただけで、それ以外はフラットだった。5番めに、血色は保たれたままで、しかも体温もほぼ一定だったのである。

このトゥクタムを、現在の医学に



図4 トুক্তラム計測の最初の被験者となったガンデン・ティパ・リンポチェ

よって説明することは、とてもむづかしい(エネルギーの観点からは、長期仮死状態や人工冬眠の研究が、そのヒントとなるかもしれない)。

科学は、「例外的事象」の研究をつうじて、飛躍的に発展する。トゥクタムの研究は、意識は脳活動から「創発する」(ヴァレラ)、あるいは「現象変換」による(エーデルマン)と考える、現在の脳科学の了解や、医学の形を大きく変えることになるかもしれない。

いのちとこころ

ペマは、今でも、ネパールのどこかで修行を続けている。その背景にある後期密教の意識—生命論によれば、いのちとこころの関係は、こんなふうに表現されることになるだろう。

「生きている間、私たちの心は、身体の中に住まい、その身体は環境との深い相互依存の関係の中にある。そして、心で起こってくるさまざまな現象は、全身に広がる脈管のネットワークを循環する風——それは光でもある——の運動にかかわっている。だから、それらの関係について、調べたり、分析することはで

きる。けれども、それはただ、大いなる海の表面にあらわれるさざ波の形について、調べているのにすぎない。それによって海そのものを理解することはできない。心の本体は、いのちを超えている」

注

- 1 Padma dkarpo, Chos drug bdsu pai zin bris, Collected Works of Kun mkhyen Padma dkarpo, Kargyud Sungrab Namso Khang, 1973-1974, vol.22, pp.265-301. 原著17世紀。
- 2 この「微細身」の理論と現代の神経学モデルの間にある共通点については、おおまかに論じたことがある。永沢哲『瞑想する脳科学』(講談社、2011年)第8章。なお、「意識の転移」については、計測が行われたことがある。
- 3 デーヴィッドソンたちによるトゥクタムの計測については、永沢哲、前掲書、第8章。

創造における言語・身体・記憶への断章 ——未完の記譜／別様の行為を誘発する装置

高橋 悟 (京都市立芸術大学大学院構想設計・メディアアート領域教授)
Satoru TAKAHASHI



1958年、京都生まれ。1988年、イェール大学大学院美術修士課程修了後、アート制作のかたわらNHKニューヨーク支部に勤務。1997年～2001年、カーネギーメロン大学美術学部客員助教、2001年～2008年、ミシガン大学美術学部准教授。2008年帰国、現在は京都市立芸術大学美術学部構想設計・メディアアート領域教授を務めながら、アーティストとして活動している。代表作にLto R/Double Douchなど。

『門』

S (宗助)「近来の近の字はどう書いたっけね」

Y (御米)「近江のおうの字じゃなくて」

S「その近江のおうの字がわからないんだ」

Y「こうでしょう」

S「やっぱりそうか」

Y「本当に良いお天気だわね」

S「どうも字というものは不思議だよ」

Y「なぜ」

S「なぜって、いくら容易い字でも、こりゃ変だと思って疑り出すと分からなくなる。この間も今日の今の字で大変迷った。紙の上へちゃんと書いて見て、じっと眺めていると、なんだか違ったような気がする。しま

いには見れば見るほど今らしくなくなってくる。——お前そんな事を経験した事はないかい」

Y「まさか」

S「おれだけかな」

小説『門』の冒頭部分、縁側に横になり思いにふける宗助と裁縫をしている御米との会話で、夏目漱石は文字から意味が剥落し、見知らぬ物として視界に浮上する感覚について記述している。文字を構成する要素の結び付きがゆるみ、統合され形を持ったイメージが解体する感覚。文字だけでなく、ヒトの顔、見馴れたはずの物や風景の見えかたが、ふいに異なった相貌をおびる背景には、人間の知覚・感情と行動の回路の解離があるように思われる。小説の中で、宗助は、過酷な過去の記憶により、社会との行動の回路を絶たれた傍観者として位置付けられている。知覚が、もはや、「行動への回路」へと結び付けられなくなったとき、「別

様な知覚」、いままでは、見えてこなかった世界が、降りかかってくる。

未完の記譜

一般に、記譜法とは、楽譜、舞踊譜、図面など、行為の記録と再生の指示を行うものとされる。しかし、厳密なスコアを有したものでなく、広く、運動を起こす流動的な装置として、記譜を捉え直すならば、道具、公園、遊具、建築物、庭、そして芸術作品それ自身も、創造的な行為を誘発する「未完の記譜」と考える。これは、ひろく日常的な反応・動作を喚起する装置という意味ではなく、現実的な行為、運動図式がいったん宙づりにされる状況、見馴れた物・事が多様なフルマイの可能性へと開かれる事態をさす。小説や音楽の楽譜に代表されるように、記譜を書く主体と、それを読み・再生する主体は、2つの異なった位相、時間軸に属する。2つの異なった経験



図1 作品 Dumping Sight / Land Scope 1994年 ニューヨーク州立大学美術館

を同時に引き受けるとどうなるか。そもそも可能なことであるのか。創造的経験における、過剰な感覚・記憶・解釈の中では、ヒトの知覚・感情と行動の回路が解離し、行動を支える地平と身体感覚が分離する中で、あたかも「他者のごとく」自身の行動が引き起こされる。「未完の記譜」への考察は、従来の個人・表現・受容者を最小単位の前提とした芸術論、ならびに、美術・音楽・文学・建築などジャンル論とは異なったモデルによる制作・研究へと我々を導く可能性がある。

アーカイブと美術館

第2次世界大戦中にナチスの侵攻を受けつつあったソビエト・エルミタージュ美術館では、貴重なコレクションを破壊と略奪から守るために、密かに収蔵品の移動を行っていた。膨大なコレクションを分類・梱包して運び出した後に美術館に残されたもの、それは観るべき対象を取り去られたむき出しの壁、それぞれの場所に作品が掛けられていたという人々の記憶のみ。この美術館はコレクションがなくなった後も閉館せず、館内ツアーというものを続けていた。一人の学芸員がそれぞれの作品が掛けられていた壁の前で立ち止まり、詳細な解説を続けていく中で、言葉と記憶からなる想像の美術館の中へ鑑賞者たちは入っていくようになる。ここでは、美術館はある空間・場所、あるいはトポスにイメージを関係づける手法、想像の共同体としての国家・国民や、集合記憶に基づく物語と場所の形成に関わる「記憶術」としての美術館というモデルに関わっている。

記憶術

ロシアの神経科学者ルリヤは、シーと呼ばれる1人の記憶術者を被験者とした30年にわたる研究の手記

を残している。ルリヤは、シーの驚くべき記憶力に関して、言葉や数字に色、音、イメージが結びつく共感覚について述べている。また、複雑な内容を記憶する場合は、古来の記憶術のように、見知った街路に記憶すべき項目を順次配置しておき、必要な時は、その中を歩きまわることによって自由に取り出すという方法をとっていた。しかし、シーの場合、常に、記憶・感性・想像力が現実の知覚を凌駕させる過剰なものが背後にある。「私が再認するのは、単に像によるのではなく、その像によって生じる全体的な感覚の複合によっています。語は、ひとりでの思い出されるのです。私は、手に、何か油のようなものが滑っていくことを感じ、その全体の中から、微細な点、しかも非常に軽い点が、左手を軽くくすぐります」。さらに、彼は、想像を介して身体の過程、脈拍や体温を変化させることもできた。

一般に、我々は、外界に対応した創造的な行為を生み出すイメージ作用については理解しているが、過剰な記憶と感受性を持ったシーの場合は、イメージの活動が外界に向けられずに、行為を代行し、現実的な行動を不要のものとしてしまう。そのため、彼は社会の現実の場では、適正な行動をとることに困難を生じ、仕事を転々とし、最後には記憶術師となったのだが、自己の人生において、「ここではない別のどこかの場所」に所属した、「傍観者」と感じていた。

アルツハイマー

ベルクソンは、「物質と記憶」で、自分の住んでいた町の中を想起して歩きまわることができるにもかかわらず、実際の場所

にゆくと、初めて訪れた場所のように迷ってしまう患者について語っている。この場合、現実の知覚と記憶を関係づけることに障害があると考えられる。認知症の場合には、これとは少し様相が異なり、病院など新しい環境では方向を失い徘徊状態になる人が、住み慣れた家に戻ると、別人のように自由に行動し、料理をすることまで可能となった事例も紹介されている。ここでは、住み慣れた環境自身が、行動を誘発する情報として身体に組み込まれているのではないか。図2は、グループホームで療養されている認知症の男性Kさんに、かつて住んでいた自宅の見取り図を描いていただいたもので、震える手で、何度も描きなおして書かれたものである。

図3は、Kさんに描いていただいた自宅周辺の地図。近隣の数件の家とバス道以外の部分は、空白の場として残されたままである。同様の地図を認知症の女性の方に描いていただいたが、そこには、近隣の住民の氏名に加え、八百屋、パン屋、薬屋、パーマ屋など生活に関わる情報がびっしりと書き込まれていた。

運動図式と記憶に関わる制作・研究の一環として、筆者は、2002年より、ミシガン大学で、医学部と共同で研究・制作をつづけていたが、以下の3つの点に興味をもった。第1に、認知症患者の多くが、近い過去の記憶を想起できないにもかかわらず

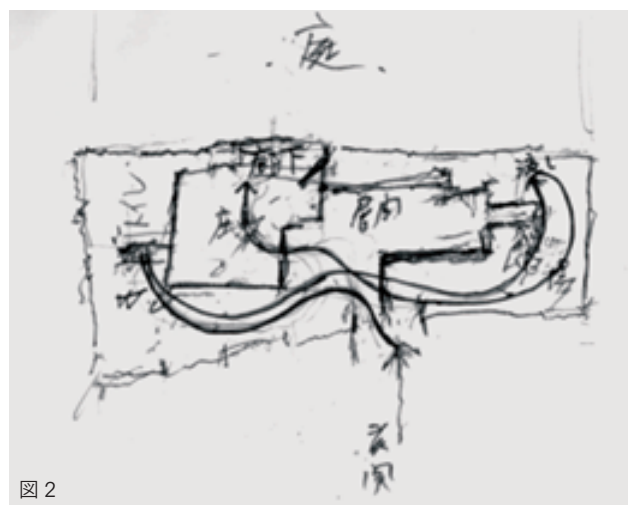


図2

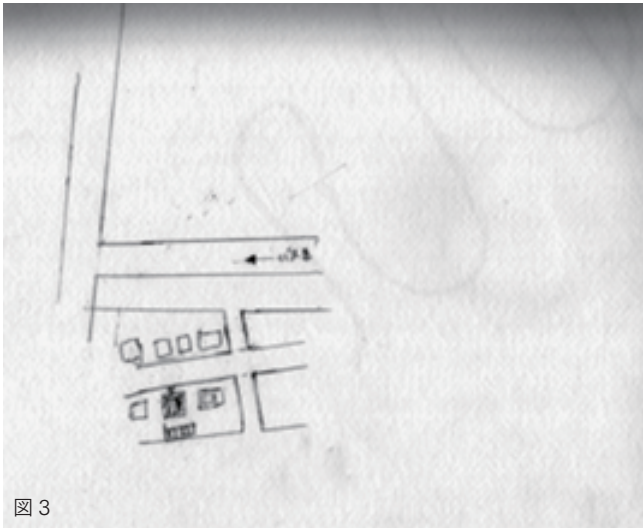


図3

仮構機能

微小重力下の宇宙船内では、前庭情報や体性情報が欠けており、そのため、「手がかり」となる床・自己の身体が絶えず相対化されることにな

り、空間知覚に葛藤が生じる。逆に、例えば、ドアの取っ手、壁面の突起など、仮の手がかりが、とりあえずの「参照軸：レファレンス軸」して成立した瞬間に、そこを起点に空間が構造化されるという報告もされている。このような空間知覚の形成は、志向性・意識を前提とした「自己一定位反応」という言葉で説明される。しかし、私見では、経験における動的なプロセスや、創造性

に関わる受動的で偏在的な経験を捉えるには不十分である。ベルクソンは、底のないエレベーターに自動的に乗ろうとした人物が、背後から見知らぬ他者に捕まれ一命を取り留めた事態について「仮構機能」という語を当てている。「背後の他者」は、現実に存在した人物ではなく、事態を察知した瞬間に作り上げられた架空の人物である。文学の世界だけでなく、知覚・感覚の世界にも同様に生じる「仮構機能」は、創造のプロセスにおける1つの原動力と考え得る。美術家の岡崎乾二郎氏は「1つの文章を書くには、まずその文を統御するところの主語を立ち上げなければならない。この主語は、つねに仮設物であり、創造的にとりあえず、文の中に立ち上げられるものである。運動をするためにも、同様に、この主語としてのイメージを立ち上げなければならない、個別の動作を連続した動作へと統御してゆくものは、このイメージである」と述べている。

まず、幼いころの記憶を呼び戻すことができること。第2に、記憶に重大な困難が出てくる前段階として、道に迷うなど、空間把握に問題が出てくること。第3に、道具・楽器などの特定の動作や、住み慣れた環境などが、特定の情動を伴う記憶を呼び覚ますこと。これら3点の関係から、行為・運動を誘発することで、特定の情動を伴った記憶を引き出す装置の可能性をさぐった。

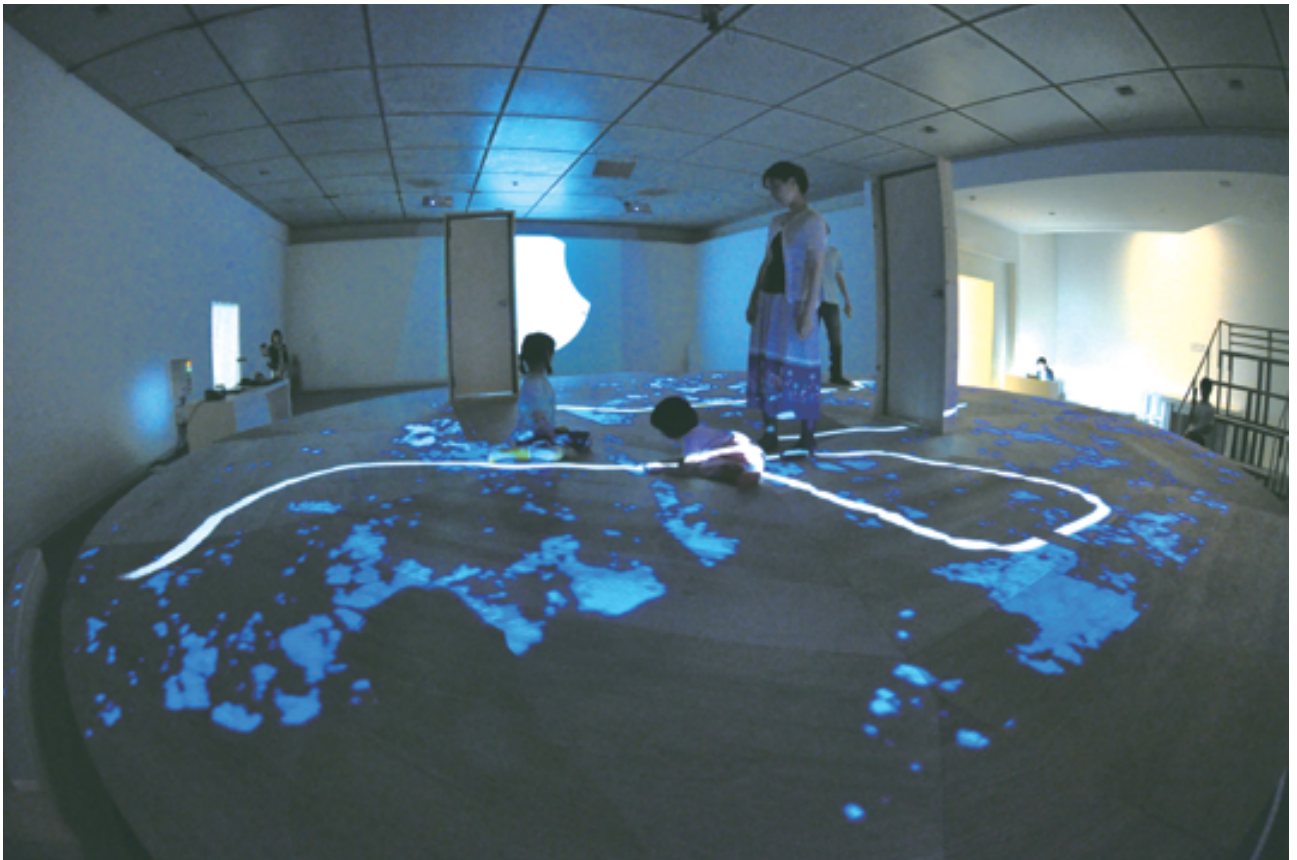


図4 作品 Trans-Acting/二重軸回転装置 2010年 京都国立近代美術館

ダンス・ステップ

健常者を対象として、自分の住んでいた家を想起し、その中を歩きまわる経路図を作成していただいた(図4参照)。経路の描きかたはそれぞれ異なり、描いた本人以外からは、読み取ることができない手がかりが、描かれている。これらの経路図を回転し、直径8mの揺れる回転ステージの上に大きく投射し、辿りながら歩くという実験作業を行って見た。ここでは、現実知覚による身体行為と想像イメージとの重ね合わせとの調停が行われ、「覚醒した時間」と「自己へ没入した時間」という2つの異なった時間軸に身を置くことが生じる。

分解写真

「ドガ・ダンスデッサン」の中で、ポール・ヴァレリーは、エドワード・マイブリッジの分解写真について述

べている。知覚の再組織化と分散に関わるそれらの写真は、人間の眼、知覚というものが、生のままの非連続的な与件を修正し、子供のころから習得した判断を導入して時間・空間・運動という名前でもまとめている変形様式に捉えられているという事実、逆にいうと、知覚を時間・空間という安定した座標から引き剥がされたもの、志向性をもった知覚・自己というストーリーをこえでるものとして理解させることになる。

体性感覚・前庭感覚と視覚情報との間に葛藤を引き起こすものとして2軸で波打つようにゆれながら回転するステージを作成した。重量に抵抗する形で、動作を組み立てる運動図式を身体にたたき込んでいるバレダンサーは、外見からは、身体・重心のブレとの葛藤による分散した動きを見て取ることはできなかった。しかし、実験撮影のあとの円盤上には、無数の傷、足の動きの痕跡が、切れ切れの直線や、同心円がずれながら動く曲線として、ドローイング

のように、あるいは、舞踊譜のように、残されていた(図5参照)。

歩行視—— Now Here /No Where

緩やかに変化する歩行のリズムに、身体をあずけながら風景を歩いている時、ふっと細部に一瞬、眼が奪われ、空白の時間を感じることもある。再び続けられる歩行の中にも、その記憶はどこに残り、別の視点から自己のいた場を眺めると、視線がそちらのほうへと引き寄せられ、身体と視覚の関係が、時間・空間が、不思議な矛盾した状態になり、さらに次なる歩行へと歩み出す

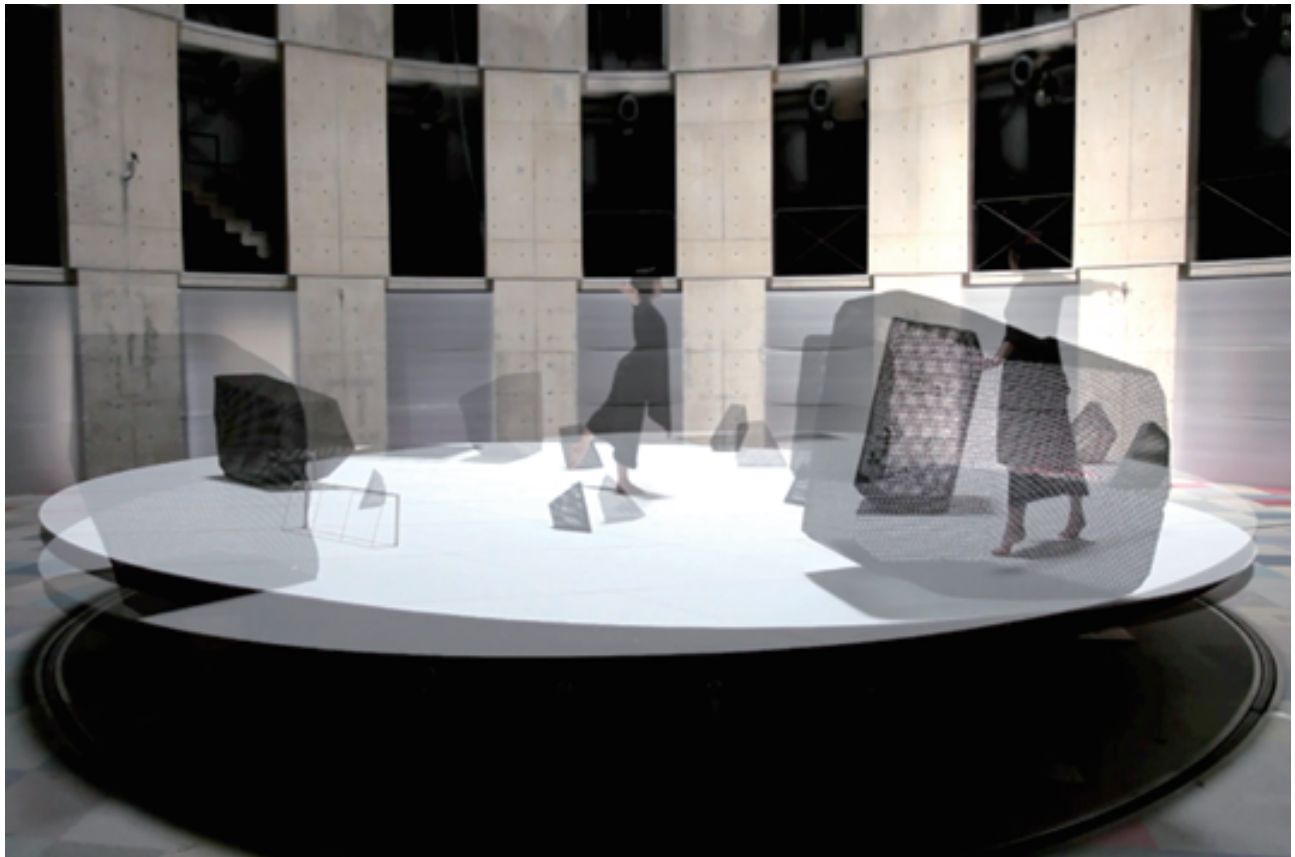


図5 公開実験「未完の記譜法」 2012年 京都市立芸術大学大学会館ホール



ことになる。このような経験についてとりあえず「歩行視」という言葉をあててみる。英語表記の可能性としては、「sight-seeing /site-walking」という言葉が考えられる。sight (視覚)、site (場所)、seeing (視つつある)、walking (歩きつつある) というその4つの組み合わせで構造化され、交差点の中心に歩行視を置いた作図ができる。これを表の面として、裏面には、「いま」「かつて」「そこ」「ここ」という4つの語を配置し、中心に「いまここにあってどこにもない」「now-here」と「no-where」という時空間がトポロジカルに繋がる作図を対応させる。この2つの面の関係から、視覚・身体・歩行・場所・記憶

の特異な関係を表すありようを示すことができる。

1973年9月11日火曜、サンチアゴ(チリ)でアメリカ政府の指導の下に、ピノシェ軍事政権によるクーデターがおきた。これを記憶するため「9月11日通り」という名称の街路が作られた。作品「Now here/No Where: Vale of Paradise」では、2001年9月11日火曜に起こった米国の同時多発テロと関連させるという視点から、メビウスの帯状の構造体と映像を組み合わせ、歴史・記憶・場が、トポロジカルにリンクする経験の創出を試みた(図6参照)。

哲学者のジル・ドゥルーズは、映画論で、災害や戦争など、現実に対応するには、個人の能力を超えた状況の中では、人間は、行動・知覚・感情が解離して、ばらばらになり、まったく新しい未知の時間経験が立ち現れ、純粋な視覚的経験と純粋な聴覚経験が結びつくことなく並行線の状態で流れの中に没入する傍観者とな

ることを述べている。本論考の導入『門』でも述べたように、知覚が、もはや、「行動への回路」へと結び付けられなくなったとき、我々は、現在の行動へと向けられた「知覚」、潜在的な「記憶」という2つの位相の「間」で、いまここにありつつ、どこでもない場所に漂うことになり、そこには、「別様な世界」、いままでは、見えてこなかった世界が、降りかかってくる。冒頭の『門』での宗助の経験にも関わるこのような経験は、ある意味で、我々を予見不能な創造に立ち合わせる事件といえよう。

図7は大阪市中央公会堂の天井画を2軸でゆれながら回転する色鏡にうつしこみ、観客に身体が浮遊する感覚を起こさせる装置。「見下ろす」姿勢からオレンジ色の鏡の反映をとおして「見上げる」ことや、「自己の鏡像」と「ドーム型の天井画の人物」の揺れの相互作用で、視覚と前庭・体性感覚の関係の齟齬と、定位するイメージの形成過程を考察する試みである。



図6 作品「Now here/No Where: Vale of Paradise」 2006年 チリ・サンチアゴ(倉智敬子との共同プロジェクト)



図7 「Now here/No Where-ふろいとといとまき」 2013年 大阪市中央公会堂

いのちとところ——物語と否定性

河合俊雄(こころの未来研究センター教授)
Toshio KAWAI

昨秋に島根大学で開催された箱庭療法学会の「物語と鎮魂」と題する大会シンポジウムで、東北学に長くかわり、東日本大震災後の支援活動に尽力してきた赤坂憲雄氏は、次のような話を紹介した。

友だちのジャーナリストが震災後に車で道路を走っていて、人をはねたような衝撃を感じた。ところが車を降りて確かめてみても、どこにも人影は見当たらない。それでも気持ちが悪かったので警察に届けに行くと、「またあの場所ですか」ということであった。つまり人をはねたように思っても、人影が見当たらないという届け出が、その場所から何件も届いているのだそうだ。友人は、震災で亡くなってさまよっている人をはねたのであろうか。

この逸話は、いのちとところについて示唆するところが多い。まず、見つからなかった人影のように、いのちや魂は実体として捉えることができない。ユング心理学のラディカルな理論家であるヴォルフガング・ギーゲリッヒ(Wolfgang Giegerich)は、昨年出版された*What is soul?*の中で、魂を否定の否定として記述している。つまり死者の魂という表象があるように、いのちの否定としての死体を、さらに否定したときに魂という考えが生まれるというのである。

第2に、いのちや魂について、日常から考えるのはむずかしいことが示されているのではなかろうか。いのちの尊さを説いたりして、平和なときにいのちについて論じても、空理空論になりがちである。心理療法に基づく臨床心理学は、人のこころについて、危機にあるときなど極端

な状態から考えていく学問であるけれども、その方法論には一理あって、いのちや魂は、愛する人が亡くなったり、今回のように震災が起こったりなど、極限の状況ではじめて問題にすることができるのではなかろうか。

さらに第3に、冒頭に紹介したように、極限状態でこころはいのちについての「物語」を生む。『ユング自伝』において、「死後の生命」という章が設けられているけれども、そこでユングは、理論的に論じようとはしない。そこではmytho-legein, Geschichte erzählenつまり物語を語るしかできないというのである。ユングは、人が亡くなったときなどの自分が経験した不思議な逸話をいくつも物語っていく。

その中の1つに、母親が亡くなったときにユングが経験したことが挙げられている。知らせを聞いて、帰省する車中のユングはたまらなく悲しかったけれども、同時に楽しげな音楽が聞こえてきて、多くの人々がパーティーをしているかのようなであったという。そしてこの体験からユングは、死というのは終わりではなくて、それは多くの死者たちと一緒にいる、祝福すべき出来事で、魂としての存在は続いていくのだと結論づける。まさに津波で亡くなった人々の魂が、さまよっているようなものなのである。

もっともこのような体

験が、魂の存在について何の証明にもならないことには注意を要する。先述の本でギーゲリッヒは、母親が亡くなったときのユングの体験が、決してナイーブで自然なものでないことを指摘する。つまりユングは、18世紀までは、ヨーロッパでも墓場で楽しいパーティーを持つ習慣があったことを知っていたはずで、その知識を元にヴィジョンの体験を持っていたのではないかと指摘する。先の震災後の幽霊の物語においても、無念に亡くなった人の魂が成仏せずに彷徨うというわれわれの持っている考えの影響を考慮する必要がある。このように、いのちや魂については、常に物語を作っていくことと、それを冷静に見抜いていくことが必要なのであろう。



ヴォルフガング・ギーゲリッヒの*What is soul?*

エッセイ

つくもがみ

付喪神——他者に思いを寄せる心

長岡千賀 (追手門学院大学経営学部准教授)
Chika NAGAOKA

右下の図は京都大学附属図書館所蔵の貴重書の1つで『付喪神』というお伽草子に出てくる絵の一部である。道具に人のような顔や手足がついていて、その表情はどこかユーモラスに見える。見ていると、道具たちは何を話し合っているのだろうかとかとわくわくする。この絵は京都大学オリジナルグッズのクリアホルダーにも使われているほどだ。

ところが実際は決して穏やかなものではない。これは、捨てられた古道具たちが人間への復讐を企てている場面の絵なのである。『付喪神』のあらすじはこうである。

『陰陽雑記』という書物によれば、作られてから百年経った道具には魂が宿り、人の心を惑わすと申します。これが付喪神です。毎年新年になると、古い道具類を路地に捨てる煤払い（すすはらい）という行事がありますが、これは付喪神の災難に遭わないようにと行われるものなのです。

さて、康保の頃でしたでしょうか、例のように煤払いといって、洛中洛外の家々から、古道具が捨てられました。その古道具たちが一所に集まって話し合いをしています。「われわれは長年家々の家具となって、一生懸命ご奉公してきたというのに、恩賞がないどころか、道ばたに捨てられて牛や馬に蹴られなくてはならないとは、何と恨めしいことではないか。こうなったら妖怪になって仕返しをしてやろう。」何だか物騒な相談です。古道具たちはかなり興奮している様子。(以下省略)

(「挿絵とあらすじで楽しむお

伽草子 第5話 付喪神」 <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/otogi/tsukumo/tsukumo.html>)

このあと古道具たちはさまざまな姿の妖怪になり、京都の北郊の船岡山の後ろに住み、都に出ては悪さをして人々を苦しめる。ここまで読むと、役目を終えた道具たちに感謝を示すべきだ、あるいは、ものを大事にせよ、といった教訓のように見える。しかしこの話はそれだけではない。ここで注目したいのは、小道具が、まるで人と同じように心を持つ存在として描かれているところである。奉公心や恨みという高度な感情を持つ存在として、作者は古道具を描き、読み手も古道具たちに共感しながら読み進む。

この話にはこの他にも、妖怪に変化した古道具たちが優雅に和歌を嗜んだり、自分たちを変化させてくれた神を祭って——祭らなければ心の木や石と同じではないかと言いながら——朝夕神事をおこなったりする場面さえある。さらには、古道具たちは御法童子の追討を受けたのちは改心して道心し、山奥に住む数珠の上人を訪ねる。この数珠は、妖怪に変化しようとしていた古道具たちを制止したがひどく打たれ、それをきっかけに出家して僧となっていた。古道具たちは「以前ひどい目に合わせてしまったが、心から懺悔すれば慈悲の心で

許してくれ教えをいただけるはずだ」と信じてこのような行動をとるのである。

古道具に命や心を見出すことは、長い間健在であり続けたモノに対する日本人の畏怖や畏敬の念の表れと言える。しかしなぜ、古いものに畏怖、畏敬の念を持つのか。

そこには、私たちの心の働き、すなわち、モノを通して、今はここにいない他者に思いを寄せる働きが関係していると思われる。たとえば、古い建築物や道具に接したとき、私たちは、それを今まででいねいに使い続けてきた使い手や、それが長持ちするように工夫して作った作り手のことを、自然と感じ取っているだろう。形見の品を大切にしようと思ったり、ある贈り物に「心がこもっている」と感じたりするのも、これと同様の心の働きによると言える。

今はここにいない昔の人を大切に思うからこそ、その人々の生活に密に関わってきたモノにも敬意を持つと考えられよう。そうすると、お伽草子『付喪神』は、他者を大切に思う心にあふれたお話とみることができるとも思えない。



人間への復讐を企てる古道具たち(京都大学附属図書館所蔵貴重書『付喪神』より)

国民総幸福(GNH)の思想

王立ブータン研究所代表ダショー・カルマウラ氏インタビュー

京大-ブータン友好プログラム第9隊(山本真也・霊長類研究所助教、大見士朗・防災研究所准教授、内田由紀子・こころの未来研究センター准教授、西出俊・白眉センター助教、福島慎太郎・地球環境学舎博士課程、馬場悠介・工学研究科修士課程、所属は当時)は、2012年8月25日から9月2日まで、ブータンのハ・プナカ・ワンデュポダン・ティンパー・パロを訪れた。その中で王立ブータン研究所を訪問し、代表であるダショー・カルマウラ氏へのインタビューを実現し、ブータンの国民総幸福・自然観・宗教観について貴重な話を伺うことができた。

インタビュアー 内田由紀子(こころの未来研究センター准教授)
Yukiko UCHIDA

山本真也(霊長類研究所助教)
Shinya YAMAMOTO

福島慎太郎(こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門研究員)
Shintaro FUKUSHIMA

物質的インフラと心のインフラ

内田 今、世界中の国々がブータンのGNH(Gross National Happiness: 国民総幸福)の精神に注目しています。経済的指標であるGDPを用いて経済成長を目指してきた私たちにとって、人々の幸福を基盤と考えようとするGNHの思想は、近代化に対する問いかけとして大きなインパクトをもたらしました。ブータンのGNHを語る上では、その豊かな自然環境やブータン仏教とも切り離せないと考えていますが、今日はそのようなお話もお伺いできればと思っております。

山本 カルマウラさんは2012年初頭に日本を訪問されていますね。日本人についてどういう印象をお持ちですか？

カルマウラ 秩序があって規律正しいというのが、おそらくどの外国人も抱く印象でしょう。日本は世界の中でも最もすばらしいインフラを備えていると思います。しかしこのような高い水準にはコストをもたらす側面もあります。日本人は、少なくとも外から見ると、過度に忙しいようです。日本の大学でも人々は非常に忙しい毎日を送っていて、インドやブータンのような他の国と比べてとてもハードです。窮屈すぎる面もあると思います。

山本 つまり高水準の利便性がコストを招いているということですね。実際、精神的な健康の面で言えば、毎年3万人以上の方が自殺するなど、日本では重大な問題が起こっています。

カルマウラ 人生に対する真剣さが、特に重い重圧となるのではないのでしょうか。服装ひとつとってみても日本人は完璧ですよ。あんなに完璧に見せるためには相当の準備が必要で、そこにはストレスが発生するはずですよ。

内田 このところ、日本では経済的な側面と精神的な側面のバランスがどうあるべきか、という議論が盛んになっています。高い経済水準を達成したのはいいけれど、穏やかな生活と人間関係が失われるようではいけない。経済成長だけを重視すると、家族や他者との直接的な交流の時間が短くなってしまいます。しかし経済的に苦しくなり雇用が確保されないと、今度は結婚や子育てなど家族生活にも影響が出てしまいます。

カルマウラ 毎日3、4時間ぐらいは仕事という公的生活から離れた時間を確保するべきだと思います。仕事や通勤の時間が毎日のすべてを占めてしまったら、ワークライフバランスは崩れてしまいます。社会的地位や自尊心を追求する生き方も負荷をかけますね。仕事や収入、家や生活水準などの「物質的な達成」に自



ダシヨール・カルマウラ(王立ブータン研究所代表)

オックスフォード大学卒、エディンバラ大学修士課程修了。ブータン計画省で12年勤務した後、王立ブータン研究所所長を経て現職。GNH(Gross National Happiness: 国民総幸福)についての概念整理を行い、GNHの9つの領域を策定、2007年と2010年に実施された調査の中心となった。ブータン発の憲法(2008年制定)の起草メンバーの1人でもあり、学者、歴史家、作家、画家としても活躍している。2006年に「最高に優れた人」という意味の「Dasho」の称号を先代の第4代国王から、「Druk Khorlo」の称号も現国王から贈呈されている。画家としても著名であり、ドチュラ峠にある寺院に絵画が納められている。

います。現世的な見方からすれば、彼らはほとんど極貧生活者でしょう。しかし彼らは、忙しくあくせくはたらく私の生活より自分たちの生活のほうが豊かで優れたものと感じています。その生活に高い価値があると思っています。こうした事例は多くの人々にバランスの大切さを気づかせてくれます。彼らを見るたび、私はうらやましく感じているのです。

内田 彼らは満たされている。

カルマウラ ものすごく満たされています。それは表情を見ればわかります。完全に静謐で満たされた状態であることが見てとれる。何かを得ようとして多忙になっている私たちの生活よりよほど意義深い生活を味わっています。

内田 今回の旅程の中で「ハ」の小さな村を訪問しました。インフラは整っているとはいえませんでした。確かに人々には誇りがあり、満たされた表情でした。

カルマウラ 究極的には本当のインフラは精神的で、こころにまつわるものなのです。そのような見方に到達し、こころの自由を得たら、それが幸せの最高のインフラです。

都市化と仏教

福島 ブータンの都市開発の現状はいかがでしょうか。首都ティンプーの都市化をどうお考えですか。

カルマウラ ティンプーは、人々の幸福やソーシャル・キャピタル、心理的なバランスをサポートできる場所となっているかどうかという観点からいえば、よい発展をとげているとは残念ながら思えません。問題なのは、私たちは「都市とは発展のために必須なものである」という価値観の中に暮らしていることです。経済的に言えば、確かに都市は人々を集め、サービスのコストを下げる「成長の鍵」です。しかし、極端な都市集中化のプロセスは産業革命以降に生じてきた、歴史的にいつてもごく最近のことです。

福島 日本も同じ問題を抱えています。

カルマウラ より広い視点からいえば、人々の幸福にとっても、それから生態・環境的持続性の観点からい

分の価値をあまりに結びつけてしまうと困ったことになってしまいます。

内田 自尊心の源を何とするか。これは重要なことです。心理学では「自尊心の随伴性」という概念で研究がなされています。もしも自尊心が仕事や収入などに依存する場合、良い状態にあるときには自尊心は保たれるけれどちょっと失敗するとすぐにダメになってしまうというように、人のところは不安定になります。その結果としてストレスがたまり、社会的な側面でダメージを受ける、などのネガティブな結果を導くことが示されています。こうした自尊心が「狭い自尊心」であるとすれば、自己肯定感や他者との愛情による結びつきから得られる「広い自尊心」も存在し、こちらはより安定的です。

カルマウラ そうですね。時には異なる視点を持つことが大切です。たとえば私たちがしばしば固執する現世的事象も、その本質を細かく分析してみれば、実は固執すべきほどの重大なものではない、というのが仏教の根本原理です。もちろん充足感を感じるためには基本的な物理的ニーズがあるのは当然です。しかしそれだけではない。たとえばこの上にある丘には若者から高齢者まで20人から30人ぐらいの人がいて、精神的修行に身を捧げています。彼らは山小屋に暮らしており、食事と最低限の必要物だけを受け取って暮らして



「ハ」の村の高校生たち

っても、理想的とはいえません。もちろん国連ハビタットのような組織はまったく別の観点から議論をしており、1人あたりのエネルギー消費を下げる意味で都市化は必要不可欠としています。これに私は賛同していません。現在の発展に対する後付け的な正当化にすぎないからです。近代的都市は人と自然の深刻な断絶をもたらしました。

宗教的な立場から言えば、たとえば仏教の歴史を見てみると、インドで急激な都市化が起こったときに仏教が発展しています。こうしたことは非常に示唆深いです。仏教は都市化への反応として、それまで当たり前だとされてきた多くの事柄に疑問を投げかけたのです。こうした見方はあまり一般的ではありませんが、仏教は都市化に対する反応と見ることができます。

都市環境での生活は、まず生き物に魂が宿るというアニミズムの精神を失わせます。そしてアニミズムからの乖離は、われわれが環境の一部であるという感覚を損なわせます。なぜならアニミズムから乖離したその瞬間から、あなたは環境にとっての「外部者」として自己を認識せざるを得ないようになるからです。物質主義は都市生活と関連しており、大きな都市では現世を超越した何かに頼ることは難しくなります。そこに住む人たちは物質的なことだけを話すようになり、便利な道具を得ることに力を注ぎます。そして環境の破壊はブータンのような瞑想的生活を送るための条件そのものの土台を崩壊させます。環境破壊が仏教精神の減衰を同時に引き起こすのです。

内田 京都は都市ですが、お寺や神社がたくさんあり、それらが守られています。宗教的精神やアニミズムをここかしこで感じられるのは幸運です。しかし他の都市ではなかなか難しいですね。

宗教的な気持ちは、たとえば神に対するそれだけではなく、自然に対する畏敬としてもとても重要だと思います。2011年に東日本大震災を経験した後、私たち日本人にもより強く意識されるようになったように思

います。自然の力はコントロールできるものではないからこそ、畏敬を感じつつそこに適応し、暮らしていくことが大切であると。

山本 日本やアメリカでは、環境教育が行われています。たとえば動物園がそうです。動物の生態を知るにはとても良いものです。しかし別の見方をすれば、動物を小さな檻に閉じ込めることによって動物に対する宗教的な敬意を損なう行為でもあります。ブータンでは動物を動物園に閉じ込めることはしないようにしていると聞きました。これもブータン仏教の考えが反映されたものですね。

カルマウラ それは意識的な決定ではありませんが、一般的にブータン人の意見としては動物園に反対でしょう。また、食用に動物を殺すこともしません。ですからブータンで食されている肉はインドからの輸入品です。ブータン北部の一部のコミュニティではヤクを飼っており、かつては毎年1、2頭のヤクを殺したこともあったそうです。しかしその場合でも彼らはその罪をあがなおうとします。産業的で消費に基づく畜産業ではそのような考えはありません。人々は生き物を食べ物とみなすと、慈悲の心なく欲深になります。

ブータンでは伝統的に、食用にされるヤクがいると聞けば、お金を集めてそれを買い取ろうとします。その後もとの生活に戻してやるのです。それは「命の贈り物」とされる、修行の一環です。私たちは常に与えることよりも得ることの方が大切だと思いがちですが、それは間違いです。与えることや慈悲深さは、それが誰かにとってたった1日のことであつたとしても、最も重要です。共生していくことは、自分の利益や心地よさを譲歩することです。何かを失うかもしれないけれど、全体で見ればもっと多くのものを得る、これが本当の意味の社会化だと思います。

福島 特に都市では人はそのことを忘れがちです。地方や伝統的な農業地域では互惠的人間関係は基本的な決まりごとになっていますが、今日ではブータンでも若い人は自分の利益のために都市に出てくるのでしょうか。

カルマウラ そうです、仕事とお金のためです。特に若い男性は村には戻りません。電話網が発達し、電気が通り、道路が整備されれば、おそらくこうした傾向は多少なりとも緩和されるでしょう。しかし人々が移動するのは、単に物質的なものを得るためだけではありません。「力」を得るためでもあるのです。影響力のあるところに人々は集まろうとします。これは人が抱きがちな幻想です。どういうわけか、人混みにも惹きつけられますが、人に囲まれていると、私たちは安心感を抱くのです。しかし実際にはわれわれのデータでも、首都ティンブーにいる人たちは、ブータン中で最も

安心感が低いことがわかっています。それでも人は都市を好みます。教育とメディアはこうした誤解を解き正しいことを伝えることができていません。

現在の教育内容は、農業を促進する方向にはありません。農業は低所得で重労働と考えられています。しかし農業は繁忙期には重労働ですが、それ以外の時にはもっと自由時間があります。農業が苦しいというのはこの国においては偏見です。

内田 政府は農業者や農業を保護しているのですか。

カルマウラ 新種の栽培や灌漑整備などは農業を助ける公共事業としてありますが、投資は大きいとはいえません。

内田 日本においては普及指導員という公務員がいて、農業地域でさまざまな手助けや農業事業の促進を行っています。

カルマウラ ブータンでもそのようなことはあります。普及事業は非常に重要です。しかし農業者は普及事業に携わる人よりも多くの知識をもっていることがあります。そうすると、ブータンの農業者は用水路の整備などをより必要とするわけです。ブータンではそうした設備が不足しています。農家自身でそれらを行うのは簡単ではありません。設備を得るためには、多くの農作物を売らねばならない。ブータンでは国王陛下のおかげで土地を無償で得ることができます。しかし農地は小さく、5エーカーほどでしょう。ですから農業収入ではとても農耕器具を買うことはできないのです。

GNHと瞑想、自然や人との関わり

福島 ブータンはGNHのミッションを掲げています。しかし人々は他の国と同様、個人的な利益を求めるとはしないのでしょうか。そうした場合、どのようにしてGNHの精神を促進していくのでしょうか。

カルマウラ それにはいろいろな側面があります。政府の資金や政策に頼る部分もあります。地域や村などに頼るところもあります。行動や動機づけ、規律など、個人次第の部分もあります。こうした個人の資質がなければ、実現できるものではありません。国民は政府の政策や制度、組織の規律を変えられることができますが、それは長期的プロセスです。皆で集まり、意見を述べ、政策的な共通課題を明確にし、衝突を乗り越える、それには非常に時間がかかります。とはいえ、個人から始められることがあります。毎日24時間のうち、8時間か9時間働きますね。健康のためには睡眠



京大-ブータン友好プログラム第9隊メンバー。左より、山本真也、内田由紀子、大見士朗、西出俊、馬場悠介、福島慎太郎

をとらねばなりません。しかし残った時間を、自分の身心のために使うことができます。身体的エクササイズだけではなく、精神的エクササイズが必要なのです。エクササイズにはいろいろな方法があります。瞑想もいいでしょう。毎朝瞑想をすることによって、日常的な細々としたことを考えることから解放されます。

内田 俯瞰的に考えることができるようになる。

カルマウラ そのとおりです。俯瞰的になることがとても大切です。そうしなければ時折ネガティブな感情が引き起こされます。そのためには特別なテクニックが必要です。1日30分の瞑想は最低限のラインといえるでしょう。日常的な感情やプレッシャーから解放されることは生活の中で最も価値あるものです。その瞬間、より広い心的空間を得ることができます。基本的な瞑想は開かれた空間あるいは「空」に身を置くことです。瞑想によって、すべてのものは空であることを悟ります。

一方、「対象を意識するような瞑想」もあります。それは慈悲や愛などの感情を生み出すためのものです。私たちは自分自身にとらわれすぎると他者の問題や感情に思いをはせることが難しくなります。この瞑想では、意識を持つすべての生き物を含めた他者の困難や苦しみについて熟慮し、強い慈悲のこころを生み出します。この瞑想のもうひとつの側面は感謝の念です。現代社会では感謝の念は無視され、人は自分が支払って獲得したものを受けるに値すると思ってしまう、時にはいかさまを働くことさえあります。こうした中で、先祖や両親、教師への感謝の思いを忘れてしまいます。生きていること、健康でいられることに感謝することはとても大切です。自分が行ったことや消費したことに対しても感謝を感じることはできます。これは日本の禅の精神、日本の美学でもあります。こうした美学に目を向けることもできるはずですが、

さらにいえば、30分ぐらいの意識的な訓練による、

自然とのつながりにむけての努力が大切です。自然との交わりは過小評価されています。わたしたちは環境問題についていろいろ言うけれど、太陽の光、木の葉、虫などに目を向けるような日常的な経験はあまり重要視されていません。自然は色や光、音などを有するとても感覚的なものであり、私たちの五感に訴えます。ブータンであなた方が味わったように、森や自然の中をただ歩くだけのことに深い価値があります。それは身体的な運動になるだけではなく、あなた方の中にある感覚が研ぎ澄まされるのです。ジムのジョギングマシーンの上を歩くのと、自然の中を歩くのとでは、この点で大きな違いがあるのです。

山本 日本には体を鍛えるためのジムや機械がたくさんあります。

カルマウラ 筋肉を鍛えるというのはひとつの側面に過ぎません。調和のとれた人格形成のためには他の側面も考えねばならない。身体活動でいちばんの原則は、毎日の規則正しさです。

日々の人との交流もとても大切です。コミュニケーションは無形でその中身は取るに足りないものかもしれません。でも、たとえば母子の間での会話は、その中身ではなく会話しているときの表情や、そこでのつながりの感覚こそ重要です。つながりは単なる言語的コミュニケーション以上の深いレベルで生じます。

こうした交流は、友人たちだけではなく、見知らぬ人とのつながりをつくります。毎日とはいわないまでも、なるべく定期的に知らない人と話してみることを勧めます。こうした努力は自己の在り方を拡張することになるので、とても大切です。その意味では、日本人は公共交通機関などでとても堅い感じがします。

福島 ブータンの人たちは顔見知りでなくてもよく話をしたりするのでしょうか。

カルマウラ それほどでもありませんが、それが友達をつくる方法のひとつであることは間違いありません。私たちの関係はすべて「見知らぬ者同士」から始まります。幸せという観点から考えれば、ニュースを読むよりも、隣の人と話をするほうがよほど良いことです。世界のどこかで起こっていることを知っても、私たちが何の影響も与えられないことを痛感し、がっかりさせられることがあります。私がテレビを見ないのはそのためです。もちろん世界で起こっている困難を知ることは重要です。しかしそれに対して何もできないならば、自分の身のまわりの、何か自分を変えられることに時間を割いた方がいい。人との交流を通して自分に直結した環境に意識を向け、人々とともにそれをどのように改善するのかを考えねばなりません。

コミュニティーの力

山本 日本の大都市は見知らぬ人にあふれています。そのような中では人とつながるのは難しいのではないのでしょうか。ブータンの首都ティンプーではいかがですか。

カルマウラ 私たちの行動様式や社会的規範は異なっているので、ティンプーは日本のようではありません。しかしティンプーでは物質主義が強調され、服や車に魅了されるなど、他者のことを「持ち物」で評価するようになるなど、最近新しく生じている困った現象もあります。そうすると精神的に不安定になり、欲求不満を感じるようになります。これは明らかに仏教の精神に反するものです。私たちは物理的な見たい目を超えて、互いの感覚や感情を理解する必要があります。時に若い人が薬物を飲んでいるのを目にするようになりました。鎮痛剤のパラセタモールやアヘンなどが含まれたものです。パラセタモールは痛みを麻痺させ、アヘンは薬物依存を招きます。昨年（2011年）は350人の若者がそれらを使っています。数から言えば限定的ですが、これは私たちの社会の在り方を映し出しています。村に住む若者たちは身体的に毎日適度に疲れ、精神的に満たされているので、そのようなものに手を出すことはありません。建物の間につながりを見つけていけないような街中でこうした薬物使用者が出てきているのです。

内田 誰かとともにいられるような場所が必要です。

カルマウラ 人間や植物を含めた生き物のための空間が必要です。もしビルばかりになってしまったらどうでしょう。そのような居住空間は、人の心やコミュニティーとの関係に影響を及ぼしてしまうでしょう。

内田 そういう都市は物質を追い求める世界を形成します。自分の持ち物や、社会的地位で人と自分を比較するような世界です。

カルマウラ だからこそ自然との日々のふれあいが大切なのです。もちろん生活水準の確保は必要ですし、それは健康にとってある程度なくてはならないものです。しかし、都市の景観は身心の健康や心理状態に強い影響を与えるものです。

内田 都市と地方での幸福感の比較などはしておられるのでしょうか。

カルマウラ GNHの尺度で比較を行っています。都市部は幸福度指数が高いですが、実際にはいろいろな変数があり、たとえば教育や収入はティンプーで高いですが、文化との関わりやコミュニティー、心理的な幸福などは都市部の方が低いです。最初は都市部ではポジティブな効果が得られやすいのですが、だんだん密度が高くなり競争的になるといろいろな新しい問題

が生じてきて、都市部の方が幸福度が低くなります。つまり、非線形的のプロセスがあるということです。山本 ブータンでは国の幸福とか、コミュニティーのレベルでの幸福ということが強調されています。どのようにすればこうした「集合的レベル」での幸福と、「個人レベル」での幸福追求がうまく折り合うようになるのでしょうか。

カルマウラ 私たちは個人の幸福を実現させねばなりません。しかしそれは集合的なものにもなり得ます。たとえばダンスを考えてみてください。一人ひとりみんなといっしょに踊り、それに埋没する中で幸福を感じます。自己を超えて、あるいは無我となることによって、幸福が実現されるのです。

身体的・精神的な超越を実現している仏教的瞑想の実践家を除いて、大方のわれわれにとっては人とのつながりがとても重要な役割を果たしています。友達や家族、近所の人とつながりをつくること、これは近代化された都市計画では無視されていることです。近隣の人たち同士で助け合えるような場所に住まなければなりません。人生を送る中で、病気を含め、実質的あるいは精神的サポートが必要な場面が出てきます。都市計画には政府の人々やエンジニア、建築家などだけがかかわっていますが、本当は心理学者や人類学者などもかかわって、人間関係という基本的側面について配慮しなければならない。どこかに所属している感覚というのは、自己のアイデンティティーやバランス、そして幸福にとって非常に重要だからです。

人々がどれぐらいの時間をかけて互恵的活動をしているか、これはコミュニティーの強さを知る指標となります。ブータンでは近隣の人のための活動時間の平均は1年当たり11日でした。この数値は地域によって異なります。たとえばティンプーでは人のために手を貸すとかサポートをするということがほとんどありません。

内田 これまでの個人主義的な知見とは異なり、個人の幸福そのものが集合的な幸福から得られると考えることはできるでしょうか。

カルマウラ そうですね。感情そのものは個人の中で感じられるものです。しかし感情は自分の中だけで生じるものではありません。ブータンのようなところでは、コミュニティーは重要で不可欠な要素です。多くの世代のこころの豊かさは、コミュニティーへの参加を抜きに説明することはできません。ブータンでは村人が家を建てる時、他の人も手伝いにやってきます。自分1人で建てるよりも大きなものを建てられるからです。他にも多くの物事がコミュニティーで得られます。土地、牧草地は地域のもので、学校も地域の中で建てられます。政府は物質的なものを供給するに過



ブータンの首都ティンプー

ぎません。

たとえ議論が必要なことがあるとしても、幸福の実現のためにはコミュニティーが必要です。基本的な欲求を満たすためには、産業的会社のようにしっかり統制されたグループはそれほど役にはたさないのです。とても不思議なことではありますが、コミュニティーは何かを共有し、絆をつくる、より「自発的な」ものです。地方のコミュニティーでは人々が共同作業を行い、楽しい交流を持っています。ともにあること、そこから幸福が生まれます。1人で食事をするより、誰かと一緒に食べた方がよほど美味しいですよ。しかし近代的な社会ではこうした地域の中での生活から断絶されてしまっています。

内田 家族のサイズも小さくなっていますね。

カルマウラ 近代化の中で核家族化し、家族がみな集まることが少なくなっていますが、その影響は過小評価されています。

山本 日本ではグローバル化されたコミュニティーは大きくなる一方で、より身近なユニットは小さくなっています。

カルマウラ まったくそのとおりですね。

内田 個人の物質的欲求を満たすことが幸福な社会の作り方でないことは、これまで“発展”を続けてきた社会の人々の幸福がはたして上昇したのかどうかを考えれば自明であることが、さまざまな知見から示されています。これからの日本の、そして世界の幸福の在り方を考える上で、ブータンのGNHから学ぶことはたくさんあります。

このたびはお忙しい中ご訪問させていただき、ブータンの精神と幸福に関わる示唆深いお話をお聞かせいただきまして本当にありがとうございました。

* 今回のブータン訪問ならびにカルマウラ氏へのインタビューを実現させていただいた京都大学ブータン友好プログラムに心より感謝申し上げます。プログラム HP:<http://www.kyoto-bhutan.org/> (編集補助: デロッシュ・マルク・ヘンリ、責任翻訳: 内田由紀子)

センター研究報告会2012

—研究報告と指定討論

船橋新太郎 (こころの未来研究センター教授)
Shintaro FUNAHASHI

カール・ベッカー (同教授)
Carl BECKER

鎌田東二 (同教授)
Toji KAMATA

加藤忠史 (理化学研究所脳科学総合研究センター)
Tadafumi KATO

ものの好みはなにで決まる？

船橋新太郎

ものの好みが決まる仕組み

気に入った風景の場所に行けば、何時間でもそこに佇んでいられるし、気に入った音楽ならば何度聞いても飽きない。好きな絵画を見るために、それが展示されている美術館を何度も訪れたり、好きな音楽を聴くために何度も海外に出かけたりする人がいるように、絵画や音楽、自然の風景は人のそれへの行動を誘発する。好きな絵画、好きな風景、好きな音楽による美的な体験は、人の生存に不可欠なものではないにもかかわらず、私たちがこのようなものに引かれるのは、「美しい」「すばらしい」といった感情を持つとき、同時にpositiveな感情が惹起されるからだと考えられる。したがって、好きな絵画、好きな風景、好きな音楽などは、ある種の報酬としての機能を持ち、人の行動に影響を与えていると言うことができる。ものの好みの判断も、それを見たときに生じる感情によって左右され、positiveな感情が惹起されるかどうかが要因の1つになっていると考えられる。どのような仕組みでもの好みが決まるのか、その仕組みの探求は人のこころの働きの理解に役立つと考えられる。

美醜や好ましさの判断に関わる前頭葉眼窩部

ものの好みの判断では、それを見たときの美醜の感覚が一要因として働いていると思われる。最近、美的判断がどのようにして行われるのか、脳のどの部位が関わっているのかに関する研究が行われている。たとえば、Kawabata & Zeki (2004) の行った脳機能イメージング研究では、さまざまな絵画を含む視覚刺激を実験協力者に呈示し、美醜の判断をさせると同時に、それらの視覚刺激を見ているときの脳活動を計測した。その結果、美しいと判断した刺激が呈示されたとき、前頭葉眼窩部が賦活されることから、美的かどうかの判断に前頭葉眼窩部が関わっていることを明らかにしている。また、Kawabata & Zeki (2008) は、実験協力者に欲求度の強さにより視覚刺激を分類させ、それらの刺激の呈示による脳の賦活部位を調べたところ、欲求度の高い刺激呈示で前頭葉眼窩部が賦活することを明らかにしている。さらに、O'Dohertyら (2003) は、魅力的な人の顔を見たときに前頭葉眼窩部が賦活すること、この賦活は笑い顔を見たときに増強されることを報告している。このように、ものの美醜や好ましさの判断に前頭葉眼窩部が関わっていることが最近の研究で報告されている。そこで、ものの好みの決定や判断に前頭葉眼窩部の神経活動がどのような関与を

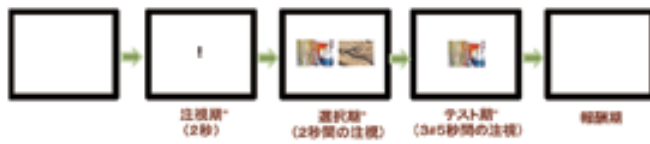
しているのかを明らかにすることにより、ものの好ましさの判断に関わる仕組みを理解できると考えられる。

一対比較法を用いた行動実験

ものの好ましさの判断に関わる神経メカニズムを前頭葉眼窩部で検討するには、まず、どのような刺激が好まれるのか、好まれる刺激の特徴を明らかにする必要がある。ものの好ましさの強弱は、一対比較法を用いて行われることが多い。一対比較法とは、ものを2つ同時に呈示し、その中から好ましいと思う方を選択させるもので、さまざまな組み合わせでこのような選択を行わせ、選択の度合いをもとに順位付けを行う方法である。

今回の研究では、被験体として4頭のニホンザルを使用し、一対比較法により視覚刺激の選好性とそれを決定する要因を検討した。使用する視覚刺激はFlickr Material Databaseから選択した写真で、布の写真が5枚、ガラスの写真が11枚、金属の写真が9枚、プラスチックの写真が6枚、岩石の写真が6枚、水や水面の写真が13枚の、計50枚を使用した。ヒトにとっては身近にあるものであり、日常的に目にするものが多いことから、経験や先入観などの要因が選好性を左右することが考えられる。そこで、今回使用する刺激に関する経験や先入観をもたない動物を使って実験を実施した。

1. 使用した課題

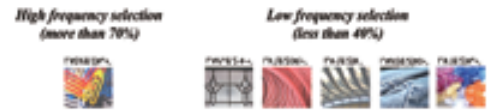
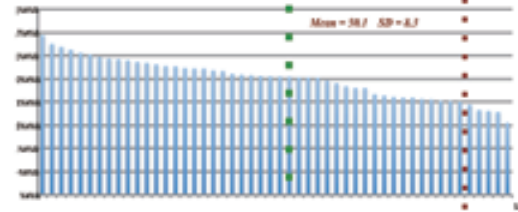


2. 使用した視覚刺激

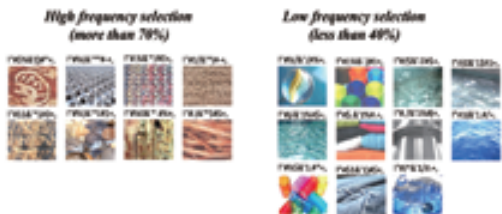
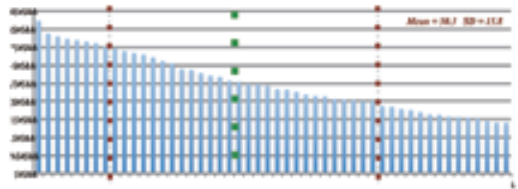


画面に呈示される視覚刺激のようすと、使用した50枚の視覚刺激。

1. サル1の選択行動の結果



2. サル2の選択行動の結果



50枚の刺激の選択率を高いものから順に並べた図。2頭のサルの選択率の高い刺激と低い刺激を例として示した。

50枚の刺激に対するサルの選好性の有無と選好性を決める要因を、一対比較法を用いた行動実験により検討した。50枚の刺激の中からランダムに選択された2枚の刺激をモニターの左右に同時に呈示した。サルがどちらかの刺激を連続して1秒以上見続けたら、その刺激を選択したと見なした。さらに、モニター中央に選択した刺激のみを最長6秒間呈示し、それを見続けた場合、その刺激を選択した刺激と判断した。この課題を行わせた全試行をもとに、各刺激が呈示された総数とその刺激が選択された総数から選択率を求め、その値をもとに刺激選好性の強さを評価した。サルの眼球運動はEyeLinkを用いて計測した。写真の呈示を含む課題の制御、ならびに、サルの行動の解析や記録はTempoプログラムを用いて行った。

鮮明度の高い刺激は選好性が高い

刺激によりサルの選好性に違いが見られ、また、サルにより刺激の選好性判断に大きな違いが見いだされた。選好性判断が刺激に含まれるどの要素により影響されるのか、一般的な特徴が存在するのかを決定する目的で、Photoshopを用いて加工した各刺激を用意し、同じ刺激どうしの組み合わせで選好性を検討した。色の有無が選好性判断に与える効果を検討する目的で、同一刺激の色付き条件とモノクロ条件での選好性を比較したところ、色付き刺激を選択する比率がやや高いものの、色付き刺激が好まれる明確な結果にはならなかった。刺激の鮮明度の効果を調べる目的で、原刺激と鮮明度を下げた刺激とで選好性を比較したところ、鮮明度の高い原刺激を選択する比率が圧倒的に高かった。選択率が鮮明度に影響されていることを確か

めるため、刺激に含まれている空間周波数成分の強さと選択率の相関を調べたところ、正の相関が見いだされた。50枚の原刺激を使った一対比較では、選好性の強さは刺激に依存すると同時に、刺激の選好性判断は個体差の影響を大きく受けた。刺激に含まれる空間周波数成分の強さと選択率の間には、どのサルでも正の相関が観察され、刺激の鮮明度がこの場合の選好性判断にも影響を与えていることが明らかになった。また、色彩の影響は弱いと選好性判断に影響を与えていること、写っているものの材質や光沢の有無、輝度は刺激の選好性判断にあまり影響しないことが明らかになった。

今後の展望

行動学的研究により、刺激の選好性判断に影響を与える刺激パラメータが明らかになると同時に、個体に

より選好性の強さの共通する刺激や異なる刺激が明らかになった。今後はこれらの刺激特徴と個体差を利用して、前頭葉眼窩部のニューロン活動を解析し、ものの好みの決定に前頭葉眼窩部の神経活動がどのような関与をしているのか、ものの好みを決める仕組みはどのようなものかを検討していきたい。

看護師の燃え尽き:こころが職場に及ぼす影響

カール・ベッカー

こころが態度や身体に及ぼす影響

日本の高齢化に伴い介護や看護のニーズが激増している一方で、介護者や看護師は慢性的に不足している。3年ほど前、厚生労働省が「高齢者を在宅で世話する」方針を打ち出して以来在宅介護が急増し、その結果介護者の燃え尽きをはじめ、家庭での高齢者虐待などの問題が深刻化している。医療現場では、燃え尽き寸前状態の若手の看護師が多く、暴力行為にまで至らないとしても、患者に冷淡に接したり、医療ミスを犯す傾向が見られ、離職率も高い。若手でなくとも医療従事者を取り囲む労働環境は厳しく、過重労働、不規則勤務、人員不足はなかなか改善されない状況が続いている。

本発表では、これまでに筆者がまとめた介護者研究と、現在継続中の新看護師研究を症例として、こころという精神面が態度や身体に及ぼす影響について紹介し、最後に課題を提示したい。

処理能力感ややりがい感の役割

介護に関して言えば、100万人余りの高齢者が在宅ケアを受けている中で、暴力問題に及ぶケースはわずか1パーセント前後であるが、絶対数にすると、1万件近くの事件が起きていることになる。100万もの世帯に

常時派遣して見守るほどのヘルパーは存在しないし、派遣したとしても大多数の場合は無駄になるだろう。しかし前もって暴力問題を起こしやすい世帯を特定できれば、派遣するヘルパーは1~2万人程度で済み、人的・経済的な負担をかけずに多くの暴力を回避できる可能性が高い。

従来の研究では、介護者の夜間起床回数と、介護を受ける人の認知症の程度とが、暴力と最も深い関係にあるとされてきた。しかし、その情報だけでは、暴力問題に発展しやすい1~2パーセントの世帯にまで絞ることができなかった。そこで、こころの未来研究センターのチームでは、精神的な「処理能力」(処理能力感)や「やりがい感」などが大きな役割を果たしているのではないかと、という仮説を立てた。

大阪、京都、島根などのソーシャルワーカーのサポートを得て、177例の在宅ケアに関する情報を収集した。処理能力感ややりがい感はアントノフスキーのSOC(センス・オブ・コヘレンス)尺度(『こころの未来』でも何度も紹介してきた)で、燃え尽きはMaslachのバーンアウト尺度で測定した。その結果、介護者の睡眠不足や被介護者の認知症よりも、処理能力感ややりがい感の方がはるかに大きな影響を及ぼしていることが分かった。したがって、患者を病院から在宅ケアに戻す際に、5分だけかけて、介護者となる方にSOCのテストを受けてもらい、回答者の中からSOCが極端に低い介護者に絞って、通常より手厚い支援・教育・レスパイトなどを提供する。それだけでも、介護者による高齢者虐待の多くは回避し得ると考えられる。なお、この調査報告と提言は、学術専門雑誌に投稿する予定である。

大規模な燃え尽き調査

では、看護師の場合はどうだろうか。近年、若年看護師の燃え尽き

率の高さが指摘され、新人に対する教育介入の必要性が高まっているが、研究の方はまだ十分とは言えない。また、これまでに職場環境や教育などの改善方法が試されてきたが、問題の根本的な解決には至っていない。そこで、前例のない大規模な燃え尽き調査を計画した。この調査の母体となっているのは、京都大学では、医学部の赤澤千春先生を中心として、SOCと医療改善を目指して過去10年にわたって開催されてきた看護師研究会である。この会の蓄積に加え、研究会に出席する看護師の見解に基づいて、アンケート調査の項目が策定され、現在は3年にわたる調査の最終段階にある。

調査内容を具体的に述べると、平成22年度、近畿圏内の1,187件の病院に協力を依頼し、承諾を得られた114の病院の新人看護師1,330人に対して、3年間にわたるアンケート調査を実施している。調査は原則的に同一質問紙を用い、平成22年度に4回、平成23年度に1回実施し、平成24年度末にも実施する。回収したデータはその都度分析をし、SOC研究会で臨床や新人育成に携わる看護師と議論を重ねている。これまでの調査の継続回答者は800人以上にのぼり、そのうち欠損値のない回答者は617名であった。協力者の内訳は、男性53名、女性564名であり、女性が約9割を占めている。平均年齢は24歳であった。

3つの仮結論

分析はまだ終わっていないが、現時点での仮結論を紹介したい。すでに以下の3点が明らかになっている。第一に、SOCの有意味感(やりがい感)が高い新人看護師ほど、環境負担の職場ストレスを受けない傾向にあることから、有意味感が職業ストレスの心理負担を軽減しているようである。第二に、SOCの有意味感が高い新人看護師は自己成就して

いたのに対して、有意味感の低い新人看護師は冷淡になり、離人化していた。人間関係を含む環境や仕事の負担はストレスのもっとも大きな要因であったが、SOCの有意味感、良い方向に大きな影響を及ぼしていたのである。これは、上記で紹介した介護者に関する研究結果に近い。結果自体には驚きはないが、SOCの有意味感を教育や支援などでいかに高められるか、介護者や看護師の燃え尽きを防ぐ次の段階の課題と言えよう。

第三に、燃え尽きのタイミングについて、さらに重要な発見があった。分散分析の結果、燃え尽き状態になる新人看護師の多くは、入職して3ヵ月程度の間仕事に意味を見いだせなかったり、仕事が自分の思うように出来なかったりすると、ストレスを強く感じ、燃え尽きの兆候を示す。3ヵ月目以降、新たに燃え尽きの兆候を示す新人看護師の数は減るが、一方で燃え尽きの下位尺度である情緒的疲弊、すなわち「これ以上働けない」という感情や、患者に対し自分が消極的になる「離人化」という感情は、新人看護師すべての間で1年間を通じて上昇し続けた。なお、深刻な燃え尽き状態に陥る傾向にあるのは、入職3ヵ月以内に燃え尽きの兆候を示した者であった。つまり、入職初期の悪い「第一印象」が尾を引いたことになる。他方、入職3ヵ月目の時点で低位になっていた有意味感が2年目に入り有意に上昇している事例も確認できた。それは、当初仕事に意味を見いだせなかった場合でも、仕事や環境に慣れ、後輩を迎えることで、自分の仕事や周囲の状況を把握し、意味を見出す能力を取得したと解釈できるだろう。

今後の課題

以上から、今後、入職から三ヵ月の期間に焦点を当てた教育プログラムを検討する必要があると言えよ

う。さらに仕事上の負担や職場環境などのストレスをいかに低減できるかのみならず、ストレス対処能力SOCをいかに高められるかが、今後の課題となるであろう。

〈「はじ」の文化〉再考～『古事記』からルース・ベネディクトまで

鎌田東二

「罪の文化」「恥の文化」

ルース・ベネディクトが1946年に出版した『菊と刀——日本文化の型』は、日本の占領統治を目的として「日本文化」を研究した成果物で、1948年に翻訳されてベストセラーになった。その著作の中で、彼女は、「道徳の絶対的標準を説き、良心の啓発を頼みとする社会」を「罪の文化」とし、対して、「他人の行動の中に看取されるあらゆる暗示に油断なく心を配ること、および他人が自分の行動を批判するというを強く意識する」（たとえば、昨今に言う「空気を読む」なども含まれるだろう）社会や文化を「恥の文化」と位置づけた。彼女はまた、「真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行なうのに対して、真の恥の文化は外面的強制力にもとづいて善行を行なう。恥は他人の批評に対する反応である」、「日本人は恥を原動力としている」、「（日本人にとって）恥は徳の根本である」（長谷川松治訳、講談社学術文庫）などと述べている。この日本人の心と行動パターンを「日本文化の型」として文化人類学的に研究した著作は、今日の文化心理学や社会心理学から見ても興味深く見過ごすことのできない「古典」的な著作である。

記紀神話に見る「はじ」

さて、2012年は、『古事記』編纂1300年、『方丈記』著述800年とい

う節目の年に当たり、両「古典」をさまざまな角度から読み解く著作が刊行され、シンポジウムが開催された。わたしも『超訳古事記』（ミシマ社、2009年）に続いて、『古事記ワンダーランド』（角川選書、2012年）を上梓した。その過程で、『古事記』を題材にすると、ルース・ベネディクトの言う「恥の文化」が思いもかけない相貌で立ち現われてくることに気づかされた。

本年度の研究報告会のテーマである「感情と身体」に即して言えば、「はじ（辱・恥）」という「感情」は、「神々」の「身体」のある種の異様さに伴って強烈に生起する、と『古事記』や『日本書紀』には記されていたのであった。ベネディクトは記紀神話を題材にしていないが、それを題材にする限り、「はじ」とは外面的・社会的制裁力などという言葉でまとめることのできないほど強力に「神々」の「感情」を激発させる源泉となっている。

ここではひとまず「負の感情」を「自他の関係性や存在様式を破壊に導く感情」と定義し、そうした破壊的「負の感情」としての「はじ（はぢ）」の感情を『古事記』と『日本書紀』という最古の「古典」を通して吟味していく。

イザナミの激烈な「はぢ」の感情

第一に、女神イザナミノミコトが自分の姿（死体）を夫イザナギノミコトに見られたときに「吾に辱見せつ」と怒りと悲しみの感情を激発させて、呪いと共に絶縁している。

このイザナミの激烈な「はぢ（辱）」の感情を、本居宣長は『古事記伝』の中で「令見辱。恥を与るを、恥見ると云は古語なり」と注釈するにとどめている。近年の倉野憲司も『古事記全註釈』で「私によくも恥辱を与えたの意」とだけ記し、西郷信綱は『古事記註釈』において「視るなといったのに視たので、かくいう。

ただ『恥見せつ』は、たんに恥ずかしいというより、もっと怒ったいいかたで、よくも恥をかかせたという意。だから逃げる男神を女神は追っかけるわけで、それにたいし豊玉毘売は我が形を見られ「甚^{いと}づかし」といって本つ国にもどっていったとある」と「見るな」のタブーを破ったことに言及しているのは注目に値する。

しかしながら、本居宣長、倉野憲司、西郷信綱という『古事記』研究・全注釈の代表的な碩学の見解は、いまだ「吾に辱見せつ」の激烈さ・深刻さを認識していないように見える。ここで、『古事記』において初めて「負の感情」の爆発が起こっているのだが、これをどう捉えるかが大変重要な問題で、これがひいては『古事記』全体の解釈にも多大な影響を与えるのである。

イザナミという「いのちの母」が、怒りと悲しみに満ちた「はぢ（辱）」の感情の激発によって、1日に千人の「いのちを殺害する破壊神」に大逆転するのだから。その変貌の影響は凄まじいのだ。なぜ「はぢ（辱）」という感情はかくも破壊的に作用するのか？ それが問題の根っこである。残念ながら、ルース・ベネディクトも本居宣長もこの問題の深層に迫ることができなかった。

ここでは、「はぢ」は世界に修復不可能な亀裂・断裂・分裂を生み出す感情の源泉となっている。『古事記』に語られるこのイザナミの「はぢ」の感情の深さと恐ろしさを侮ってはならない。

このイザナミの発した「負の感情」を全面的に受け継いだのがスサノヲノミコトである。なぜ、彼が小さい頃から「妣の国」に行きたいと泣き叫んでいたか？ なぜ、イザナギの鼻から化成したスサノヲは、世界に万の災いをもたらすほどに母・イザナミを恋慕ったのか？ これについての詳細は拙著『古事記ワンダー

ランド』に譲るが、このスサノヲに受け継がれた「負の感情」が晴らされたのが、怪物（八俣大蛇）退治と歌の発声（発生）においてであったことには注意すべきだ。「歌」は、禊や祭りと同様に、「負の感情」の鎮め方、晴らし方として、きわめて重要な方法となるのである。

別離と死をもたらす破壊的な感情

『古事記』におけるにもう1つの「はぢ」の事例を挙げておく、海神の娘のトヨタマヒメが出産する際、本国の姿の「鰐（鮫）」の姿になって出産するが、そのとき、夫のホヲリノミコト（山幸彦）に見られたために、「いとはづかし」と言い残して、海の国に還ってしまって、2人はその後2度と会うことはなかったという記述である。一方、『日本書紀』には、大物主神が「小蛇」の姿となった自分の正体を「神妻」のヤマトトヒモモソヒメに驚かれたときに、「汝不忍令羞吾。吾還令羞汝（汝が私に恥をかかせたので、私も汝に恥をかかせよう）」と「感情」を激発させ、それが元でヒメは箸でホト（女陰）を突いて死んだことが記されている。ここでも「はぢ」は別離と死をもたらす破壊的な感情となっている。

美意識を伴う〈身体的感情〉

このような、記紀神話に「神々」の激烈な「感情」として表出される「はぢ」の「感情」がみな「身体」に喚起されて現われていることに注目したい。これを、ルース・ベネディクトが『菊と刀』で指摘したような、日本人を「善行」に促す「外面的強制力」とか、「徳の根本」であるなどと簡単にみなすことはできない。それはもっと深く内奥に突き刺さり身心および関係性を破壊的な攪乱にまで導く、倫理性よりも強い美意識を伴う〈身体的感情〉であり、その感情の鎮め方が禊祓と祭と歌の発生を導き出すと『古事記』は示唆してい

るのである。

参考文献

鎌田東二『超訳古事記』ミシマ社、2009年
鎌田東二『古事記ワンダーランド』角川選書、角川学芸出版、2012年

指定討論

「界面活性剤」としてのこのころの未来研究センターの役割への期待

加藤忠史

3つの話で異なる感情と身体

研究報告会では、感情と身体ということで、3つのお話を伺いました。通常であれば、この3つの話の間にはまったく接点がありません。研究者も、研究方法も、発表方法も違います。これらの3つの話を同じ学会で聴くということはありません。

にもかかわらず、こうして1つのトピックとしてまとめ上げて議論できたということ自体が驚くべきことで、このこのころの未来研究センターが貴重な存在であることを再認識させられました。

3つの話に出てきた感情と身体はそれぞれ異なります。

船橋先生のお話では、感情とは好き嫌いという比較的シンプルな感情。そして身体とは、感情の物質的基盤としての脳です。

一方、ベッカー先生のお話では、感情は対人関係における感情であり、少なくとも2人の人と人との間で生まれるものです。そして、ここで問題になっている身体とは、看護の対象、あるいは疲れる身体、いずれにせよ、感情の対象としての身体です。

鎌田先生のお話の中では、感情とは、さらに、人と人というレベルを

超えて、社会の中で共有され、文化を特徴づけるものです。そして、『古事記』における神々の身体とは、もはや物質的存在を越えて、本性という、もっと象徴的、形而上的な存在を示しているように思いました。すなわち、船橋先生のお話の中では、感情の物質的な基盤という、最も物質的な存在であった身体が、ここでは、感情を呼び起こす形而上的な存在として、完全に逆転した意義をもっています。

特徴的な研究手法

研究手法でも、それぞれ特徴的な面が見られました。

船橋先生とベッカー先生のお話では、そのレベルには違いがあるにせよ、要素に分ける、という手法がとられている点で共通していると思いました。船橋先生が感情を図形の好き嫌いというシンプルな要素に分解して解析されたのは、脳の生理学的解析では、すべての細胞を解析することはできず、限られた細胞群しか調べられないため、それと対応づけるためには、心理の方を要素に分解する必要があったためだと思います。

一方、ベッカー先生のお話では、燃え尽きという複雑な感情では社会的対応が難しい中で、Sense of Coherenceという要素を抽出することによって、社会的な対策の枠組みを提供する道筋を開いたということに意義があると思います。

鎌田先生のお話からは、要素に分解するという方向とは逆に、要素から全体へと広げていく、という強力なベクトルを感じました。『古事記』および『菊と刀』という、千年以上の時を越えた文献に見られる共通性の中から、恥、という一見、まったく個人的な、限局した感情のように見えるものが、日本という社会、文化を創り上げる重要な要素となっていることを示されたわけです。

問題は階層間の界面で起きている

われわれは炭素、水素、酸素などの原子から成り立つ、明らかに物質的存在であると同時に、物質から成り立つ脳により支えられた感情を持ち、感情を持つ個体同士が集まって社会を作り、文化を創るという、まことに多次元的な存在です。

このように、われわれの生きる世界が多次元であるからこそ、この世界で起きている問題の多くは、これらの階層の間の界面、すなわち境界線で起きていることなのだと思います。

今朝のニュースで、米国で、小学校に侵入した男が、20人もの幼い子どもたちの命を銃で奪うという事件が起きたことを知りました。なぜこんなに悲惨なことが起きなければならないのか。銃規制ができないという、米国の社会的背景が原因とも考えられますし、同時に、射殺された犯人の母親は、犯人が襲撃した小学校の教師であったとの報道もあるようですので、何か親子の間の感情的な問題という可能性もあります。また、犯人が何らかの精神障害を持っていたらしいという報道もあるようです。

私たちの研究室では、精神疾患のゲノム研究をしています。最近、両親では存在しないようなゲノムの変異が生じて、精神疾患を起こす場合があることが報告されました。これは、父親の年齢が高くなるにつれて、精子のゲノムに変異が入りやすくなり、変異の入った場所が運悪く神経発達に関係のある遺伝子だと、脳の発達に影響し、精神障害を発症する、というわけです。そのほかに、ゲノムを両親から受けついで時点では存在しなかった変異が、発達中に、脳のゲノムだけに生じてしまうような場合もあるのではないかと推測して研究を進めています。

このように、1つの問題をとりあげても、分子から社会まで、異

なる階層に関するさまざまな視点があり、すべてが階層を超えて、互いに関係しあっているのです。

界面活性剤としてのセンターの役割

このように、私が専門としております精神疾患の問題をはじめとして、出生前診断、臓器移植など、物質としての身体、それが生み出すところ、そして社会との界面で、多くの社会問題が起きています。

それだけでなく、今回の総選挙の争点になっている原発の問題や経済の問題にしても、その根源には、この人間社会の多次元性が基盤にあるように思えます。

昨今問題になっている領土問題にしても、領土は国にとっては身体のようなもので、神々が身体を見られて感情を爆発させたイザナミの話に、どこか通じるところがあるように思え、さまざまな見方がありうるのではないかと感じます。

われわれ人類は、こうしたさまざまな社会問題、すなわち、犯罪、貧困、精神疾患、エネルギー問題、戦争などに、いまだに有効な対処ができていません。こうした社会問題が、身体、感情、社会、文化という多次元的な存在としてのこの人間社会において、これらの界面で起きている摩擦だと捉えることができるのであれば、これらの界面の間をつないで、この複雑な人間社会に取り組む道筋を探究することが何より重要となります。

しかし、現代では、学問が細分化して硬直した結果、社会問題への有効な解答を提示することができていないわけです。

そういう社会の中で、このころの未来研究センターは、水と油のような学問領域を融合させる、まさに界面活性剤としての役割を果たしつつある、というふうに感じました。

今後のセンターの活動に、ますます期待したいと思います。

研究プロジェクト一覧（平成23年度）

教員提案型連携プロジェクト

| 大区分 | 研究課題 | プロジェクト代表者 |
|------------|---|-----------|
| 負の感情 | 自己感情の制御と他者感情の認知の神経機構 | 船橋新太郎 |
| | 負の感情研究 — 怨霊から嫉妬まで | 鎌田東二 |
| | 甲状腺疾患における「感情のなさ」について | 河合俊雄 |
| | ストレス予防研究と教育 | カール・ベッカー |
| こころ観 | こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究 (人類はこころをどのようにとらえてきたか?) | 鎌田東二 |
| | こころとモノをつなぐワザの研究 | 鎌田東二 |
| | メタ認知に関する行動学および神経科学的研究 | 船橋新太郎 |
| | 現代における自己意識・他者意識の研究 | 河合俊雄 |
| きずな形成 | 感情・認知機能におよぼす他者・モノの影響 | 吉川左紀子 |
| | 共感的対話の相互作用性 | 吉川左紀子 |
| | 信頼・愛着の形成とその成熟過程の比較認知研究 | 森崎礼子 |
| | 社会的ネットワークの機能と性質:「つなぐ」役割の検証 | 内田由紀子 |
| 現代の 生き方 | 新人看護師のストレス予防とSOC改善調査 | カール・ベッカー |
| | 文化と幸福感:社会的適応からのアプローチ | 内田由紀子 |
| 自然と からだ | 癒し空間の比較研究 | 鎌田東二 |
| | 進化と文化とこころ:生物学的視点と社会的視点からこころを探る | 平石 界 |
| 発達障害 | 発達障害への心理療法的アプローチ | 河合俊雄 |
| | 発達障害と読み書き支援 | 吉川左紀子 |
| 教育 | こころ学創生:教育プロジェクト | 吉川左紀子 |
| | こころの研究ニュースの発信:こころ学ブログ | 平石 界 |
| | 脳機能イメージングと心理学実験設備の整備と運用体制の構築 | 吉川左紀子 |
| | 東日本大震災関連プロジェクト~こころの再生に向けて~ | 鎌田東二 |

一般公募型連携プロジェクト

| 研究課題 | プロジェクト代表者 |
|--|------------------------|
| 家族機能と社会性の進化的行動遺伝学 — 双生児法による | 安藤寿康 (慶應義塾大学文学部) |
| 日本人2型糖尿病患者における療養指導効果の検討 | 藤本新平 (高知大学医学部) |
| 察するコミュニケーションと表すコミュニケーション | 宮本百合 (ウィスコンシン大学マディソン校) |
| 物への依存・人への依存 移行対象研究からの検討 | 黒川嘉子 (佛教大学教育学部) |
| 顔処理の潜在的側面:学習過程と個人差からの検討 | 小川洋和 (関西学院大学文学部) |
| モノと感情移入・感覚移入に関する基盤研究 | 大西宏志 (京都造形芸術大学芸術学部) |
| ミクロ文化事象分析と映像実践を通じたこころの学際的研究 —文化と医療誌における映像資料・精神生態関与と資料をおも な対象として— | 宮坂敬造 (慶應義塾大学文学部) |
| 近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究 | 秋丸知貴 (日本美術新聞社編集局長) |
| こころとからだをつなぐメディアとしての味覚研究:食の 「質」をふまえた食教育の検討 | 荒牧麻子 (女子栄養大学栄養学部) |
| 利他主義の進化認知科学的基盤 | 小田 亮 (名古屋工業大学大学院工学研究科) |

研究プロジェクト

負の感情研究——怨霊から嫉妬まで

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■研究の背景

人間の「こころ」のはたらきの中で特に大きな影響を及ぼすのが「負」の感情である。「負」の感情には、怒り、憎しみ、恨み、嫉みなどさまざまあるが、それをコントロールすることは容易ではなく、「攻撃」に代表される社会的行動の最も強力な「動機」となり得るとされてきた。本研究では、これまで「負」とされてきた感情を、「正」の感情との相補的な関係や可換性を手がかりに、同時代の諸社会における参与観察とさまざまな時代の文献解釈を往還しつつ分析してゆく。

■2011年度の研究活動

2011年度はワザ学と共同して2回の研究会を行った。2011年5月16日、第4回研究会（ワザ学研究プロジェクトと共同開催）。同年11月24日、第5回研究会（ワザ学・こころ観研究プロジェクトと共同開催）。

■二つの自然災害によせて

東日本震災の被災地調査は、鎌田東二『現代神道論——霊性と生態智の研究』春秋社、2011年11月刊にまとめた。

天河大辨財神社：2011年9月4日、奈良県山間部を集中豪雨が襲った。天ノ川—十津川—熊野川水系に160カ所以上の土砂崩れが起きた。土砂ダム・せき止め湖が作られ、逆流や滞留が起こり、増水により大被害が発生した。天川村の隣の大塔村は土砂崩れで幹線道路が分断され、陸の孤島になった。天河大辨財神社は社務所と参集殿が床上浸水。坪ノ内地区では3カ所で土砂崩れが起き、大洪水をもたらした。北から南に流れる天ノ川本流の濁流と、東から西に流れる支流の坪ノ内川を伴う奔流と、南での大規模な土砂崩れによってできた一時的な天然ダムがもたらす逆流の3つが、禊殿の前あたりの

合流地点でぶつかり、30m以上の水柱となって山の尾根を越えるほどに高くなり、それが何波にもわたって坪ノ内の集落に押し寄せた。柿坂神酒之祐宮司は、「こんなに大きな被害は有史以来初めてだ」と何度も繰り返した。

■能「鶴」にみる負の感情

「諸国一見の僧」（ワキ）が芦屋の浜辺に至り、夜ごとに幽霊の出る堂に泊まるはめとなった。その堂にいと、鶴の「霊」（シテ）がうつほ舟に乗って現れる。僧は怪しく思って正体を尋ねると、鶴の霊は、「葦の屋の灘の塩焼きいとまなみ黄楊の小櫛もささず来にけり」（『伊勢物語』87段）の歌を謡いながら、僧の「法の力」で自分の「心の闇」を弔ってほしいと依頼し、ついに自分は近衛天皇の世に源頼政に退治された鶴であると明かす。鶴は退治されたときの無念の様子を物語り、僧に弔いを頼み、「月日も見えず暗きより、暗き道にぞ入りにける。はるかに照らせ山の端の、はるかに照らせ、山の端の月と共に……」と謡いつつ、夜の海の波間に消えてゆく。「心の闇」を持ち「暗き道」に入った鶴に、山の端の月は静かな光を照らし出す。

世阿弥が「鶴」を書いたのは応永23年（1416）頃である。「鶴」の最後の謡、「月日も見えず暗きより……」は、和泉式部の歌「暗きより暗き道にぞ入りぬべき 遥かに照らせ山の端の月」（『拾遺集』）から採ったものだが、「暗きより、暗き道に入る自分の姿を予見し、それを「鶴」と重ね合わせたのだろう。そして、和泉式部の歌のように、煩惱の吹き荒れる「心の闇」の中で懊悩する自分を仏法の真如の月によって照らし出し救ってほしいと願ったのである。ある伝承では、和泉式部はこの歌を作ることによって成仏したとするが、世阿弥もまた「鶴」によって

「成仏」することを願ったのかもしれない。世阿弥は能という新しい芸能の創作によって、荒ぶるうち捨てられし神々や人々の「心の闇」を浄化しようと企図したのではないか。

■心理療法と瞑想で向き合う負の感情

2011年7月28日、濱野清志京都文教大学教授、永澤哲同大学准教授を発表者に迎え、ふだん分けて考えられることが多い心と身体は同じのちが別々の現れをしているにすぎない、という心身一如の東洋的視点から、「気」をキーワードに心理臨床活動を考察した。

■研究会の記録

2011年7月24日、坂本清治氏発表「久高島山村留学と負の感情の乗り越えと成長」より。

——私が抱えている怒りやねたみといった負の感情、子どもたちが抱えているもの、それを認めて初めて次のステージがあるはずなのに、いまの学校の現場はその存在すら認めない。よく問題を起こす子がいる。悪い子ではないが、自分で考えない、決めない。「自分で考えても、どうせそうさせてはもらえないから、考える意味がないじゃないか」とふてくされる。親がずっとそういうふうに関わってきた。そんなやりとりをずっと繰り返していてふびんだった。そのとき、私は泣きながら、彼を大声で怒鳴りつけ、叩いた。いま14人の小中学生がいるが、周りでもな聞いているし、見ている。

■今後の課題

①感情の移り変わりの「あわい」に関する質的研究の深化、②負の感情に関する通文化的アプローチの模索、③災害をめぐる今昔の負の感情調査、この3つが今後の課題である。

こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究

——人類はこころをどのようにとらえてきたか？

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）＋ 奥井 遼（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定研究員）

■概要

人類は「こころ」をどのようにとらえてきたか、宗教・哲学・芸術・思想・科学の観点からアプローチし、「こころ」観の多様性を浮き彫りにしつつ、その多様性の中の共通原理に迫る。そのための基礎研究として、思想的・比較文化論的な考察を加え、「こころ」観の変遷や多様性を俯瞰する。その際、霊長類からヒトへの進化の視点を念頭に置く。また、「こころ観」研究から抽出される論点を整理していく。

具体的には、日本列島に生きた人々がどのようなこころを持ち、こころについての思想を持ったのかを通史的に見てゆく。①縄文遺跡から見る日本列島人のこころ観、②弥生遺跡・古墳から見る古代人のこころ観、③古事記・日本書紀・古語拾遺などの神話と古代神道から見る日本人のこころ観、④仏教から見るこころ観、⑤儒教から見るこころ観、⑥近代日本のこころ観、⑦空海の「秘密曼荼羅十住心論」と最澄の「道心」（山家学生式）観などについて、研究発表をしながら議論し、考察を加えてゆく。同時に、サルやチンパンジーやゴリラとヒトのこころについての連関と差異について、またこころ観の文化差や地域差や時代差、あるいは精神疾患との関係について考察を加える。

この「こころ観の研究」によって、さまざまなこころ研究の思想的前提を確認し、共通の土俵作りや、それぞれの研究者のよって立つ位置の自覚を促し、多様性を認めつつ、「こころ」モデルを析出・整理する。

■2011年度活動実績

I 研究会・シンポジウム

・第1回研究会

2011年5月16日、京都大学こころの未来研究センター小会議室2にて開催。詳細はワザ学の報告を参照。

・第2回研究会（ワザ学研究会・負の感情研究会との合同研究会）

2011年7月28日、京都大学東南アジア研究所東棟1階会議室107号室にて開催。発表は濱野清志京都文教大学教授、永澤哲同大学准教授、指定討論は井上ウイマラ高野山大学准教授、熊谷誠慈京都大学白眉プロジェクト助教。

脳科学、臨床心理学などの知見から、「こころ」とその変容の諸相について検討した。外界や内界のイメージそのものが刺激となって脳が動いていること、刺激を受けてから意識による認識までの間にタイムラグがあることから、「こころ」における情緒的・認知的な多様な働きを確認することができた。また、「トゥクタム」と呼ばれる、瞑想による身心の特殊変容事例の報告から、身心変容に関する技法の意義を明らかにした。

・一般公開シンポジウム

京都府・京都大学こころの未来研究センター主催、古典の日推進委員会後援で2011年11月23日、稲盛財団記念館3階大会議で「ワザとこころ～葵祭から読み解く」をテーマに開催。第1部は映像『京都歳時記 葵祭』上映と大重潤一郎監督（NPO法人沖縄映像文化研究所理事長）の講演「京の祭り」と沖縄の祭りを比較して」。第2部はパネルディスカッション、嵯峨井建賀茂御祖神社禰宜・京都大学非常勤講師（神社祭祀研究）「下鴨神社（賀茂御祖神

社）の葵祭と神饌」、村松晃男賀茂別雷神社権禰宜（NPO法人葵プロジェクト理事・事務局長）「上賀茂神社（賀茂別雷神社）の葵祭と競馬と葵」、やまだようこ京都大学大学院教育学研究科教授「京の祭りのワザとこころを探る」、司会は鎌田東二。

京都の伝統文化の根幹をなす古代からの祭り「葵祭（賀茂祭）」を通して、そこに内在する「ワザとこころ」を読み解いた。葵祭を支えてきた神官の語りから、京都を代表する祭りである葵祭における儀式、とりわけ「神饌」「走馬」に焦点を当て、その構造と物語の歴史的意味と今日的な意味を検討した。その際、単に京都の伝統文化を分析するばかりではなく、沖縄の「神の島」と呼ばれた久高島の伝統的祭祀などと比較することによって、より深く広く、「葵祭」の「ワザとこころ」のありどころを確認することができた。

II 「こころ」に関する語彙のデータベース作成

2011年度のこころ観研究会では、「こころ」に関する語彙のデータベース化を図るため、岩波書店発行の「日本古典文学大系」全100巻所収の「こころ」に関する語彙を検討した。上古から中世まで約400件の文献を調査したところ、全文字数に対する「心」の頻出割合（パーミル）は、表1のように推移していることが明らかになった。

表1

| | 上古 | 中古 | 中世 |
|----------|--------|-------|-------|
| 歴史・神話・小説 | 0.19 | 0.394 | — |
| 物語 | — | 2.854 | 1.222 |
| 小説・説話 | — | 1.216 | 2.609 |
| 和歌・歌謡 | 0.319 | 1.912 | 1.064 |
| 連歌 | — | — | 2.803 |
| 漢詩・漢文 | 0.745 | 1.272 | 0.791 |
| 評論・国学 | — | 4.302 | — |
| 日記・紀行 | — | 2.092 | — |
| 劇文学 | — | — | 2.876 |
| 随筆、随想・説教 | — | 5.441 | 2.334 |
| 合計 | 0.2882 | 3.094 | 1.737 |

研究プロジェクト

こころとモノをつなぐワザの研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）＋ 奥井 遼（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定研究員）

■ワザ学研究分科会「世阿弥伝書を読み論じる会」

京都大学こころの未来研究センター225会議室にて、毎月2回、河村博重（観世流能楽師、京都造形芸術大学客員教授）氏を交え、世阿弥の書き残した「伝書」を用いて、ワザを言葉によって記した世阿弥の思想および文体を読み解くことを行ってきた。

2011年度は、『花鏡』『至花道書』『申楽談義』の講読を行った。精読を通じた議論によって、世阿弥における理論家・実践者・興行主としての多面的な語り口を分析することができた。

また、注目すべきトピックとして「世阿弥とオノマトペ」が挙げられた。謡曲のみならず伝書においても反復表現を用いた文体が散見される。伝書における「反復」を検討することは、世阿弥の文体を理解するための1つの糸口として提示できよう。

■研究会

「ボディーワーク研究ことはじめ」

2011年5月16日、京都大学こころの未来研究センター小会議室2にて開催。

発表は井上ウィマラ高野山大学准教授「テラワダ仏教におけるこころ観とこころを制御するワザについて」、熊谷誠慈京都大学白眉プロジェクト助教「チベット仏教におけるこころ観とこころを制御するワザについて」、指定討論は魚川祐司氏（ミャンマー・テラワダ仏教僧侶）。

瞑想の実践の分類と概要について報告を受け、今日のボディーワークとして活かす道を探った。報告によれば、瞑想はその内容によって40種類に分けられる（イメージする、死体とその腐敗する過程を見つめる、呼吸を見つめる、四無量心〈慈悲喜捨〉、食物摂取に関する厭わしさを想う、身体の要素分

析〈地水火風〉、非物質性〈空間の無限性、意識の無限性、虚無性、非想非非想〉を想うなど）。その技法瞑想の実践における今日的意義を論じるための素地を固めることができた。

また、チベット仏教における「こころ」の概念を検討することによって、7世紀以降、北部インドでのみ盛んであった仏教諸学派の理論を効率的に整理しようと努力し、その中で、説一切有部、経量部、唯識派、中観派の順番に仏教哲学が深まりを見せていく、その形成過程を検討した。チベット独自の認識論は、こころを練り上げていくワザの諸相として意義深いことが示された。

第2回研究会・ワザ学研究会・負の感情研究会合同研究会

（詳細は「こころ観」報告書を参照）
シンポジウム「沖縄・久高島のワザとこころ～その過去と現在」

2011年11月24日、京都大学こころの未来研究センター大会議室にて開催。

大重潤一郎（NPO沖縄映像文化研究所理事長・映画監督）監督作品「久高オデッセイ 第二部 生章」（70分）、「水の心」（30分）上映後、大重監督「久高島のワザとこころ」、須藤義人沖縄大学専任講師（映像民俗学）「沖縄の民俗文化・祭祀芸能文化におけるワザの伝承について」、坂本清治久高島留学センター代表「久高島山村留学と負の感情の乗り越えと成長」の発表。指定討論はやまだようこ京都大学教育学研究科教授（発達心理学）。

「神の島」と呼ばれた久高島における祭祀の歴史的意義と現状、および久高島における山村留学の取り組みの紹介を通じて、久高島の暮らしの意義深さと苦勞、ひるがえって、現代社会のあり方に対する問題提起を得ることができた。

「地球儀を少し回転すると京都ではな

く沖縄が東アジアの中心に位置する」という大重監督の発言からは、近代の都市国家についての価値観を転換させる発想を、「人が人とすり合わせをするというか、付き合い、ぶつかり合って、初めて人は人になる」という坂本代表の発言からは、今日の教育における自然との付き合い、人との付き合いのあり方を問い直すきっかけを得た。

■フィールドワーク：能舞「弁財天マリア」「宇宙」

2011年3月21日、東京自由大学主催の春合宿（関西セミナーハウス）にて、能舞「弁財天マリア」の実演を行った。鎌田の法螺貝やアコースティックギター、歌唱に合わせ、河村博重師が翁面や女面を用いて舞った。震災の影響も冷めやらぬ中、苦悩や希求、慈愛の表現が強制的に感得された。

2011年6月7日、JAXA - 京都大学連携パネルディスカッション（沖縄・コンベンションセンター）にて能舞「宇宙」を披露。最上の衣装を用い、上演中に2度、冠の付け替えをするなど、異例の演出。「影向の松」ともつかぬ月面映像により「この世のものでなさ」を現出。複式夢幻能の二重の世界が月面と地球に対照され、「我見（この世）」と「離見（あの世）」を「反映」「循環」するような舞を創作した。



能舞「宇宙」

現代における自己意識・他者意識の研究

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■プロジェクトの問題意識

これまで心理療法の、西洋の近代的自己意識や主体の成立を前提としたものであった。それは心理療法が19世紀から20世紀初めにかけて成立してきた事実にも反映されている。自分で自分を振り返る自己意識は罪悪感や劣等感などを生みだし、さらにそれは神経症的な葛藤や症状にもつながっていく。心理療法自体まさに自分を振り返る場として機能していたのであり、心理療法においては症状の生成にも治療メカニズムにも自己意識や内面の成立が基本的な前提条件とされてきたのである。

日本では、西洋ほど明瞭な自己意識がみられることは少ない。しかしその中で、箱庭療法の普及にも認められるように、ものに魂を認めるような前近代のあり方が残る日本人の意識の曖昧さも生かしつつ、自己意識を前提とした心理療法が行われてきた。ところが近年では、対人恐怖をはじめとするいわゆる神経症が激減し、解離性障害、暴力や自傷などの行動化、発達障害など、葛藤や自意識の問題が認めにくいケースが増加して、これまでの心理療法のパラダイムが通用しないことが多くなってきた。本プロジェクトは、こうしたところの問題の変遷の背景にあると考えられる現代の意識のあり方を捉え、それがどのように新しい可能性に開かれているのかを考える上で、これまでの日本にみられた意識のあり方を参照し、より広い視点から検討を行うおうとするものである。

■サブプロジェクト:

『遠野物語』の新しい〈読み〉

このサブプロジェクトでは、臨床心理学者に加え、赤坂憲雄らの民俗学者、古代文学が専門の三浦佑之らの連携研究員が共に柳田國男の『遠野物語』を読み、20世紀初頭にみられた日

本人の意識について多層的、多角的に研究を行っている。そのなかで東日本大震災を受けて、『遠野物語』第99話が検討された。これは明治29年の三陸大津波の際の話で、概要は以下のようである。

福二という男が大津波で妻子を失い、1年たった夏のはじめの月夜、便所に起きてみると、霧の中から男女が近づいてくる。女は亡くなった妻であった。思わずあとをつけて名を呼ぶと、振り返ってにこと笑った。男も同じ里の者で津波で亡くなったのだが、福二との結婚前に妻が心を通わせていた男だった。女は、今はこの人と夫婦になっていると言うので、福二が子どもはかわいくないかと問うと、女は少し顔色を変えて泣く。福二が悲しくなって足下を見ている間に男女は見えなくなった。追いかけてみたが、ふと死したる者と気づき、夜明けまで考えて帰った。その後、福二は久しく煩ったという。

お盆は、亡くなった人と再び会える機会として日本人のこころになじんできた。福二も初盆の夜に妻と再会する。目前に現れた妻を福二は追い、声をかける。今は別の男と連れ添っていると妻に、福二は子どものことを持ち出すが、妻は姿を消してしまった。このような物語の展開を考えれば、妻が福二の元に現れたのは、妻と再び「出会う」と共に、「別れ」を体験するためであったのかもしれない。津波は無残にも福二と妻をこの世とあの世に分断してしまった。けれども、このような物理的な別れは、必ずしも心理的な別れを意味するわけではない。妻が福二を置いて消え、最後に、男女が「死したる者」であると気づいたことで、福二と妻の別れは決定的となる。これこそ、福二がこころのレベルでも妻を「喪失」した瞬間である。そして、その後の福二の病が示すように、

この喪失は、福二に妻の存在の大切さを教えるための「出会い」でもあった。

東日本大震災の大津波がもたらした途方もない被害を思ってみても、私たちのこころは、いくら物理的に離れてしまっても、大切なものとの別れを簡単には体験できないものと思われる。この物語の結末は、喪失を体験して生きる個人の苦悩を一方では映し出している。特に未曾有の災害では、どのように傷や悲しみを「癒やす」ということに目が向けられがちである。しかしこの物語は、人は本当に大切な存在を失ったとき、引き裂かれるような苦しみを通してこそ、その存在の大切さを真に体験するのだということを教えてくれる。福二という個人の「小さな物語」としては切なく悲しいこの話は、心理学的にはこのような「大きな物語」として読むこともできる。

もちろん、現実を生きる人々に関わる場合にはこうした「大きな物語」に沿わねばならないわけではない。我々は日本箱庭療法学会と日本ユング派分析家協会合同で震災対策ワーキンググループを立ち上げ、「ケアする人のケア」をテーマに活動してきた。こころの未来研究センターでは、畑中千紘助教と長谷川千紘研究員が事務局員として活動をサポートしてきた。その中で被災地で聞かせてもらった話は、個人の「小さな物語」には収まらないほど耐えがたいものであることが多い。

一方、この震災では、原発問題に代表されるように、これまで日本人のこころになじんできた“無常観”のような「大きな物語」でも収まりがつけられない問題も多く残っている。実際には「小さな物語」と「大きな物語」のはざまで、どのように収まりをつけられるかを個々が選択していくのであり、臨床的な支援はそれを支える役割を担わなければならないだろう。

研究プロジェクト

感情・認知機能に及ぼす他者・モノの影響

吉川左紀子(こころの未来研究センター教授) + 上田祥行(こころの未来研究センター研究員)

このプロジェクトでは、人間の感情や認知機能が、周囲に存在する他者やモノによってどのような影響を受けるのかを明らかにすることを目的として、行動科学の実証的な手法を用いて進めている。

■周囲にある笑顔がパフォーマンスを高める:続報

『こころの未来』第7号(2011)では、「当面の課題に直接関係のない、周辺に提示された喜びの表情写真が、ターゲットの検出と判断を、非常に早い時間帯で促進する」という実験結果が得られたことを報告した。画面の四隅に、にっこり笑顔の表情写真が提示されると、その直後に画面の中央に提示される多数の文字から、ターゲットの文字を見つける視覚探索課題の反応時間が、早くなるのである。この実験を始めたときは、課題に無関連な周辺の情報は、表情写真であれ他の画像であれ、課題(視覚探索)に対する注意を逸らし、パフォーマンスの効率を下げるのではないかと予想していた。しかし結果は予想とは逆に、喜びの表情写真が周囲にあると、ターゲットの探索課題の反応は促進されることが分かったのである。

次の問いは、周辺にある喜びの表情写真が、なぜこのような促進効果をもたらすのか、その機序はどのようなものなのか、ということである。この問いに答えを出すには、まず「反応を促進する」ことの中味を、もう少し詳しく分析してみる必要がある。そのために、この課題を遂行している実験参加者の「目の動き」を手がかりにして、視覚探索課題に対する判断過程の、どの部分が促進されたために反応時間が短縮されたのかを調べることにした。

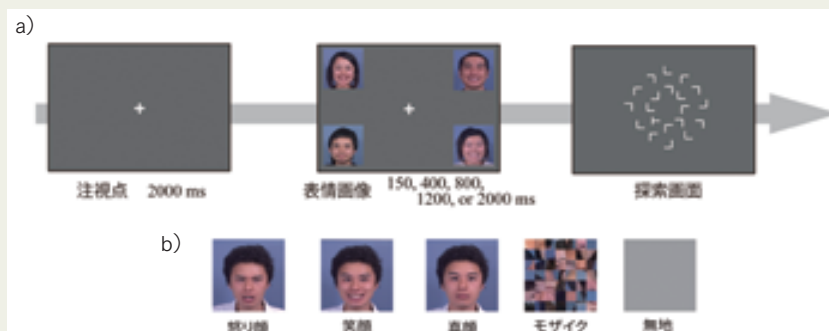


図1 a)実験の流れ図 b)周辺に提示される5種類の画像

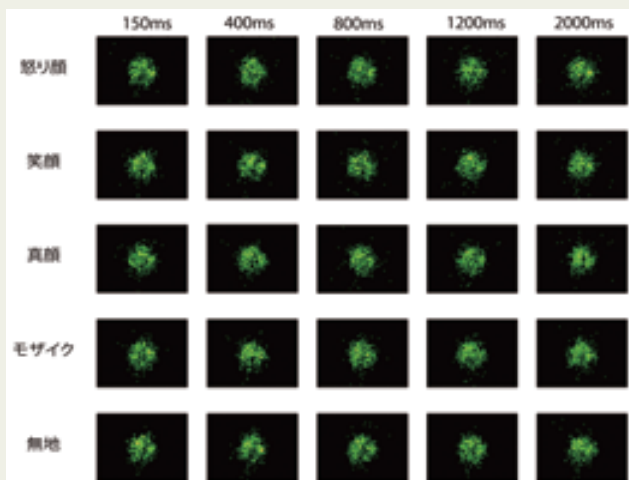


図2 目の停止位置の分布の様子

■眼球運動計測から分かってきたこと

図1はこの課題の流れを左から右の時間軸であらわしている。視覚探索課題の前にモニターの四隅に提示される画像は、怒り、喜び、中性の表情写真、モザイク様の画像、灰色の四角の5種類であった。モザイクや灰色の四角は、表情と比較するための統制条件である。Eyelink1000という装置を用いて、実験協力者の目の動きの詳細を記録し分析した。図2は、周辺に提示される画像の種類と、提示時間別に、実験協力者の目の停止位置(fixation points)を表したものである。人間の目は、短時間の停止(fixation)と、すばやく別の場所に移動(saccade)することを繰り返しながら、画面の情報を読みとっている。図2を見ると、どの条件でも、目は、等しく視覚探索課

題の刺激の提示位置にとどまっており、周辺に移動するようなことはない。また、目の平均移動速度や、停止時間、最後の停止から反応キーを押すまでの時間のいずれも、視覚探索の反応時間とは相関しなかった。

一方、ターゲットを発見するまでの目の停留回数は、視覚探索の反応時間と強い相関を示すことが分かった。つまり、周辺に喜び表情が提示される条件での反応時間の促進は、停留回数の減少と関係していたのである。このことは、周辺に笑顔があると、1度の目の停止で処理される刺激の範囲(有効視野)が広がっている可能性を示唆している。

笑顔が人の課題遂行に影響するプロセスの詳細について、さらに分析をつづけてゆく予定である。

共感的対話の相互作用性：カウンセリング対話の記憶

吉川左紀子(こころの未来研究センター教授) + 長岡千賀(こころの未来研究センター助教、現追手門学院大学経営学部准教授)

■聴き手の専門家としてのカウンセラーの特性

本プロジェクトは、心理療法のカウンセラーが行うカウンセリング対話に焦点をあて、カウンセラーの「専門性」とは何かを実証的に明らかにすることを目的としておこなっている。出発点になったのは、「人は自分の悩みをカウンセラーに語ることで、なぜその悩みを乗り越えることができるようになるのか」、「カウンセリングの専門家と、そうでない人とは、話の聞き方どのような違いがあるのか」という2つの疑問である。対話が人を変える力について調べてみたい、なぜカウンセラーの対話には、人を変える力があるのかを知りたい、というのが動機だった。

1つめの問いは難問だが、2つめの問いは、実証的な検討が可能である。2つめの問いについて調べることが、1つめの問いを知る手がかりになる可能性もある。そこで、これまで、カウンセリングのプロである臨床家と非臨床家の聞き方をさまざまな指標（発話時間、まばたき、身体同調など）を手がかりに比較分析してきた（『こころの未来』第7号）。

カウンセラーではない筆者らからみて、熟練のカウンセラーの優れた能力のひとつに、「長時間の対話の流れを正確に記憶すること」がある。50分間のカウンセリング対話のビデオ映像を見たあとで、どのような流れの対話であったかを話し合ってみると、カウンセラーは対話の内容を実に詳しく正確に記憶しており、とくにクライアント（相談者）の発話の記憶が詳細で驚くことがよくあった。対話内容の記憶の詳細さや正確さは、対話中の「聞き方」の反映でもあるだろう。そこで、カウンセリングの熟練者の特性を、対話の記憶という観点から調べる目的で、以下の研究を行った。

この研究には、4年以上の実践経験をもつカウンセラー（臨床家）11名（うち6年以上の経験を有する熟達者4名、6年未満の初心者7名）と、非臨床家12名が参加した。2つのカウンセリング対話のビデオ映像（各23分間）を視聴した後に、「クライアントの発話について思いだせるものはすべて書き出す」という再生課題を行った。

■クライアントの発話の記憶

実験に参加した臨床家と非臨床家の再生した文章を、対話の逐語記録と対応づけて分析し、発話の意味が正確に再生されている部分を「再生項目」としてカウントした。図1は、2つのカウンセリング対話（CaseA, CaseB）について、熟達者、初心者、非臨床家のそれぞれが再生した、平均再生項目数をあらわしたものである。図を見て分かるように、熟達者は、2つの対話のいずれについても再生項目が多く、非臨床家の1.5倍を超えている。一方、経験の浅い臨床家（初心者）は、2つの対話の間の再生数に大きな開きがあり、記憶しやすい事例とそうでない事例があることが分かった。また、非臨床家は、全体に再生項目数が少ないだけでなく、個人差が非常に大きいことも特徴的であった。

再生されたクライアントの発話内容の詳細を分析したところ、発話の中で、熟達者全員がとくに注

目する部分があり、その部分の再生は非常によいことが分かった。たとえば、クライアントが大学で「弦楽のサークルに入っている。中学からずっとピオラを弾いていた」という、クライアントの性格を知る手がかりになる発話部分（図2）や、「コンビニで売っているプリンとかを夜によく食べる。ご飯を食べておなかいっぱいになったと思うけれどなんか食べてしまう」といった、クライアントの主訴を表現した発話部分などは、熟達者の全員が一連の流れを正確に再生していた。このことから、熟練のカウンセラーは、長時間のやりとりの中で、クライアントの内面を理解するうえでとくに重要な箇所を詳細まで記憶していることが分かった。熟達者の再生パターンが示す特徴は、クライアントの発話を理解する、熟達者のもつ「共通の枠組み」を表しているのではないかと考えている。

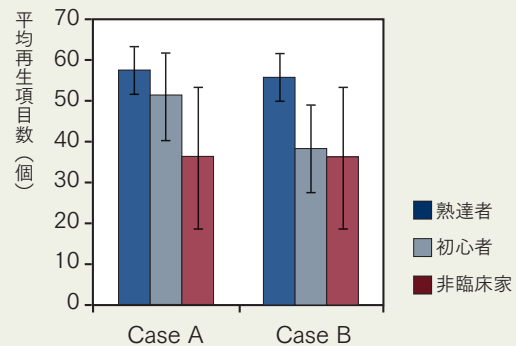


図1 臨床家(熟達者、初心者)と非臨床家の平均再生項目数

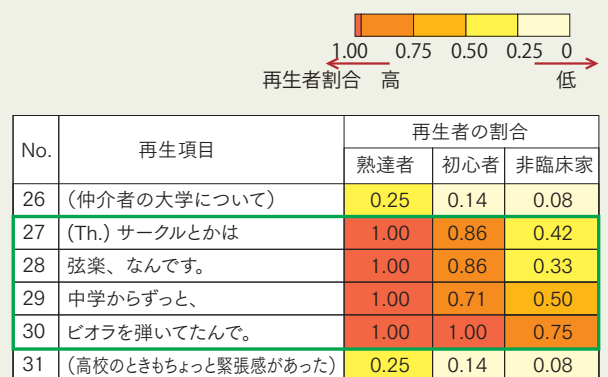


図2 熟達者全員が再生した発話の一例

研究プロジェクト

社会的ネットワークの機能と性質：「つなぐ」役割の検証

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

本研究は、人と人とのつながり（社会関係資本）が形成される過程と、つながりの中でもたらされる社会的サポートの効果の検討を目的としている。本研究プロジェクトでは、特に農村コミュニティにおいて社会的ネットワークの構築において「プロ」の役割をもつ普及指導員に注目して検証している。本年度は特に、どのような性質あるいは行動様式をもつ普及指導員が社会関係資本の向上に寄与しているかを検証した。

■調査の実施

農村コミュニティにおいてネットワーク形成を支援することの重要性やそのための普及指導員のスキルについて検討するべく、2010年度に、全国農業改良普及職員協議会の協力を得て、全国の普及指導員を対象とした調査を実施した。さらに、2011年度に愛知県下の普及指導員への調査も行った。これらの調査の実施により、主に次の3点についての検証が可能になった。

第1に、2009年度の調査に参加した近畿の普及指導員にも改めて全国調査に参加してもらったこと、さらに2011年には前年度に全国調査に参加した愛知県の普及指導員に調査に参加してもらったことにより、近畿では2009～2010年度の、愛知では2010～2011年度の、パネルデータとしての時系列変化を検討することが可能になった。これにより、普及活動が農村コミュニティ内の社会的ネットワークの発展に実際に寄与しているかどうかを検討することができた。

第2に、全国の普及指導員を対象にした調査の実施により、2009年度の調査では得られなかったより詳細な検討を行うことができた。それは主にどのような特徴をもつ普及指導員が農村コミュニティにおける社会関係資本の向

上に寄与しているかという分析である。

第3に、これに関連して、地域ごとに異なる効果の有無の検証である。

2011年度にはこの全国調査のデータの解析を完了させることができた。主な結果は下記のとおりである。

1) 農業者同士の連携を促進するための普及活動、関係機関との連携を促すための普及活動、将来に向けてのビジョン提示のための普及活動、そして、地域の具体的な問題を指摘するような普及活動が特に効果を持ちやすいことが示された。この中でも、農業者同士の連携、ならびに関係機関との連携調整に関する普及活動は、農村社会の社会関係資本に関わる普及活動だと考えられる。なお、農業者同士の連携を促進するための普及活動は、1人の普及指導員の担当する農業経営体の数が平均的に多い都道府県ほど、効果的であることが確認された。

2) どういった特徴を持つ普及指導員が、コミュニティ内部の信頼関係（社会関係資本の一種）を高めやすいかを検討した。その結果、関係機関との連携活動に優れた普及指導員やコミュニケーション能力に秀でた普及指導員が、住民同士の信頼関係を高めやすいことが示された。また、普及指導員個人の特性だけでなく、普及指導員を取り囲む社会関係も重要な影響力を持ち、普及指導員とコミュニティの結びつき、そして普及指導員の職場の人間関係の良さも、コミュニティ内部の信頼関係を高める効果を持つことが示された。このことは、普及指導員を囲む「つながり」が、別の場所の「つながり」へと連鎖することを示唆している。

3) 各普及指導員が対象としているコミュニティの生活レベルに、そのコミュニティの住民同士の信頼関係がどのような効果を持つかをパネル・データで検討した。その結果、住民同士の信

頼関係が強いほど、そのコミュニティの生活レベルが高くなることが示された。この結果は、農村コミュニティにおける社会関係資本の重要性を示している。

4) どのような特徴を持つ人物が同僚から尊敬されやすいかについて、普及指導員と他の公務員（教員、技術職、事務職）を比較した。その結果、他の公務員と比べて普及指導員の間では、他者（たとえば農業者）の視点に立とうとする傾向（他者志向）、チームワーク、視野の広さに優れた人物が尊敬されやすいことが示された。また、普及指導員と教員の間では、技術職や事務職に比べて、情熱的な人物が同僚から尊敬されやすいことが示された。こうした特徴が普及活動において重要な役割を果たしていることが示唆される。

5) 普及指導員の日々の業務の中での感情経験に影響する要因を検討した。その結果、普及活動に関わる知識・技術、コミュニケーション能力の高い普及指導員ほどポジティブ感情を経験しやすく、ネガティブ感情を経験しにくいことが見出された。特にポジティブ感情に関しては、知識や技術よりもコミュニケーション能力がより強い効果を持っていた。また、コミュニティ内部の信頼関係も普及指導員の感情経験に影響し、強い信頼関係のあるコミュニティで活動する普及指導員ほど、ポジティブ感情を経験しやすく、ネガティブ感情を経験しにくかった。

■対外活動ならびに成果の発表

2011年11月に開催された全国普及活動研究大会での基調報告とそのまとめ（「技術と普及」2012年2月号掲載）、書籍『農をつなぐ仕事』（内田由紀子・竹村幸祐、創森社）の出版、日本心理学会でのワークショップなどで成果を報告している。

文化と幸福感：社会的適応からのアプローチ

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

■研究目的

日本文化は関係志向的、もしくは相互協調的であり、人々が「関係性」を重視していることが示されてきている。しかしその一方で、近年の日本においては、「ひきこもり」など、不適応感や対人関係の難しさとコミュニケーションの不全が取り上げられることも多くなってきている。

本研究では若者の幸福感と不幸せ感を検討し、心の健康と文化・社会的適応に関連する諸分野への貢献を目指す。さらに、日本文化の中で中心に見られる現象だけではなく、一般的傾向とは異なる行動様式や価値基準を持つ若者たち（特にニート・ひきこもり・フリーター傾向の強い若者）を対象に調査を行うことで、若者の心の変化を検証する。従来の社会心理学・文化心理学は、集団内の「中心的傾向」を対象とし、文化内の分散はあまり考慮に入れられなかった。それゆえに、個々の文化の中で生じる適応・不適応がどのような形で表れるのか、またそのような文化の中心にはいない人たちの心理傾向については明らかにされていない。本研究では、適応感や不適応感を導く文化内の分散・個人差を考慮に入れた実証データの提示を試みることで、より多層的な幸福感の有り様を明らかにする。さらに昨年度までのプロジェクト「青年期の社会的適応：ひきこもり・ニートの文化心理学的検討」を継承し、実際に社会で起こっているさまざまな心の問題へのアプローチを視野に入れる。

本研究は、1) 現代日本社会におけるコミュニケーション、自己価値の置き方、感情表出等を検証し、これらと幸福感の関連を調べる、2) ニートやひきこもりに関連する社会・文化的構造について、文化心理学による日米比較研究を通じて検討を行う、という2

点を検討することを目的としていた。さらに2011年3月の東日本大震災を受けて、日本における幸福感についてより包括的な視点から考察する取り組みも行った。

これらの視点を組み合わせ、社会心理学的に動機づけ、自己観、態度などを分析することにより、日本におけるひきこもりやニートについてどのようにアプローチしていくべきかを検討し、得られた知見を社会に還元していくことが可能になると考えられる。また、アメリカなど他の地域と比較検討する視点を持つことにより、日本文化の持つ構造との関わりについて具体的に考察する。

■研究内容とその成果

1) ニート・ひきこもりと動機付けについての考察を深め、連携研究員のピナイ・ノラサクンキットとの共著論文の執筆・刊行に至った。2011年12月に発表された論文（Norasakkunkit & Uchida, 2011）は多くのメディアで取り上げられた。また、2011年5月31日にひきこもりを考えるワークショップ「映画『扉のむこう』上映会～「ひきこもり」に迫る～」を開催、ローレンス・スラッシュ監督らとともに、ひきこもりの心と社会についての討論を行った。

2) ニートやひきこもりに関連する社会・文化的構造について、文化心理学による日米比較研究を通じて検討を行った。特にニート・ひきこもり傾向と表情判断の関連を調べる実験研究を行い、ニート・ひきこもりリスクが高い学生は、ある人物の表情判断においてより周辺情報にも注意が向けられていることが示された（矢野・内田・増田, 2012）

3) 幸福感について心理学のみならず経済学や社会学の関係者とのディスカッションを重ね、現在日本の幸福の指標のあり方ならびに東日本大震災が幸福感と対人関係に及ぼした影響につい

て検証し、論文での成果報告を行った（内田, 2011〈日本計画行政学会論説賞受賞〉；内田・荻原, 2012）。

4) 近年の日本社会には個人主義的な傾向が、制度上あるいは心理傾向としても取り入れられていると考えられる。こうしたことが生み出す心理的な幸福感への影響について検討する実験と調査を実施した。実験研究においては、個人の成果が問われるような競争的環境（個人達成志向的環境）もしくは他者との調和が問われる環境（関係志向的環境）のいずれかを想起させ、その環境下での人間関係のあり方や幸福度を判断してもらった。すると日本において個人達成志向的環境は対人関係の結びつきを減じ、幸福感も低下させることが示された。さらには個人達成志向が強い日本人は、より幸福感が低いという、文化内での個人差も示された（内田・荻原, 2012）。

■今後の検討課題

日本における社会構造の変遷と人の心の変化、幸福のよりどころについてより詳細に検討を行うため、実際に成果主義を導入してきたような企業におけるデータ収集を行い、心身の健康と幸福、そして個人主義的価値観との関連を調べていく方針である。

研究プロジェクト

癒し空間の比較研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■癒し空間の定義

「癒し空間」とは、「人びとが、癒しを求め、癒しの効果があると感得され、信じられている空間」である。伝統的には、「聖地」や「霊場」や「巡礼地」などの聖なる場所を指す。そこでは、さまざまな宗教的行為——祈り、祭り、籠り、参拝、神事、イニシエーションなどの儀礼や修行（瞑想・滝行・山岳跋涉等）が行われてきた。

■研究目的

本研究プロジェクトは、日本における政治・宗教・文化・観光の中心を成してきた平安京・京都に形成されてきた寺社や聖地などの「癒し空間」を、宗教学・資源学・生態学・民俗学・芸術学・衣食住文化研究・認知科学・認知心理学・臨床心理学などの方法を用いながら総合的・多角的に研究し、世界各地の癒し空間との比較研究を試み、人に安らぎや崇高さを感じさせる場の特色とその心的メカニズムを突き止めることを目的とする。

癒し空間は、資源論・環境論・地域論・文明論の観点から見ても生態智を伝承してきた拠点としてきわめて興味深く、そこから抽出された特性は現代の心の平安を再検討していく際に多大のヒントを与えてくれる。人類文明の“安心”“安全”“安定”という「平安」の条件や機能を再検証し、再活用する可能性を示唆し、また京都府や京都市、他の地域との連携により、研究成果をシンポジウムやセミナーなどで社会発信していくことが期待できる。

■研究会と研究活動

2011年度は2回の研究会と2回の東日本大震災被災地の調査（2011年5月、10月）と近畿大水害に見舞われた天河大辨財天社の被害調査（2011年9月）を行った。

第1回研究会は2011年10月26日、須田郡司氏（写真家・京都大学地域研究統合情報センター共同研究員）「石の聖地の比較研究」、鎌田東二「水の聖地・天河大辨財天社の癒し空間と台風12号による被害状況報告」。第2回研究会は同年11月17日、小林達雄國學院大學名誉教授（縄文考古学）「縄文遺跡と延喜式内社～縄文中期最大の住居跡・岡田遺跡と寒川神社、勝坂遺跡と有鹿神社との関係について」、鎌田東二「癒し空間と延喜式内社の研究について」。

■癒し空間に伝承される生態智

「生態智」とは「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの技法と知恵」である。その生態智の集積した都市が、平安京以来1200年以上続く京都であると考え、それを「平安京生態智」と呼んでいる。

「生態智」は、ヨーロッパ諸言語で言えば「エコソフィア ecosophia」ないし「エコロジカル・ウィズダム ecological wisdom」であるが、それをわが国でもっとも早く明確なメッセージ性を持って使用したのが南方熊楠である。彼は明治政府が推進した神社合祀令に対して「エコロジー」という言葉を使って反対運動を展開した。神社合祀が地域文化と生態系を空洞化し破壊することを予見し、神社合祀は敬神思想を弱め、民の和融を妨げ、地方を衰微させ、国民の慰安を奪い、人情を薄くし、風俗を害し、愛国心を損ない、土地の治安と利益に大害をもたらし、史蹟と古伝を滅却し、天然風景と天然記念物を亡滅する、百害あって一利なしの亡国の政策であると批判した。

一方、「生態智」を現代思想の根本問

題と洞察したのがフェリックス・ガタリの『三つのエコロジー』（平凡社、2008年）である。ガタリはこの書で、環境のエコロジー（生物間の相互関係性や生物と環境との相互関係性をバランスさせる知と実践）、社会のエコロジー（いびつな病理的関係や偏差をとまなう権力関係のゆがみや抑圧を取り除く解放の知と実践）、精神のエコロジー（イメージ操作を受ける現代人の主体的関係性の再創造であり想像力の動的編成）の3つを美的に総合する知を「エコソフィー（ecosophy）」と呼び、総合的なエコロジカル倫理学を提唱した。「エコソフィー」から見れば、環境も社会も精神もすべてつながりと循環の中でインターフェースしている。

■延喜式内社と寒川神社

「聖地」とは人々の祈りや祭りが奉じられる聖なる場所であり、人々の心に深い癒しや安らぎや救済をもたらす「癒し空間」でもある。そのような「聖地」や「癒し空間」のデータベースでわが国最古の「聖地」特集ともいえる文献が『延喜式』神名帳で、そこに記された相模国の古社13社の中でとりわけ格式の高い神社が寒川神社である。その寒川神社を中心に、鎌田東二編『日本の聖地文化—寒川神社と相模国の古社』（創元社、2012年3月刊）を上梓した。本書では、日本列島の生成、地質・地形、生態系、地理、縄文遺跡・弥生遺跡・古墳時代遺跡と相模国の形成、寒川神社と延喜式内社の分布と遺跡との関係、寒川神社と方位信仰など、日本列島1万年の時空間の中に「聖地」や寒川神社や相模国の延喜式内社を位置づけ、聖地が聖地である理由を「聖地環境学」や「神社生態学」というべき新視点から解明した。

発達障害への心理療法的アプローチ

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■プロジェクトの問題意識

広汎性発達障害に対しては、薬物療法と訓練教育が中心的な対応になりつつあり、心理療法的アプローチは適さないとの見方もある。しかし、心理臨床の現場からは、発達障害についても心理療法の有効性が主張され、2000年代以降も多くの成功例が報告されている。それを受けて、われわれは「発達障害への心理療法的アプローチ」プロジェクトを立ち上げ、主に事例検討から、有効な心理療法のエッセンスを捉えてきた。そして、イメージや遊びの構造的変化に着目するなど、象徴解釈とは異なる視点からクライアントを捉え、「主体の発生」に立ち会う心理療法が有効であることを確認した（河合，2010）。このような観点は、これまで臨床事例研究という方法で専門家に発信される場合が多く、社会的関心が高まった現在においても、発達障害への心理療法の有効性が広く理解されているとは言いがたい。

これに対して本プロジェクトは、医学研究科・十一元三教授と連携し、神経生理学的視点と心理学的視点を協働させて、発達障害の子どもへのプレイセラピーの効果を実証的に明らかにする調査研究を開始している。実践に基づきながら、これまで不足していた定量的知見を提示することで、より広範囲に心理療法の意義を発信し、発達障害への援助体制の確立に貢献できると考えている。

■発達障害の子どもへのプレイセラピーの実践と研究

当センターのプレイルームにて、発達障害の子どもを対象に、プレイセラピーの実践と研究を行っている。これは、6カ月間プレイセラピーを行い、（1）プレイセラピーの前後で子どもにどのような変化が生じるのか、（2）

発達障害の子どもと非発達障害の子どもとでは、プレイセラピーのポイントはどのように異なるのか、という2つの観点から、発達障害の子どもへのプレイセラピーの効果を検証しようとするものである。

本研究は、訓練をうけた専門家・大学院生によりプレイセラピーが行われるため、研究自体が実践・サポートであり、同時にそれが実証研究のデザインによって強化されていくところに大きな特色がある。

平成23年度までに、11名の子どもを受け入れている。

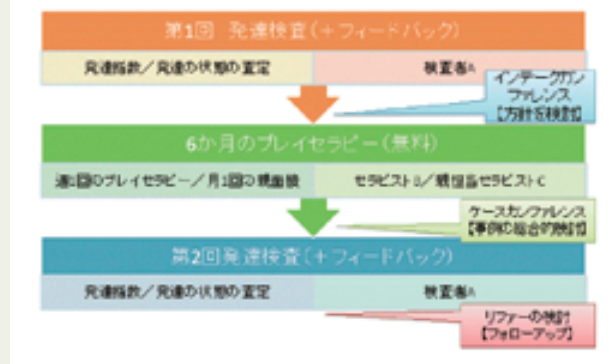
■予備的研究から

これまでの予備的研究から、以下のような知見を得ている。

（1）発達指数とプレイセラピーのプロセスの検討

6カ月間のプレイセラピーを経て、子どもの発達にどのような変化が見られるのか、新版K式発達検査を用いて検討している。また、事例検討によってプレイセラピーのプロセスを細やかに検討することで、定量的には測れない変化を拾い上げようと試みている。プロセスの検討からは、セラピーのなかでの i) 分離にまつわる不安の現れ、ii) 二者関係における拒否／つながりの成立、iii) 遊びに現れる融合と分離の契機、iv) 遊びに現れる高さ・噴出の契機、といった遊びの構造的変化に着目することがポイントとして浮かび上がってきた。今後は、K式発達検査による発達指標のどの側面にどのような変化が見られるのか、プレイセラピー

研究の枠組み



ーのプロセスとの関連から、より具体的に明らかにする必要があるだろう。

（2）非発達障害の子どもとの比較

発達障害と判断されてプレイセラピーに紹介されてくる事例のなかに、セラピーや保護者面接の経過から、非発達障害児と考えられる子どもが複数例見られた。社会的関心の高まりとともに、コミュニケーションの難しさなど表面に現れてくる問題から、そうではないのに、発達障害と判断される事例が増えている印象を受ける。発達障害と非発達障害の事例を比較することで、呈している問題の背景にある発達障害の本質を明らかにしていくことが必要と考えられた。

■今後の展開

今後は、予備的研究で得られた視点を基盤に、受け入れ事例を増やして、数量的・質的な検討を行っていく。発達障害へのプレイセラピーの効果が多面的に測定され、また、それが多くの事例に裏付けされて提示されることで、どのようなタイプの発達障害に対して、どのようなプレイセラピーが有効であるかが明らかになるだろう。本研究で得られた知見を、セミナー等で広く公開することで、学校や家庭などさまざまな場面で、発達障害の子どもへの関わり方にヒントを提供することができるのではないだろうか。

研究プロジェクト

発達障害と読み書き支援

小川詩乃(こころの未来研究センター共同研究員) + 吉川左紀子(こころの未来研究センター教授)

本プロジェクトでは、2007年11月から、小学校低学年の発達障害児を対象として継続的な学習面を中心とした支援に取り組み、あわせて、保護者との面談を通じて、保護者が子どもの状態をよりよく理解するための支援も行ってきた。さらに、児童の読み書き支援とあわせて、発達障害の認知特性を調べる基礎研究を行うことによって、より体系的な支援の構築を目指している。

2011年度には、それまで少人数の児童を対象に週1度の頻度で実施してきた支援のありかたを大幅に見直し、多数の児童を対象とした支援が可能な体制をつくるために、1人の児童に対する支援頻度を変更した。そうした変更に伴い、ひとりひとりの児童の家庭での学習について、保護者にアドバイスすることで、支援頻度の減少に対応できるよう工夫した。

学習支援の頻度は、支援を希望する保護者からの要望、支援に関わるスタッフの数などさまざまな要因のバランスを考慮して設定する必要がある。支援回数の変更が児童や保護者にどのように受け止められているか、アンケートを行った。

■支援の頻度と保護者の満足度

本プロジェクトを開始した2008年度は、週1度の読み書き支援を7名の児童に対して実施した。2011年度は35名を対象に支援を行った（ひとりの児童は2か月に1度の頻度で参加）。1回の支援は、児童への支援45分、保護者への支援15分である（表1）。

新たな支援体制に関する保護者の意見を把握するため、支援の頻度に関する希望を問うアンケートを行った（対象者は33名）。週1回の頻度で支援を受けたことのある保護者は、より多くの支援を希望しているのに対し、開始当初から支援回数が少なかった保護者は

表1 各年度における参加者数と支援頻度

| | 2008年度 | 2009年度 | 2010年度 | 2011年度 |
|---------|--------|--------|-----------|--------|
| 支援頻度* | 週1回 | 週1回 | 月1回または月2回 | 2か月に1回 |
| 新規 | なし | 16名 | 8名 | 8名 |
| 参加者合計** | 7名 | 23名 | 30名 | 35名 |

* 遠方に住む等の事情がある場合は調整した。

** 前年度から継続して支援を受けている児童と新規参加児童の合計。

現状（2か月に1回）におおむね満足していることがうかがえた。

保護者による自由記述から、児童や家庭によって支援ニーズは異なることが示唆された（表2）。現在は小学校6年次までを区切りとして支援しているが、小学校卒業後も続けてほしいという意見も多く、長期的な支援が求められている。今後は、子どもや保護者の多様なニーズに応えられる長期的な支援体制を考えてゆく必要があると思われる。

■支援の内容と研究成果および展望

これまで行ってきた活動を通して、発達障害児の読み書きに関わる認知特徴を整理し、テスト・バッテリーを組み立てて新たな支援課題を開発した。この成果の一部を日本LD（学習障害）学会の自主シンポジウムで発表している。また、コミュニケーションに関わる困難さの評価とそれに対する支援の実践、支援を受けることによる保護者の意識の変化を検討し、成果の一部を第23回日本発達心理学会のラウンドテーブルにおいて発表した。さらに、連携研究員の船曳ら（2011）によって開発されたMSPA（Multidimensional Scale for PDD and ADHD）を一部の児童に実施した。MSPA

表2 保護者の希望する支援頻度とその理由

| 希望する頻度 | 具体的な理由 |
|------------------------|---|
| 週1回 多ければ多いほどよい | <ul style="list-style-type: none"> ・(週1回だと習い事と同じなので) 本人のペースが作りやすい。 ・少しでも良い教育を受けさせたい。 ・回数が少なくなってから、子どものイライラが増えた。ここに来ると帰ってからも機嫌がよく安定した気持ちが続く。 |
| 月1回 月2回 | <ul style="list-style-type: none"> ・忙しいので多すぎても大変だが、継続性や定着力を考えると回数が多くてもいいかもしれない。 ・間があくと落ち着くまでに時間がかかる。 ・あまり来なくなると忘れてしまう(前回話したこと等)。 ・間があいてしまうと親は少し不安。少しでもいろいろ学んでほしいため。 ・学校での問題行動をそのつど相談できるから。 |
| 現状どおり (2月に1回) | <ul style="list-style-type: none"> ・本人・保護者ともに負担なく通うことができる。 ・学校の宿題や習い事との両立を考えて。 ・少し間隔をあけて評価していく方が子どもの成長した点や問題点を理解しやすい。 ・今は現状どおりでいいが、問題が出てきたら頻度を増やしてほしい(問題が大きにならない間に解決できることはしたいから)。 ・中学・高校に入ってから長い期間関わってもらえたら。 |
| その他 (長期休みに集中させてほしい) | <ul style="list-style-type: none"> ・夏休みなど、何日も家にいると、保護者も子どもももたなくなるために、外出できる場がほしい。 |

は、発達障害や注意欠陥多動性障害の特徴を14項目で診断し、ひとりひとりの障害を多面的に評価して支援に役立てるためのチャートである。MSPAを導入することにより、各児童の認知、行動の特徴をより明確に捉えることができるようになった。また、療育に参加している児童を対象に、発達障害児の表情認知特性を調べる基礎研究を行い、発達とともに怒り顔に対する感受性を獲得している可能性が示唆された。

今後も多様な視点を取り入れて支援効果の実証研究を継続するとともに、ひとりひとりの子どもに合った支援のあり方を探ってゆく。

こころ学創生：教育プロジェクト

吉川左紀子(こころの未来研究センター教授)

■こころの科学集中レクチャー

2009年度に開始された「こころの科学集中レクチャー」も3年めとなり、今回も北山忍先生(ミシガン大学：文化心理学)にコーディネータをお願いして3月2日、3日、4日の3日間にわたって実施した。北山先生とともにレクチャーの講師を引き受けてくださったのは、社会心理学の亀田達也先生(北海道大学)、行動遺伝学の安藤寿康先生(慶應義塾大学)である。本センターの集中レクチャーは、3名の先生が1日ずつ、午前、午後の講義を担当し、それぞれの講義の後で、まず講師の間でディスカッション、それに受講生とのディスカッションが続くというセンターオリジナルのプログラムである。双方向のやりとりを重視したこの形式は、1回目から変わっていない。申し込み制で参加した受講生は、理系、文系の学部1年生からポスドクの研究員、さらに他研究科や他大学の教員まで、年齢の幅も、専門領域も多彩である。その分野の先端をゆく講師陣による密度の濃い講義と、熱気にあふれたディスカッションを堪能した3日間だった。

■講義のキーワードは、分配の正義、集合知、行動遺伝学、文化神経科学

亀田先生の講義では、John Rawlsの『正義論』に代表される、「正義」をめぐる規範論的な立場(～すべし)と、人間行動に関する実証的な知見(～である)とは、はたして接合させることは可能なのか?という問いを軸に、両者の対立はどう乗り越えられるのか、という視点から議論した。

安藤先生の講義では、多数の双生児を対象とした膨大なデータに基づく、行動遺伝学の基礎についてレクチャーした後、ひとりひとりの遺伝情報から個人の健康や能力を予測する「パーソ

ナルゲノム」時代が近づいてきている現在、個人の自由と平等をどのように考えたらよいか、という観点から議論した。

北山先生の講義では、遺伝子の発現に関わる生理的なメカニズムに、さまざまな社会的、環境的な要因が関与している可能性を示す最新の研究を紹介し、ゲノムと文化との相互作用に関する研究の将来像をめぐって、議論した。

■受講生の感想から(抜粋)

- ・学部生の私にとって、正直ついでいくのが精いっぱいレベルでしたが、難し過ぎるというわけではなく、頭をフル回転させて眺める、非常に楽しい時間でした。ふだんの授業ではどうしても受身になりがちですが、今回は活発に議論が行われている中で、自分も「疑問点を洗いだそう」「何かコメントできることはないか」と、積極的に取り組むことができました。(文系学部生)
- ・遺伝子レベルのミクロな機構から、マクロな機構、そして人の観念や信念といった、人々の頭の中で創出される世界(認知的世界)との間の相互関係を、異なる専門分野の視点から批判的に厳しく議論を戦わせることによって、より理論を精緻化するとともに、新しい考え方や発想が生まれてゆく過程に参加することができ、「このように研究



が生まれてゆくのか」ということを実感できました。(文系大学院生)

- ・私が理解しようとしている間にぼんぼん話が進んでしまい、追いつけず何だか悔しかったです。私は話を聞いてその内容に対して全部「ああ、なるほど」と思うばかりだったので、まわりの先輩方が内容に関して質問をしたり、つつこみを入れたりするのを見て、私にはそのような着眼点がなかったな、など気づかされることがいろいろありました。またこのような機会に参加させていただくことがあれば、ディスカッションに参加してリベンジしたいと思います。(理系学部生)

- ・社会科学と自然科学との融合がますます進んでいくような印象を受けた。遺伝子、脳の研究があと数十年は続いていくように思った。より自然科学的な従属変数を扱うには、理論と、結果の妥当な解釈とを整合させることが大事だと思った。研究の楽しさというか、先生がたのモチベーションに触れられたように感じた。(文系大学院生)



研究プロジェクト

東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■研究の概要

2011年3月11日、東日本大震災という未曾有の災害が発生した。地震・津波・原子力発電所の事故という3つの要素による複合的かつ甚大な影響をもたらす災害を経験したことで、日本における幸福感のあり方、社会関係のあり方は、被災地ではもちろんのこと、その他の地域においても変化した。

本研究プロジェクトでは、東日本大震災関連プロジェクトとして、宗教学・民俗学のアプローチから「こころの再生に向けて」の取り組みを行った。具体的には、「震災後の宗教の動向と世直しの思想と実践の研究」を研究題目とし、鈴木岩弓東北大学教授が事務局の「心の相談室」、島菌進東京大学教授が代表の「宗教者災害支援連絡会」、稲場圭信大阪大学准教授が共同代表の「宗教者災害支援ネットワーク」などとの連携を保ちながら、①伝統文化の心と体のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア、②伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒し空間を活用した復興と再生、③脱原発社会の社会デザイン・世直しのありようを模索した。その際、①宗教的「世直し」思想と実践事例の解明とともに、②21世紀文明のありかた、③その中での日本文明の位置とありかた、④そこにおける伝統文化（祭り、芸能、芸道、宗教など）の継承と活かし方、⑤自然と人間と文明との関係の中での「生態智」の再発見・再評価と再構築、⑥聖地などの安らぎや浄化をもたらす「癒し空間」の活かし方、などに焦点を当てつつ考察した。

■研究計画

(A) 「心の相談室」「宗教者災害支援連絡会」「宗教者災害支援ネットワーク」などの活動の追跡と連携：東日本大震災後の宗教者の災害支援活動について

追跡調査し、整理する。

(B) 伝統文化の心と体のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア：伝統文化の精神・身体技法の活用法を調査・整理し、必要に応じてネットワーク化する。

(C) 伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒し空間を活用した復興と再生：聖地文化を含む伝統文化や民俗芸能・芸術が被災地の復興にどのように関与するかを調査すると同時に、支援のあり方を実践的に探る。

(D) 世直し思想と実践の解明：宗教的世直し思想と実践の歴史的事例の検証とその現在形を探る。

■活動報告

(1) 2011年5月2日～5月5日、東日本大震災の被災地を巡って：こころの未来研究センターのウェブサイトにて報告文掲載。また鎌田東二『現代神道論——霊性と生態智の探究』（春秋社、2011年11月刊）第4章に収録。

(2) 2011年6月18日、東日本大復興祈願並び犠牲者慰霊大探燈祭（福島県相馬市）：こころの未来研究センターのウェブサイトにて報告文掲載。また鎌田東二『現代神道論』第4章に収録。

(3) 2011年6月19日、宗教者災害支援連絡会・第3回情報交換会（東京大学仏教青年会）：今起きている問題の1つに被災地格差や避難所格差などの問題がある。福島県と、宮城県・岩手県・青森県の被災地とでは大きく事情が異なる。同じ福島県でも避難地区と警戒地区とそれ以外の地域では事情も思いも異なる。原子力発電所の事故を抱えた福島県の問題は複雑で、微妙で、深刻である。宮城県や岩手県や青森県は、100日が過ぎて、遅れているとはいえ復旧・復興への青写真と作業が進みつつある。だが、福島県ではそのような復旧・復興デザインが描けな

い。また、「風評被害」と呼ばれる問題も含め、情報の伝達や判断の困難さが行動を逡巡させ、生活全般を息苦しく、重苦しくしている。

「宗教者」とは何か、「宗教者」ができることは何か、必要とされていることは何か、具体的な個々の活動報告を検討しつつ問題点を整理し、宗教が持っている安らぎや救いや癒しや覚悟のはたらきをどのようなかたちで発揮していくのか、個々の社会実践とともに、幅広い考察や探究が必要でもある。そうした考察や探究に、本研究プロジェクトやモノ学・感覚価値研究会が関与し寄与できるところがあるはずだ。

(4) 2011年7月20日、「京都大学シンポジウムシリーズⅣ：宗教と災害～東日本大震災の現場からの報告と討議」を開催。第1部 コーディネーター・司会：鎌田東二による趣旨説明、基調報告：島菌進教授『「宗教者災害支援連絡会・情報交換会」の活動と課題』、玄侑宗久福島県三春僧侶（作家）「福島県での被災状況と被災地支援の現状および復興構想会議の問題点」、事例報告：稲場圭信准教授『「宗教者災害救援ネットワーク」の活動と課題』、金子昭天理大学教授「新宗教の災害支援活動の事例と課題」。第2部 指定討論：河合俊雄こころの未来研究センター教授、内田由紀子同准教授。

(5) 2011年10月10日～13日、11月6日、東日本大震災被災地追跡調査：こころの未来研究センターウェブサイトにて報告文掲載。

(6) 2011年9月6日・9月12日、天河大辨財天社被災状況報告、2011年11月1日～11月2日、天河大辨財天社被災状況追跡報告：「モノ学・感覚価値研究会」ウェブサイトにて報告文掲載。

東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～

内田由紀子（こころの未来研究センター准教授）

■研究目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、さまざまな面においてかつて経験されたことのない被害を生みだした。地震・津波・原子力発電所の事故という複合的要素がもたらす甚大な災害を経験したことにより、日本社会全体として価値観の変化が経験され、大きな岐路に立たされた（内田・高橋・川原、2011）。

地震の規模の大きさ、さらには目に見えない放射能の広がり指摘されるなか、被災地や原子力発電所の事故に関する情報伝達に関して、人々の判断に及ぼしたメディアの役割は大きい。

そこで本研究では、まず第1に、日本における震災報道についてのテレビ、新聞の内容分析を行った。どのようなことが、どのような形で伝えられたのかを知ることは重要である。とりわけ、オリンピック報道を分析した先行研究では日本の報道の特徴としてバランス志向性が見られ、基本的にはポジティブな内容が多いオリンピック選手報道についても、「怪我」や「メンタル面での不安」などのよりネガティブな内容も伝えられる傾向があることが示されているが（Markus, Uchida, Omoregie, Townsend, & Kitayama, 2006）、①このようなバランス志向性が災害というネガティブな事態においても見られるのかどうかを検討することを主軸として検討した。また、特にテレビにおいては、②被災者やキャスターのコメントを事実報道の後に付加することにより、客観的情報に関する色づけがなされる傾向にあることについても検討した。さらには、③震災後の時期によっても報道の内容が変わっていくことが想定されるので、時系列での変化も検討した。

第2に、本研究では、報道関係者へのアンケート調査を実施した。報道は

とりもなおさず個々の記者の取材が素材となっている。とすれば、個人がどのような意図、思いを持って報道に携わっていたのかを知ることは重要である。日本のメディア全体が共有したこの未曾有の事態に対する認識を理解し、報道の送り手・受け手双方にとって今後活かせるような知見を得ることを目的として実施した。

■研究内容とその成果

1) テレビと新聞報道についての分析を行った。分析時期はフェーズ1が震災直後（3月12日-3月31日）、フェーズ2は新学期から1カ月後までの期間（4月1日-4月11日）、フェーズ3は3カ月後に至るまでの期間（5月15日-6月15日）、フェーズ4は半年後を含む期間（8月30日-9月30日）とした。それぞれの期間のうち月・水・金の報道を抽出し、報道されたセンテンスの一つ一つを分析した。結果、テレビ報道については、事実報道は全体の51.1%含まれており、うちネガティブな情報は半分程度となっていた。新聞報道ではニュートラルな事実に関する文章が全体の42.6%、ネガティブな事実の報道は26.9%であった。これだけの災害時であってもニュートラルな情報も多く含まれていたことが明らかになった。

また、テレビのほうがより事実とそれに対する反応が組み合わせられて伝えられており、それによる受け手の事実誤認などの認知バイアスが生じやすい可能性もある。フェーズ分析からは、時間が経つにつれて事実のネガティブ報道は減少したこと、原発報道も減少したこと、逆に被災地の報道にシフトしていったことが明らかにされた。また、震災後1カ月には涙を誘うようなエピソードが放映される傾向も見られた。

2) さまざまな機関に所属する報道関係者に調査を行った。回答者数は、全体で115名（男性55名、女性13名、無回答47名）。年代は20代から60代までであった。調査は（1）原発報道の取材経験に関する設問、（2）その他一般の震災関連報道の取材経験に関する設問、（3）災害報道等一般的質問、（4）自由記述、からなっていた。その結果、偏らない報道姿勢は回答者の過半数が意識していたが、特に原発事故報道ではその意識が高かった。また、政府や東電といったリスク管理者から得られた情報、たとえば事故対応や避難指示のあり方などについて、多くの報道関係者が批判的視点をもって報道しようとしたことがうかがえる。また、「できあがった報道が事実忠実に忠実であったか」は、原発事故以外の一般震災報道では8割近くが「非常に」あるいは「かなり忠実」と回答していたのに対し、原発事故報道では、5割に留まり、逆に「事実を描ききれないところがあった」という回答が35%に達した。

■今後の検討課題

できあがった報道と、記者の意識との関連を具体的に検討する。また、テレビにおける特徴（事実を伝えた後コメンテーターがコメントする）が視聴者の認知に与える影響を検討する。

研究プロジェクト

近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究

秋丸知貴（美術史家）

■ポール・セザンヌと蒸気鉄道

本研究プロジェクトは、^{イコノロジー}図像解釈学を近代西洋美術に適用し、その本質的特性である抽象化傾向に近代技術的環境における心性の変容の影響を調査することを目的とする。2010年度は、近代技術による心性の変容の近代絵画への反映を総論的に分析した。2011年度は、特に個別研究としてポール・セザンヌ（1839-1906）への蒸気鉄道による視覚の変容の感化の問題を考察した。

■セザンヌが汽車から眺めた車窓風景

まず、フランスで初めて本格的に旅客用の蒸気鉄道が運行されたのは、セザンヌが生まれる2年前の1837年である。1842年には鉄道建設を法的に支援する「鉄道憲章」が制定され、第二帝政期（1852-1870）の間に首都パリと主要地方都市を結ぶほぼすべての幹線路線が整備されている。一方、セザンヌが最初に蒸気鉄道で長距離旅行したのは、22歳で故郷エクスからパリへ初上京した1861年である。それ以来、晩年までセザンヌは頻繁に蒸気鉄道を利用して、エクスとパリはもちろんフランス各地を転住する生活を送っている。したがって、セザンヌは蒸気鉄道による視覚の変容を自明的に感受し、肯定的に享受する最初の世代に属すと推定できる。

事実、セザンヌは1878年4月14日付エミール・ゾラ宛書簡で、疾走する汽車から眺めた車窓風景を次のように賛美している。「蒸気鉄道（le chemin de fer）でアレクシオン邸の傍を通過する時、東の方角に目の眩むようなモチーフが展開する。サント・ヴィクトワール山と、ポールクイユに聳える岩山だ。僕は、『何と美しいモチーフだろう（quel beau motif）』と言った」。

ここでセザンヌが賞賛しているのは、

エクス＝マルセイユ鉄道路線のアルク渓谷に架橋された鉄道橋を通過する時の車窓風景である。この手紙が書かれたのは、このエクス＝マルセイユ鉄道路線の開通（1877年10月15日）のわずか半年後である。また、セザンヌがモチーフとしてのサント・ヴィクトワール山に言及したのは実に40歳を目前にしたこの手紙が最初であり、この山を中心画題とする連作もこの手紙が書かれた1878年以後に開始されている。そして、セザンヌはこの連作にそのアルク渓谷の鉄道橋と汽車を描き込んでいる。つまり、セザンヌのサント・ヴィクトワール山連作は、このアルク渓谷の鉄道橋通過時の鉄道乗車視覚に触発されて開始された可能性が非常に高い（筆者が撮影した現場動画を参照。<http://www.youtube.com/watch?v=BAAAUOoEKPI>）。

■蒸気鉄道による視覚の変容

実際に、セザンヌの造形表現における10の様式的特徴は、蒸気鉄道による視覚の変容の様式的特徴と詳細に類似している。まず、「視点の複数化」と「対象の歪曲化」は、走行車内における視点の移動と、それによる視界の不明瞭化に呼応している。また、「構図の集中化」と「筆致の近粗化」は、汽車の車窓では遠景の対象ほど視野中央に長く留まり、近景の対象ほど視野外に素早く飛び去ることに対応している。さらに、「運筆の水平化」は、平行に逆走する車外風景や、横ぶれる車内状景における対象の残像現象に相応している。また、「前景の消失化」と「画像の平面化」は、乗客の風景からの視覚的疎外化に照応している。さらに、「形態の抽象化」と「色彩の純粋化」は、車輪線路と蒸気機関の抽象運動による視覚の単純化に一致している。そして、「共感の希薄化」は、鉄道旅行における

傍観者的感受性の胚胎と合致している。

これに関連して、ヴォルフガング・シヴェルプシュは『鉄道旅行の歴史』（1977年）で、鉄道乗車視覚と印象派的造形表現の類似性を主張している。現実には、セザンヌと交流のあった印象派のエドガー・ドガ（1834-1917）は、1892年に鉄道乗車視覚の影響を公言する風景画連作を制作している。「（その21枚の風景画は）今年の夏の旅行の成果です。私は列車の扉口に立ち、不明瞭に眺めていました。それが、私に風景画を描く着想を与えたのです」。

これらのことから、セザンヌやドガの絵画作品を、人類史的な近代技術による視覚の変容の美的・文化的・歴史的証言記録として再評価できる。なおこの場合、鉄道乗車中の車窓風景をそのまま描写するよりも、降車後の風景に蒸気鉄道による視覚の変容を適用して描出する方が、近代的視覚の内面化とその創造的昇華において芸術的重要性を持つと指摘できる。

■研究の成果

本研究プロジェクトは、2010年から2012年にかけて口頭発表を14件（学会12件、研究会2件）、論文発表を学会誌等で14件（査読有り10件、査読無し4件）行った。また、2011年度形の科学会奨励賞を受賞した。そして、研究成果の一部である『ポール・セザンヌと蒸気鉄道——近代技術による視覚の変容』により、京都造形芸術大学大学院より2011年度博士学位（学術）を授与された。

モノと感覚移入・感情移入に関する基盤研究

大西宏志 (京都造形芸術大学准教授)

2011年度にはシンポジウム、展覧会の開催、研究報告誌の出版、ポスター発表などを行った。

■シンポジウム

2011年11月12日、遊狐草舎(京都市北区)にて、「触れることで情報を接地する試み」をテーマとしてシンポジウムを開催した。講演者は渡邊淳司共同研究員(NTTコミュニケーション科学基礎研究所)、松井茂東京芸術大学特任講師。

作家が素材や制作物に感覚・感情を移入する制作過程における、物と感覚・感情移入の関係を、デジタルアプリケーション技術の事例研究を通じて検証した。3次元プリンタによってもたらされるものは、素材や形状との連続的な出会いであるモノづくりの過程ではなく、記号(設計図)と物質(制作物)の関係づけの変容と考えられる。また、鑑賞者がどのように作品に対して感覚・感情を読み取るのか、演出としての物と感覚・感情移入の関係を、ワークショップの事例報告(心臓ピクニック:聴診器を自身の胸に当てて鼓動を計測し、それを心臓ボックスから音と振動として出力。そうすることで、参加者は自身の鼓動を音として聞くだけでなく振動として触れることを体験する)を通じて検証した。

■出版

2012年3月刊行の『モノ学・感覚価値研究』第6号(京都大学こころの未来研究センター、モノ学・感覚価値研究会)に、上記のシンポジウムの内容を掲載した。

■展覧会

2011年11月11日~13日、遊狐草舎(京都市北区)で展覧会「物気色11・11」を開催した。

全体のテーマは「モダンの死角、モノケハイをアートに依せて」で、出品作家は大西宏志、大船真言、狩野智宏、上林壮一郎、近藤高弘、スティーヴン・ギル、坪文子、山田晶、山本健史。

展覧会開催中にシンポジウムも行った。その講演者は鎌田東二、山本豊津(東京画廊)、原田憲一(元京都造形芸術大学教授)、稲賀繁美(国際日本文化研究センター教授)、小崎哲哉(美術ジャーナリスト)の各氏。

「物気色11・11」はモノ学・感覚価値研究会アート分科会が一貫して行ってきた、ものと美術の関係を探る研究会

的な展覧会である。人間は、日常、非日常を問わず物を作りだし、物に囲まれながら生きている。特に私たち日本人は「心を込めた物作り」や「物から心の動きを読み取る」と言うように、物に物質以上のニュアンスを見出し、心との強い関係性を感じる事ができる。このことを表現実践とシンポジウムによって検証した。

■ポスター発表

こころの未来研究センター研究報告会2011「こころを知り未来を考える〜絆がつくるこころ〜」にてポスター展示を行った。

京都大学こころの未来研究センター 平成23年度一般公募型連携研究プロジェクト

モノと感覚移入・感情移入に関する基礎研究

人間は、日常、非日常を問わず物を作りだし、物に囲まれながら生きている。特に私たち日本人は「心を込めた物作り」や「物から心の動きを読み取る」と言うように、物に物質以上のニュアンスを見出し、心との強い関係性を感じる事ができる。そこで、本研究プロジェクトでは、研究対象として、物を媒介とした感覚や感情の移入メカニズムを取り上げる。特に、芸術、デザイン活動の分野における、

(1) 作家が素材や制作物に感覚・感情を移入する制作過程における 物と感覚・感情移入の関係性
 (2) 鑑賞者がどのように作品に対して感覚・感情を読み取るのか、演出としての物と感覚・感情移入の関係性
 の二つの視点から研究を行う。

| | | |
|-------|------|---------------------|
| 研究員 | 大西宏志 | 京都造形芸術大学 |
| 共同研究員 | 渡邊淳司 | NTTコミュニケーション科学基礎研究所 |
| 共同研究員 | 松井茂 | 東京芸術大学 |
| 共同研究員 | 鎌田東二 | 東京画廊 |
| 共同研究員 | 山本豊津 | 東京画廊 |
| 共同研究員 | 原田憲一 | 元京都造形芸術大学 |
| 共同研究員 | 稲賀繁美 | 国際日本文化研究センター |
| 共同研究員 | 小崎哲哉 | 美術ジャーナリスト |

2011年11月12日(土)モノ学・感覚価値研究会アート分科会 連携企画 「触れることで情報を接地する試み」 渡邊淳司+松井茂

メディア技術とモノづくり、記号接地

記号として物質の低い情報としても対象との感覚を規定する実在認識としては個体によってその情報を意味づけることはできない

実在認識過程

記号認識過程

「デジタルアプリケーション」

ワークショップ「心臓ピクニック」

研究プロジェクト

察するコミュニケーションと表すコミュニケーション

宮本百合 (ウィスコンシン大学准教授)

■本研究の目的

コミュニケーションを行う際、人は言葉だけでなく、表情・身振り・状況などの手がかりも用いてお互いの感情や意図を伝えあい、理解しあっている。このようなコミュニケーションは、非言語的コミュニケーションと呼ばれている。低コンテクスト文化である欧米では、直接的で明確な言葉を用いた言語的コミュニケーションが多いのに対して、高コンテクスト文化である東洋では、間接的で周辺的情報などの手がかりを用いた非言語的コミュニケーションが多いことが、文化人類学者のHallらによって示唆されてきた。とはいえ、欧米においても、表情などの非言語的な手がかりは、言葉の内容以上に重要であることが指摘されている。

この一見矛盾する知見を理解するために、ウィスコンシン大学大学院生アマング・エゲンと心の未来研究センター内田由紀子准教授と私は、非言語的コミュニケーションの目的の違いに注目して研究を行っている。自己を表現することが重視されている欧米では、自らの意図や感情を他者に対して明確に「表す」ことが非言語的コミュニケーションの主な目的であると考えられる。一方、相手や周りに自分を合わせることが重視される日本では、他者の意図や気持ちを「察する」ことが非言語的コミュニケーションの主な目的であると考えられる。だとすると、非言語的コミュニケーションの性質は文化によって異なっている可能性がある。自らの意図や感情を表すことが主な目的である欧米では、送り手が自らの意図や感情を比較的直接的に表現できる身体的な手がかりが用いられがちなのに対して、他者の微妙な意図や感情を察することが主な目的である東洋では、場の雰囲気などの、間接的で文脈的な手がかりが用いられがちであると

表1 非言語的コミュニケーションの媒体

| 身体的媒体 | 文脈的媒体 | その他 |
|------------------------------|------------------------|-------------|
| 表情(笑顔、しかめっつらなど) | 状況(天気、場の雰囲気など) | 言い方(語調、間など) |
| 振る舞い、ボディランゲージ(鼻歌、うつむく、ため息など) | その状況にいたらたいの人がどのように感じるか | 間接的な言葉 |
| | 実際に経験している状況を見て | |

いう仮説を立て、それを検証するために日米で調査を行ってきた。

■これまでの活動

ウィスコンシン大学のアメリカ人学生と、京都大学の日本人学生を対象とした比較調査を行った。まず参加者に、自らが実際に経験した非言語的コミュニケーション場面を想起し詳しく記述してもらい、その後、様々な非言語的コミュニケーション媒体(表1参照)をどの程度用いたかを評定してもらった。図1からわかるように、アメリカでは送り手が自らの感情・意図を表現できる身体的媒体が他の媒体より多く用いられているのに対して、日本では身体的媒体も用いられていたものの、場の雰囲気などの文脈的な媒体がアメリカよりも多く用いられていた。

このような結果は、非言語的コミュニケーションの媒体に文化差があることを示しているが、伝達される内容にも文化差はあるのだろうか。その点を調べるために、参加者に記述してもらった場面の内容を分析した。その結果、アメリカでは約90%、日本では約50%の非言語的コミュニケーションにおいて、好意・怒り・悲しみなどの明確な感情が伝達されていたのに対して、日本の約40%、アメリカの約10%の非言語的コミュニケーションが、「時間がないので急いでいる」といった、送り手の必要性が伝達された場面であった。

■まとめ

これらの結果から、アメリカでは、送り手が自らの感情を積極的に表現す

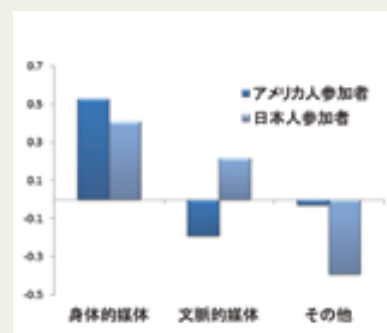


図1 非言語的な媒体が用いられる相対的程度

るために、身体的媒体を用いた非言語的コミュニケーションが多く使われているのに対して、日本では、送り手の必要性を察するために、場の雰囲気などの文脈的媒体を用いた非言語的コミュニケーションが多く使われていると言える。つまり、非言語的コミュニケーションは日米のどちらにおいても重要であるものの、その目的や用いられる非言語的な手がかりには、文化間で差があることが示された。

従来、非言語的コミュニケーションは、欧米よりも東洋において多く用いられていると示唆されてきたが、本研究の結果に基づけば、非言語的コミュニケーションのどの側面に注目するかによって、欧米の方が東洋人よりも非言語的コミュニケーションを多く用いる場合もあることが示唆される。

今後は、本研究をさらに進めて、文化間で性質の異なる非言語的コミュニケーションに参加することで、異なる心的傾向が促進されるようになるかどうかを検証する予定である。

こころの研究ニュースの発信：こころ学ブログ

平石 界 (安田女子大学心理学部講師)

■プロジェクトの目的

心理学と、心理学に関連するさまざまな研究を、大学1、2年生や高校生など、これから大学で学んでいこうとする人たちに紹介したい。研究の結果をただセンセーショナルに伝えるのではなく、結論に至るまでの研究者の苦労、葛藤、遊び心、良い結果が出たときの喜びまでを、堅苦しくも見えない“学術論文”の行間から読み解いてみたい。そうして、いわゆる“心理テスト”でイメージされる“心理学”とは異なった世界が存在することを伝えたい。そのような気持ちをもって「こころ学～こころについて語るときに、我々の語ること」というブログを書いてきた。本報告では平成20年11月ブログ開設から平成24年3月末のプロジェクト終了までの活動を総括したい。

■ブログへのアクセス解析から

平成21年3月5日よりGoogle Analyticsを設置し、ブログへのアクセスデータを収集してきた。プロジェクト終了までの総訪問数は25,054であるが、この中にはIPアドレスなどから同一人物による複数回の訪問と推測されるものが含まれる。そこで同一人物をGoogle Analyticsのアルゴリズムにより推定すると、ユーザの数は15,042人であったと考えられる（同一人物が職場と自宅などで異なるデバイスやIPからアクセスすると別人扱いになるので、これは高めの推定値である）。1回の訪問で複数のページを閲覧することがあるので、これらを別々にカウントしたページビュー数となると39,856になる。

約4万のページビューすべてで、記事が読まれていたかということ、残念ながらそうは言えない。各ページの平均滞在時間は1分7秒となっており、全ページビューの約5割になる20,994ペ

ージビューが0-10秒の滞在となっていた。記事に目を通したと考えられる180秒(3分)以上滞在した数は11,556ページビュー(全体の29.9%)であった。

ブログへのアクセス元は国内では北海道(訪問数822)から沖縄(82)まで広がっていたが、中心になったのは東京(7,263)、神奈川(1,471)、大阪(2,414)、京都(2,653)、福岡(2,183)など大都市圏であった。また沖縄からの訪問では滞在時間は平均27秒であり、検索エンジンなどからの一時的な訪問であったと推測される。

以上をまとめれば、3年間で、ブログ開設した当初に期待したほどのアクセスを得ることはできなかったと認めざるを得ない。次節では、その原因について検討したい。

■アクセス数が伸びなかった理由

もっとも大きな原因はブログの更新頻度が低かったことであろう。年間で10本程度、月1本に満たない記事の投稿ペースでは遅かったことは否めない。メンバー3名ともが、研究者として業績を積み上げることが必要な立場であり、そのことが本ブログのような(いわば、アカデミックな業績としての価値は無に等しい)活動の足を引っ張った面は否めない。何よりも、それを踏まえた上でプロジェクトに取り組む覚悟が、プロジェクト代表者に欠けていた。

他の原因として、一つ一つの記事が比較的長く、また噛み砕いたつもりであっても、まだまだ表現が難解であったのかもしれない。しかし、それぞれの研究の目立つところだけを表層的に取り出して面白おかしく伝えることは、本ブログの目指すところではなかった。そのため、記事がある程度の長さになってしまったこと、上から下に目

を動かすだけで理解するには難しいものになってしまったことには、止むを得なかった面もあると考える。

記事内容の難しさについてより気がかりなのは、少なからぬ同業者の方から、ブログへの好評をいただいたことである。初対面の方からの言葉もあったことを考えると、お世辞だけとは考えにくく、だとすると心理学者たちにとって「分かりやすい、面白い」説明が、一般の読者にとってのそれと乖離しているのかもしれない。もちろん、わざわざ声をかけて悪評をいう人はほとんど居ないので、サンプリングに偏りがある可能性は高い。前者であれば心理学全体の問題であり、後者であれば本プロジェクトメンバーの問題である。

いずれにせよ、学部生向けの講義、一般読者向けの文章執筆などにおいて、表現をより磨く必要があることを実感させられた。

最後になるが、本ブログではすべての記事について、山本真也さん(ONDO creative)に素敵なイラストを描いていただいた。毎回、記事の原稿を読んだ上で楽しいイラストを用意して下さった氏に感謝したい。また折りにふれ記事へのコメントをくださった方々、その他の読者の方々にも感謝する。

ブログの記事については今後、iBooksやEPUBなどの電子書籍フォーマットの形で配布していきたいと考えている。

こころの未来研究センター滞在記

レベッカ・マッケンジー (イギリス・プリマス大学講師)
Rebecca MCKENZIE

京都大学こころの未来研究センターで過ごした4カ月間は本当にかげえのないものだった。

私がセンターの内田由紀子准教授と共同研究を始めることになったきっかけは、2011年に京都で開催された感情に関する国際学会であった。数日間の京都滞在の素晴らしさもさることながら、学会も学際的で示唆に富んだものだった。とりわけ内田准教授による文化と感情、そして日本文化の対人関係についての基調講演は刺激的で、私にさまざまな新しいアイデアをもたらしてくれた。かつて社会人類学を専攻していた私は、比較文化の問題に長く関心を持っていたこともあり、講演終了後、すぐに彼女に共同研究ができないかともちかけた。イギリスに帰国してから、彼女の協力を得て日本学術振興会の外国人特別研究員に応募、幸運にもパスして日本での4カ月間の滞在が実現する運びになった。

京都ではセンターの学際的アプローチに非常に感銘を受けた。学際的研究は実りが多いものの、通常は別々の学部からいろいろな人を引っ張ってきてチームを作らなければ実現しない、困難なものであることをよく知っていたからである。

センターでの研究、教育、学び

京都大学は外国人研究者にとって非常に滞在しやすい環境にある。私たちの研究プロジェクトは自閉症スペクトラムの診断と介入、そして支

援サービスにおける保護者と療育者のパートナーシップについての日英比較研究である。日本に行く前、私は本当にこうしたプロジェクトを実施できるのかを懸念していた。なぜならば私は日本の自閉症支援について知識が

なかったし、日本語を話すこともできないからだ。しかしセンターの支援と京大内の共同研究者を得ることにより、予想していた以上のことを実施することができた。センターのメンバーが質問紙調査やシナリオ課題、そして行動実験の翻訳を含めた作成をともに行ってくれ、さらにはデータ収集や分析についても手助けをしてくれた。また、他の研究者との橋渡しの支援も行ってくれたおかげで、彼らとの研究相談をスムーズに行うことができた。センターのメンバーを含め、発達心理学者や臨床心理学者、精神科医の前で研究計画を発表する機会を設けてもらうこともできた。そのおかげで教育学研究科や霊長類研究所、京大病院の研究者たちとの非常に有益なネットワークをつくることができた。結果的に効果的な研究チームをつくることができ、その中で私が受けたアドバイスやサポート、研究のアイデアのすべてに感謝している。また、他大学や自閉症を支援する学校などを訪れることもかない、日本における教育システムと自閉症



研究発表の様子

児への支援サービスなどを知る重要な機会を得た。

京大では学生と教員両方の気分を味わうことができた。いくつかのセミナーで自閉症研究に携わる研究者とディスカッションを行い、ワークショップや授業にも出かけていった。そして内田准教授が教育学研究科で開講していたアカデミック・イングリッシュ演習の授業にも出席した。私がネイティブの英語話者として学生たちの役に立つことが嬉しかった。このクラスは非常にオープンで打ち解けた雰囲気であり、内田准教授と学生たちとともに過ごしたことはとても良い思い出になっている。日本の学生がどのような授業を受けているのかを知ることは良い機会であったし、そこで知り合った学生の紹介で、自閉症の家族を支援するボランティアグループに参加することもできた。

神戸大学や東京の武蔵野東学園、京都の幼稚園や児童支援センターの訪問は、私を助けてくれる人たちがいなかったら実現しなかった。センター

の一員でいられたことを心から誇りに思うと同時に、これからも連携していきたいと考えている。日本の文化や研究環境を学ぶことができただけでなく、学際的アプローチのすばらしさを学ぶことができたと思う。

サポート体制

多くの人から仕事上だけでなく日常的なサポートを受けたが、その質のすばらしさに感銘を受けた。日本に到着する前からリエゾンオフィスのスタッフが多くの支援を行ってくれて、日本への渡航や住居に関することをアレンジしてくれた上、到着後は自転車を借りることができ、買い物をする場所なども教えてもらった。少女時代からまったく自転車に乗ることがなかった私にとって、こうした一つひとつのことが冒険であった。リエゾンオフィスのスタッフは私の生活をスムーズにしてくれる「ライフライン」であり、今ではとても良い友人たちだ。彼女たちの親切を決して忘れない。

センターや他の研究科の研究者たちも多くの面で非常にサポートティブであった。内田准教授をはじめセンターのスタッフは研究熱心で、彼らとともに働き、彼らの友人であることが私の喜びであった。指標をつくり、翻訳をし、実験協力者を探し、データを集める、そのすべての過程

を皆が支援してくれた。オフィスをシェアしていた研究者たちもとてもフレンドリーに私を迎え入れてくれた。共同研究の機会を与え、すばらしい経験をさせてくれた内田准教授に非常に感謝しており、これからも彼女との共同研究を続けていきたいと願っている。京都を去るまで、多くの友人を得ることができるなど、研究生活だけではなく日常生活も含めてとてもすばらしいもので、私はまったく孤独や心配を感じることはなかった。

京都での生活

リエゾンオフィスの勧めで、京都滞在中には京大にほど近い「国際学生の家」で過ごすことになった。ここでの生活はとてもおもしろいもので、イベントなども頻繁に企画されており、それらを通じて私はさまざまな国からやってきた学生や研究者と友人になることができた。さらに、センターで知り合った友人やその家族との楽しい思い出もつくることができた。一緒にお寺を巡ったり、お祭りに行ったり、美味しいものを食べに行ったりした。

京都を語るなら神社仏閣のことは外せない。宗教を持たない私にとっても、多くの神社仏閣を訪れることはスピリチュアルな経験であった。週末はよく寺社にでかけ、庭をじっ



リエゾンスタッフのメンバーとともに、賀茂川にて(右端は娘)

くり眺めたりした。京都の寺社は混雑している一方で非常に静かで落ち着いた空間であり、美しい瞬間が数多くある。滞在中いくつもの寺社を訪れたが、それでも回りきれなかった。京都は訪問するに値する街だ。

日本の他の地域を訪れることもできた。大原、奈良、大阪、城崎温泉、竹野、そして東京。私の家族も1カ月間日本にやってくることができ、ともに旅行し、日本の景色を楽しむことができた。気候だけでなく、文化や料理など、日本での生活はイギリスとは多くの面で違っている。私の家族は京都での快適な暮らしを存分に満喫したので、今でもそれらを恋しく思う。心打たれるほどの研究環境、友人とのランチ、神社仏閣、オレンジの自転車、市場のそぞろ歩き。そして友人たち。願わくば京都をもう一度訪れ、センターの同僚たちと、再びともに仕事がしたい。

(翻訳: 内田由紀子)



こころの未来研究センターのスタッフや学生たちと

2012年度仕事一覧

吉川左紀子

論文

船曳康子, 廣瀬公人, 川岸久也, 大下颯, 田村綾菜, 福島美和, 小川詩乃, 伊藤祐康, 吉川左紀子, 村井俊哉「発達障害者の特性理解用リーダーチャート (MSPA) の作成, 及び信頼性の検討」『児童青年精神医学とその近接領域』2012, 54 (1), 14-26.

大藪博記, 渡部幹, 吉川左紀子「言語・表情シグナルに対する罰行使行動の検討」『社会心理学研究』2012, 28 (2), 77-86.

Sato, W. and Yoshikawa, S., "Recognition Memory for Faces and Scenes," *The Journal of General Psychology*, 2012, 140 (1), 1-15.

Ozono, H., Watabe, M., & Yoshikawa, S., "Effects of facial expression and gaze direction on approach-avoidance behavior," *Cognition and Emotion*, 2012, 26 (5), 943-949.

学会発表, ワークショップ等

布井雅人, 吉川左紀子「選好形成に他者が及ぼす影響——視線・表情・魅力度に関する検討」日本認知心理学会第10回大会 (岡山大学, 岡山市) 2012.6.2.

小川時洋, 布井雅人, 吉川左紀子「視線手がかりによる顔への印象形成過程の検討」日本認知心理学会第10回大会 (同上).

中嶋智史, 森本裕子, 吉川左紀子「未知顔の記憶における表情と人種の相互作用効果」日本認知心理学会第10回大会 (同上).

嶺本和沙, 吉川左紀子「表情の順応効果に及ぼす表出強度の影響」日本認知心理学会第10回大会 (岡山大学, 岡山市) 2012.6.3.

野口素子, 吉川左紀子「表情表出による情動調整が会話に対する印象に及ぼす影響」日本心理学会第76回大会 (専修大学, 川崎市) 2012.9.12.

布井雅人, 中嶋智史, 吉川左紀子「表情認知における社会的排斥の効果——排斥されると悲しみが嫌になる」日本心理学会第76回大会 (専修大学, 川崎市) 2012.9.13.

小川詩乃, 井田美沙子, 田村綾菜, 伊藤祐康, 吉川左紀子「広汎性発達障害児における物語理解の困難をもたらす要因の検討」第53回日本児童青年精神医学会総会 (シェーンバハ・サボー [砂防会館], 東京都) 2012.11.1.

Nakashima, S. F., Morimoto, Y., & Yoshikawa, S. "Interactive effects of darkness and anxiety on memory for unfamiliar faces." 10th Tsukuba International Conference on Memory, Tokyo, Japan. 2012.3.5.

Ueda, Y., and Yoshikawa, S. "Task-Irrelevant Happy Faces Facilitate Visual Search Performance." *Vision Sciences Society 12th Annual Meeting*, Naples, Florida. 2012.5.11.

Yonemura, K., Morisaki, A., Ariga, A., Watanabe, K., & Yoshikawa, S. "Interaction between viewing angle and presentation height in perception of Buddha statues." *International Conference on Kansei Engineering and Emotion Research*. Penghu, Taiwan. 2012.5.25.

Yoshikawa, S., & Ueda, Y. "Smile Wins : Perceived Dominance of Facial Expression in Face-to-Face Confrontation Scene." *Association for psychological science 24th Annual Convention*. Illinois, Chicago. 2012.5.25.

Nunoi, M., Ishida, A., Ueda, Y., & Yoshikawa, S. "Face-to-face situation enhances positive facial expression rather than videophone situation." *Association for psychological science 24th Annual Convention*. Illinois, Chicago. 2012.5.26.

Yoshikawa, S., & Ueda, Y. "Perceived Dominance of Facial Expression in Face-to-Face Scenes." 43rd NIPS International Symposium "Face Perception and Recognition." Okazaki, Japan. 2012.11.1.

Ueda, Y., and Yoshikawa, S. "Task-Irrelevant Happy Faces Facilitate Visual

Search Performance." 43rd NIPS International Symposium "Face Perception and Recognition." Okazaki, Japan. 2012.11.1.

講演

吉川左紀子「心理学から考える『ブータンの幸福』」ゴールデン・エイジ・アカデミー (京都アスニー, 京都市) 2012.8.3.

吉川左紀子「共感の認知科学」大阪京大クラブ (大阪中央電気倶楽部, 大阪市) 2012.9.10.

吉川左紀子「科学技術：心・文化の視点から価値を見直す」科学技術・学術審議会基本計画推進委員会 (第7回) (文部科学省, 東京都) 2012.11.30.

吉川左紀子「感情理解と共感的コミュニケーション」第30回日本感覚統合学会研究大会 (京都テルサ, 京都市) 2012.12.9.

吉川左紀子「無意味なものに意味がある：沈黙, 同調とコミュニケーション」第9回クオリアAGORA (京都高度技術研究所, 京都市) 2013.1.31.

吉川左紀子「科学技術と心」富士通総合研究所研究会 (富士通研究所, 川崎市) 2013.3.25.

船橋新太郎

論文

Watanabe, Y. & Funahashi, S., "Thalamic mediodorsal nucleus and working memory." *Neuroscience and Biobehavioral Reviews*, 2012, 36, 134-142.

Tanaka, A. & Funahashi, S., "Macaque monkeys exhibit behavioral signs of metamemory in an oculomotor working memory task." *Behavioural Brain Research*, 2012, 233, 256-270.

小田桐匡, 上田啓太, 村井俊哉, 大東祥孝, 船橋新太郎「系列物品使用障害のメカニズムの探求——注視行動分析による検討から」『神経心理学』2012, 28, 49-65.

竹田里江, 竹田和良, 石合純夫, 池田望, 松山清治, 船橋新太郎「認知症患者に対するコンピュータを用いた認知機能向上訓練の効果——前頭連合野機能を基盤とし個人の能力・興味にテーラーメイド可能な訓練の開発と試行から」『作業療法』2012, 31, 452-462.

竹田里江, 竹田和良, 池田望, 松山清治, 船橋新太郎「作業が持つ意味を前頭連合野における認知と情動の相互作用から考える——神経科学的知見に基づいたこれからの作業療法に向けて」『作業療法』2012, 31, 528-539.

Funahashi, S., "Space representation in the prefrontal cortex." *Progress in Neurobiology*. 2013, 130, 131-155.

Mochizuki, K. & Funahashi, S., "Response inhibition, prefrontal cortex, and their relation to the attention deficit/hyperactivity disorder." In: "Cognitive and Behavioral Phenotypes : New Trends for Research, Classification and diagnosis in Neuropsychology and Psychiatry," S. L. Santangelo and V. Jagarao (eds.), Springer (印刷中).

竹林美佳, 船橋新太郎「フラクタル図形に対するサルの好き嫌い」芋阪直行編『神経美学——美しさと喜びの脳内表現』新曜社 (印刷中).

学会発表

望月圭, 船橋新太郎「眼球運動方向の自由選択における運動と選択の相反する履歴効果」平成24年度生理学研究所研究会「第6回 Motor Control 研究会」(自然科学研究機構岡崎コンファレンスセンター, 岡崎市) 2012.6.21-6.23.

田中暁生, 船橋新太郎「短期記憶におけるサル外側前頭前野の機能的役割に関する新知見」包括型脳科学研究推進支援ネットワーク・夏のワークショップ (仙台国際センター, 仙台市) 2012.7.26.

Nagaoka, C., Hiraoka, N., and Funahashi, S. "The effects of listener's familiarity with a talker's voice on the speech recognition in noisy condition." *COGSCI 2012 (The Annual Meeting of the Cognitive*

Science Society), (札幌市) 2012.8.1-8.4.

中本若奈, 船橋新太郎「サル」の視覚刺激に対する選好性は何で決まるか?」第35回日本神経科学大会(名古屋国際会議場, 名古屋市) 2012.9.19.

高橋裕美, 船橋新太郎「架空の報酬情報が選択行動に与える影響の検討」第35回日本神経科学大会(名古屋国際会議場, 名古屋市) 2012.9.18.

田中暁生, 船橋新太郎「サル前頭前野外側部へのムシモール注入による記憶とメタ記憶への影響」第35回日本神経科学大会(同上).

渡邊慶, 船橋新太郎「二重課題遂行中のサル前頭連合野神経活動」第35回日本神経科学大会(同上).

望月圭, 船橋新太郎「前頭連合野ニューロン活動のゆらぎが記憶誘導性眼球運動における選択に与える影響」第35回日本神経科学大会(同上).

Tanaka, A. and Funahashi, S. "Impaired memory and spared metamemory: effects of muscimol injections into the macaque dorsolateral prefrontal cortex." Annual Meeting of Society for Neuroscience (Neuroscience 2012), (New Orleans, USA) 2012.10.16.

Watanabe, K. and Funahashi, S. "Dual-tasking in monkeys: analyses of behavior and prefrontal neuron activities." Annual Meeting of Society for Neuroscience (Neuroscience 2012), (New Orleans, USA) 2012.10.16.

Takahashi, H. and Funahashi, S. "Behavioral study of fictive outcome in a monkey using a value-based binary choice task." Annual Meeting of Society for Neuroscience (Neuroscience 2012), (New Orleans, USA) 2012.10.17.

Watanabe, Y. and Funahashi, S. "Information transformation of thalamic mediodorsal neurons during spatial working memory performance." 41st Annual Meeting of the International Neuropsychological Society, (Waikola, Hawaii, USA) 2013.2.6-9.

渡辺由美子, 船橋新太郎「視床背内側核における眼球運動関連活動の課題依存的な変化」第90回日本生理学会大会(タワーホール船堀, 東京都) 2013.3.27-29.

講演

船橋新太郎「質感と好み——動物を用いた研究から」科学研究費補助金・新学術研究領域「質感脳情報学」第4回班会議・公開講演会(みやこめっせ, 京都市) 2012.5.29.

船橋新太郎「記憶再生における外側前頭前野の制御機能」第35回日本神経科学大会シンポジウム「サル前頭前野における認知機能研究の展開」(名古屋国際会議場, 名古屋市) 2012.9.18.

船橋新太郎(2012)「自分のところをモニターする仕組みを探る」「ニホンザル」バイオリソースプロジェクト公開シンポジウム「第3期のニホンザル・バイオリソースプロジェクト さらなる発展をめざして」, (UDXカンファレンス, 東京都) 2012.11.9.

Funahashi, S. "Prefrontal cortex and neural mechanism of executive function. 3rd International Symposium on Prefrontal Cortex." (京都大学稲盛財団記念館大会議室, 京都市) 2012.11.29-30.

船橋新太郎「視空間性ワーキングメモリ遂行における前頭連合野——視床背内側核の役割」平成24年度生理学研究所研究会「大脳皮質の作動原理究明をめざして」(自然科学研究機構岡崎コンファレンスセンター, 岡崎市) 2012.12.6-7.

船橋新太郎「ものの好みはなにで決まる?」京都大学こころの未来研究センター研究報告会2012(京都大学稲盛財団記念館中会議室, 京都市) 2012.12.15.

カール・ベッカー

論文

カール・ベッカー「祈りの研究」『Mind-Body Science』2012.4, 22号, 16-20.

カール・ベッカー「死と向き合った時にあらわになる日本人の基礎的宗教観」『緩和ケア』22巻3号, 2012.5, 207-211.

子安増生編, カール・ベッカー他共著「幸福感の国際比較研究」『Japanese Psychological Review』(心理学評論刊行会)55巻1号, 2012, 70-89.

カール・ベッカー「NDE(臨死体験)研究——科学か偽科学か?」中部大学編, 『ARENA 2012 アリーナ』14号, 風媒社, 2012.12, 370-375.

著書

カール・ベッカー「人間社会を持続可能にさせる倫理の役割」稲盛和夫編『如何確定21世紀新倫理現』(中国語訳), 海南出版社, 2012, 97-126, 127-154頁.

Becker, C. "Challenges of Caring for the Aging and Dying." Buddhist Care for the Dying and Bereaved, Jonathan Watts & Yoshiharu Tomatsu, Eds. Somerville, MA: Wisdom Press, 2012.12, 19-36.

カール・ベッカー「日本人の魂はどこへ行くのか」『看取り先生の遺言』奥野修司著編, 文藝春秋, 2013.1, 282-299頁.

新聞・雑誌記事等

カール・ベッカー「負の感情と倫理・生きがい感」『こころの未来』2012.3, 30, 41頁.

カール・ベッカー, NHK「日本人の生と死を考える」NHK教育+ラジオ, 4月29日放送.

カール・ベッカー「お盆は大切な絆造りの行事」『佛教タイムズ』2012年お盆号, 1面.

カール・ベッカー「死別悲嘆に対する日本人の経験智」『日本スピリチュアルケア学会ニューズレター』2012.9, 7号, 9-15頁.

カール・ベッカー「『ビハラの現状とこれから』に関するコメント」『仏教看護・ビハラ』2012.11, 7号, 71-76頁.

カール・ベッカー「日本人の死生観と超越」『仏教文化講演会記録』龍谷大学仏教文化研究所紀要, 2012.12, 50号, 98-122頁.

カール・ベッカー「死の床の医師と宗教学者〜感動の対話」奥野修司編, 『文藝春秋』, 2012.12, 348-357頁.

基調講演

カール・ベッカー「佛教の世界観」人体科学会(京都アスニー, 京都市) 2012.6.2.

カール・ベッカー「婦人会の役割」浄土宗寺庭婦人会(リーガロイヤル, 京都市) 2012.6.11.

カール・ベッカー「人権を考える」亀岡市人権フォーラム(亀岡市公民館, 亀岡市) 2012.6.14.

カール・ベッカー「人生を振り返る」いのち教育会(上越教育大学, 新潟県) 12.7.12.

カール・ベッカー「世界観が『燃え尽き』に与える影響」人体科学会第23回公開講演会(京都大学稲盛財団記念館, 京都市) 2012.7.29.

カール・ベッカー「iPS倫理の東西」iPSのELSI(延世大学校, ソウル) 2012.8.8.

カール・ベッカー「人権を考える」京田辺市人権フォーラム(京田辺市役所, 京田辺市) 2012.8.30.

カール・ベッカー「日本人のスピリチュアリティ」スピリチュアルケア学会(龍谷大学, 京都市) 2012.9.29.

カール・ベッカー「お寺の役割」浄土宗集会(新潟県) 2012.10.3.

カール・ベッカー「お寺の役割」浄土宗集会(下関文化ホール, 下関市) 2012.10.26.

カール・ベッカー「現代日本人の死生観『いきがいの創造』」社会福祉法人秀峰会(保土ヶ谷ホール, 横浜市) 2012.11.5.

カール・ベッカー「患者の権利と希望」薬師山病院（京都教育文化センター，京都市）2012.11.24.

カール・ベッカー「日本人の死生観——尊厳を持って生を全うする日本的智恵と教訓に学ぶ」朝日カルチャーセンター（朝日カルチャー，大阪市）2012.12.4.

カール・ベッカー「日本仏教の役割と可能性を考える」仏教心理学会（龍谷大学，京都市）2012.12.8.

カール・ベッカー「幸福をどう探せるか——日本人の知恵から」深谷高校卒業講演（埼玉県深谷高校，深谷市）2012.12.22.

カール・ベッカー「日本的な看取り——その準備，受容，意味」県民公開講座（静岡県在宅医療推進センター，静岡市）2013.1.19.

カール・ベッカー「グローバルな世界に生きる」石門史学協会（コオピン京都，京都市）2013.1.22.

カール・ベッカー「『医療倫理』——患者や家族のストレス軽減」京都府鍼灸師会（芝蘭会館，京都市）2013.2.24.

研修会

カール・ベッカー「医師看護師コミュニケーション」SOC看護の会（京都大学/CP京都）2012.5.8.

カール・ベッカー「お寺の役割」僧侶の会，真言宗御室派，2012.5.22.

カール・ベッカー「ストレス軽減法」わくわくワークショップ（稲盛記念館ホール，京都市）2012.5.23.

カール・ベッカー「iPSの倫理」位田倫理の会（同志社大学，京都市）2012.6.29.

カール・ベッカー「医師看護師コミュニケーション」SOC看護の会（京都大学/CP京都，京都市）2012.7.10.

カール・ベッカー「燃え尽き予防」医師の月例会（新潟がんセンター，新潟市）2012.7.13.

カール・ベッカー「スピリチュアルケア」SCワーカー養成（太融寺，大阪市）2012.7.20.

カール・ベッカー「ストレス軽減法」わくわくワークショップ（稲盛記念館ホール，京都市）2012.7.25.

カール・ベッカー「医療の優先順位」ランチセミナー（ミシガン大学医学部，米ミシガン）2012.8.22.

カール・ベッカー「老いを考える」老いを考える研究会（国際高等研究所，木津川市）2012.8.31.

カール・ベッカー「A Buddhist Perspective on Ethical Practices in Medicine」比較哲学会（南イリノイ大学，米ミシガン）2012.10.19.

カール・ベッカー「看護倫理」看護師研修会（武田病院，京都市）2012.12.7.

カール・ベッカー「看護倫理」看護師研修会（京都看護協会，京都市）2012.12.21.

カール・ベッカー「メンタルヘルス対策の充実とその課題解決にむけて」教師研修会（京都府立朱雀高校，京都市）2013.1.18.

カール・ベッカー「老と死を考える」老と死を考える研究会（国際高等研究所，木津川市）2013.2.3.

カール・ベッカー「生命倫理の近未来のABC」CBEL生命倫理研究会（東京大学，東京都）2013.2.11.

カール・ベッカー「『医療倫理』——患者や家族のストレス軽減」看護師研修会（滋賀県立大学，彦根市）2013.3.5.

座長・司会

カール・ベッカー「山中伸也紹介」“Life: Its Nature, Value and Meaning”国際会議（上廣倫理財団，東京都）2012.5.17.

カール・ベッカー「精神医学誌学会」精神医学誌学会（稲盛記念館ホール，京都市）2012.10.27.

河合俊雄

論文

Kawai, T. “The Red Book from a pre-modern perspective: the position of the ego, sacrifice and the dead.” *Journal of Analytical Psychology*, 2012, 57, 378–389.

河合俊雄「甲状腺疾患における『感情のなさ』について」『こころの未来』vol.8, 2012, 9, 50.

河合俊雄「心理療法と幸福」『心理学評論』2012, vol.55(1) 195-202.

Kawai, T. (in printing) *The 2011 Earthquake in Japan: End of the old and birth of the new story*, Spring.

著書

河合俊雄編著『ユング派心理療法』ミネルヴァ書房，2013年。

ギーゲリッヒ，河合俊雄『ギーゲリッヒ夢セミナー』創元社，2013年。

河合俊雄，内田由紀子編『「ひきこもり」考』創元社，2013年。

学会発表

Kawai, T. “Internal Reading of the ‘Legends of Tono’ (1910): Emergence of Consciousness and Border.” *The International Society for Psychology as the Discipline of Interiority* (Berlin, Germany) 2012.7.23-25.

田中美香，金山由実，河合俊雄，桑原晴子「バセドウ病患者のカウンセリング過程にみられる特徴について——甲状腺専門病院での調査から」日本心理臨床学会第31回秋期大会（愛知学院大学，日進市）2012.9.14.

田中崇恵，小木曾由佳，加藤のぞみ，井芹聖文，土井奈緒美，河合俊雄，田中康裕，黒川嘉子，高嶋雄介，畑中千紘，長谷川千紘「発達障害へのプレイセラピーによるアプローチ（1）新版K式発達検査を用いた検討」日本箱庭療法学会第26回大会（米子コンベンションセンター，米子市）2012.10.28.

河合俊雄，黒川嘉子，田中崇恵，小木曾由佳，加藤のぞみ，井芹聖文，土井奈緒美，田中康裕，高嶋雄介，畑中千紘，長谷川千紘「発達障害へのプレイセラピーによるアプローチ（2）治療プロセスからの検討」日本箱庭療法学会第26回大会（同上）

田中美香，金山由実，河合俊雄，桑原晴，窪田純久，宮内昭「甲状腺専門病院でカウンセリングを依頼されるバセドウ病患者の特徴について——TRAb値の変化とカウンセリング内容から」日本甲状腺学会（アクロス福岡，福岡市）2012.11.29.

講演

河合俊雄「震災のケアから見えてきた人の心と制度」財務省新人基礎研修（東京都）2012.4.23.

河合俊雄「村上春樹でこころを科学する」京都大学公開講座春秋講義（京都大学，京都市）2012.5.23.

Kawai, T. “Big story and small stories in the psychological relief work after the earthquake disaster: life and death.”（全体講演）3rd International Joint Conference of the IAJS and the IAAP (Braga, Portugal) 2012.7.18-21.

河合俊雄「震災後のこころのケア」石巻地区養護教諭部会研修会（石巻市）2012.8.22.

河合俊雄「震災のこころのケアと視点：大きな物語と小さな物語」日本箱庭療法学会日本ユング派分析家協会合同震災対策ワーキンググループ福島研修会（福島市）2012.10.8.

河合俊雄「家族関係の希薄化と密着化」親と子のこころの電話研修会，2013.1.23.

シンポジウム

河合俊雄「自然の精神分析——傷つきと再生」（シンポジスト）日本語臨床フォーラム（花園大学，京都市）2012.6.24.

河合俊雄「物語と鎮魂」（シンポジスト）日本箱庭療法学会第26回

大会一般公開シンポジウム(米子コンベンションセンター, 米子市)
2012.10.27.

新聞掲載、書評

河合俊雄「顔」(河合隼雄賞創設インタビュー) 読売新聞2012年7月28日.

河合俊雄(書評) Carl Gustav Jung “Visions: Notes of the seminar given in 1930-1934”『臨床心理学』2012, 12(4), 610-613.

河合俊雄(書評)「小澤征爾さんと、音楽について話をする」『こころの科学』2012, vol.164, 127.

河合俊雄(巻頭言)「震災のこころのケアからみた心理療法・箱庭療法」『箱庭療法学研究』2012, 25(2), 1-2.

河合俊雄「対話のカタチ1: グローバル化のなかで」京都新聞2013年1月3日.

鎌田東二

論文

鎌田東二「霊性の京都学」31-43, 『月刊京都』2012年4月号~2013年3月号, 白川書院.

鎌田東二「神々から読み解く『古事記』前編」『歴史街道』2012年6月号, PHP研究所, 77-93.

鎌田東二「東北の怪異」『怪』2012年8月号, 角川書店, 183-189.

鎌田東二「神話と歌に見る言霊思想」『持続千年首都・平安京の生態智』『第30回比較文明学会・第8回地球システム・倫理学会学術合同大会予稿集』7-12, 比較文明学会+地球システム・倫理学会, 2012年11月.

鎌田東二「身心変容技法の起源とその展開に関する試論」『身心変容技法研究』第2号, 2013, 京都大学こころの未来研究センター, 3-19.

鎌田東二「こころの練り方探究事始めその三~南方熊楠の『心理学』を中心に」, 『モノ学・感覚価値研究』第7号, 2013, 京都大学こころの未来研究センター, 2-12.

鎌田東二「民俗芸能・芸術・聖地文化と再生」稲場圭信・黒崎浩行編『震災復興と宗教』第12章, 明石書店, 2013, 245-269.

鎌田東二「1910年と南方熊楠と生態智」『エコ・フィロソフィ』研究』第7号「別冊シンポジウム・研究会編」東洋大学, 2013, 3-20.

著書

鎌田東二監修『「日本神話」の謎を楽しむ本』PHP研究所, 2012年.

鎌田東二監修『こんなに面白い日本の神話——日本人として知っておきたい国の始まりと神々のドラマ』(知的生きかた文庫), 三笠書房, 2012年.

鎌田東二『古事記ワンダーランド』角川選書, 角川学芸出版, 2012年.

井上ウィマラ, 藤田一照, 西川隆範, 鎌田東二『仏教は世界を救うか』地湧社, 2012年.

招待講演

鎌田東二「柳宗悦とその時代——宗教と科学と芸術の絡みから」第4回柳宗悦研究会(京都大学こころの未来研究センター, 京都市) 2012.7.26.

鎌田東二「人体科学と身心変容技法」人体科学学会第37回公開講演会(京都大学こころの未来研究センター, 京都市) 2012.7.29.

鎌田東二「神と自然」(提題)日本ホワイトヘッド・プロセス学会第34回全国大会シンポジウム(京都キャンパスプラザ, 京都市) 2012.9.8.

鎌田東二「古事記からみた日向」(基調講演)古事記編纂1300年記念事業「イワクラサミットIN日向」(日向市文化交流センター, 日向市) 2012.9.15.

鎌田東二「生と死をめぐる日本の神話的深層と現代」(基調講演)

日本人間性心理学会第31回大会(宇部フロンティア大学, 宇部市) 2012.9.23.

鎌田東二「アジア共同体の構築に向けた宗教の役割——日本の宗教文化の視点から」嘉泉大学校(大韓民国) 2012.9.27.

鎌田東二「古事記における登場人物の逸話と彼らの性格特性——負の感情の制御者としてのスサノヲの力とワザ」(講演)日本パーソナリティ心理学会第21回大会(島根大学, 松江市) 2012.10.6.

鎌田東二「神話と歌に見る言霊思想」(提題)第8回地球システム・倫理学会大会(京都大学こころの未来研究センター, 京都市) 2012.11.16.

鎌田東二「持続千年首都・平安京の生態智」(講演)第30回比較文明学会大会(京都大学こころの未来研究センター, 京都市) 2012.11.17.

鎌田東二「古典と伝統知」(コメンテーター)第8回地球システム・倫理学会大会(京都大学こころの未来研究センター, 京都市) 2012.11.18.

鎌田東二「古事記と宇宙」(基調講演)京都大学・大和郡山市主催, 京都大学宇宙総合学術ユニット協力シンポジウム(大和郡山城大ホール, 大和郡山市) 2012.11.23.

鎌田東二「遠藤周作と宮澤賢治の宗教性をめぐって——『深い河』と『銀河鉄道の夜』を中心に」日本キリスト教文学会関西支部冬季大会招待講演シンポジウム(関西学院大学, 西宮市) 2013.1.26.

鎌田東二「癒し空間の総合的研究」京都大学地域研究統合情報センター研究発表会(京都大学地域研究統合情報センター, 京都市) 2013.1.27.

鎌田東二「海・山のあいだ再考——防災拠点としての寺社と信仰」(特別講演)和歌山県新宮市教育委員会主催「熊野学サミット」2013.2.23.

鎌田東二「1910年と南方熊楠と生態智」(基調講演)東洋大学「井上円了×南方熊楠」シンポジウム(東洋大学, 東京都) 2013.2.24.

鎌田東二「日本の聖地文化」『日本の聖地——相模国一宮寒川神社と延喜式内社研究』(京都大学こころの未来研究センター, 京都市) 2013.2.27.

鎌田東二「『古事記』のキャラクターと物語によるコスモロジー創り」(報告)『京都伝統文化の森推進協議会第6回公開セミナー「森と人, 森と街をつなぐ京都のキャラクター」」(京都大学こころの未来研究センター, 京都市) 2013.2.28.

鎌田東二「アジア共同体の構築に向けた宗教の役割——日本の宗教文化の視点から」東国大学校講演(大韓民国) 2013.3.26.

新聞掲載、書評

鎌田東二「日経新聞インタビュー」日本経済新聞2012年4月7日・4月28日夕刊.

鎌田東二「今, 見直すべき伝承知」インタビュー, 毎日新聞2012年6月26日朝刊「心のページ」.

鎌田東二「浅見克彦著『響きあう異界』(せりか書房)」週刊読書人 2012年6月29日.

鎌田東二「心解き 若者修行体験」記事にコメント, 読売新聞2012年8月21日朝刊.

鎌田東二「星野紘著『過疎地の伝統芸能の再生を願って』(国書刊行会)」日本経済新聞2012年8月26日.

鎌田東二「古事記1300年」朝日新聞2012年9月23日朝刊書評欄「ニュースの窓」.

鎌田東二「復興元年と祭り」徳島新聞2013年2月1日朝刊.

ラジオ出演

京都FM, α ステーション「Sunnyside Balcony Kyoto University Academic Talk 聖地文化とこころのつながり」2013年3月6日15時20分-40分.

内田由紀子

論文

- Norasakkunkit, V., Uchida, Y., & Toivonen, T., "Caught between culture, society, and globalization: Youth marginalization in postindustrial Japan," *Social and Personality Psychology Compass*, 2012, 6 /5, 361-378.
- Norasakkunkit, V., Kitayama, S., & Uchida Y., "Social anxiety and holistic cognition: Self-focused social anxiety in the United States and Other-focused social anxiety in Japan," *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 2012, 43, 742-757.
- 内田由紀子, 荻原祐二「文化的幸福観：文化心理学的知見と将来への展望」『心理学評論』2012, 55, 26-42.
- 子安増生他「幸福感の国際比較研究——13カ国のデータ」『心理学評論』2012, 55, 70-89.
- 内田由紀子「日本文化における幸福と将来展望」『連合総研レポートDIO』2012, 274, 8-11.
- 内田由紀子, 遠藤由美, 柴内康文「人間関係のスタイルと幸福感：つきあいの数と質からの検討」『実験社会心理学研究』2012, 52, 63-75.
- Uchida, Y., & Ogihara, Y., "Personal or interpersonal construal of happiness: A cultural psychological perspective," *International Journal of Wellbeing*, 2012, 2 (4), 354-369.
- Oishi, S., Kesebir, S., Miao, F. F., Talhelm, T., Endo, Y., Uchida, Y., Shibana, Y., & Norasakkunkit, V., "Residential mobility increases motivation to expand social network: But why?" *Journal of Experimental Social Psychology*, 2013, 49, 217-223.
- Boiger, M., Mesquita, B., Uchida, Y., & Barrett, L. F., "Condoned or condemned - the situational affordance of anger and shame in the US and Japan," *Personality and Social Psychology Bulletin*, in press.
- Park, J., Haslam, N., Kashima, Y., Uchida, Y., & Shimiz, H., "Comparing the self to friends and peers: Self-humanizing, but not self-enhancement, is robust interpersonal comparisons in Australia, Japan, and Korea," *Journal of Cross-Cultural Psychology*, in press.
- 内田由紀子「日本文化における幸福と持続可能な社会への提言」『季刊環境研究』2013, 169, 44-52.
- 内田由紀子「文化心理学からみた日本文化と心」『経済セミナー』2013年670号, 日本評論社.
- Uchida, Y., Takahashi, Y., & Kawahara, K., "Changes in hedonic and eudaimonic well-being after a severe nationwide disaster: The case of the Great East Japan Earthquake," *Journal of Happiness Studies*, in press.
- 荻原祐二, 内田由紀子, 楠見孝「対人関係におけるコントロール方略が感情状態に及ぼす影響」『対人社会心理学研究』2013, 13, 9-14.
- 著書**
- Norasakkunkit, V., & Uchida, Y., "Marginalized Japanese youth in post-industrial Japan: Motivational patterns, self-perceptions, and the structural foundations of shifting values." In Trommsdorff, G., & Chen, X. (Eds). *Values, Religion, and Culture in Adolescent Development*. 2012, pp. 211-234. Cambridge: Cambridge University Press.
- 内田由紀子, 竹村幸祐『農をつなぐ仕事——普及指導員とコミュニティへの社会心理学的アプローチ』創森社, 2012年.
- 河合俊雄, 内田由紀子編『「ひきこもり」考』創元社, 2013年.
- 受賞**
- 日本計画行政学会論説賞, 2012年9月(論文: 内田由紀子「日本文化における幸福感——東日本大震災後の復興を支える心理と社会システム」『計画行政』2011, 34, 11-26.)
- 学会発表**
- Uchida, Y. "Did you notice how I helped you? Cultural differences in support monitoring." In symposium: Cultural dimensions of responsiveness to need and social support (Chair: Joan Miller). *International Society for the Study of Behavioral Development 2012 Biennial Meeting*, Edmonton, Canada. 2012, 7.11.
- 内田由紀子「子育てと研究生活」日本心理学会第76大会ワークショップ「研究者のワーク・ライフ・バランス」(専修大学, 川崎市) 2012.9.13.
- 内田由紀子「社会心理学・文化心理学における質問紙調査の実際」日本心理学会第76大会ワークショップ「より良い質問紙調査を行うために——作成から実施まで」(専修大学, 川崎市) 2012.9.13.
- 内田由紀子「幸福の対人的基盤」日本心理学会第76大会ワークショップ(発表兼企画)『幸福感研究の多面性: 社会構造, 対人的側面, 神経基盤』(同上).
- 内田由紀子, 竹西亜古, 金川智恵, 原田章, 大川清文, 藪ノ弘美「東日本大震災における報道——報道内容と報道関係者への調査からの分析」日本グループ・ダイナミクス学会第59回大会(京都大学, 京都市) 2012.9.22.
- 内田由紀子, 吉成祐子, 京野千穂「援助行動における言語表現と関係性の認知: 日本文化における検証」日本社会心理学会第53回大会(つくば市) 2012.11.17.
- 福島慎太郎, 内田由紀子, 西前出「一般的信頼とコミュニティ信頼の固有性が保持される空間レベルの検証——京都府北部の3自治体を構成する全445農業集落に対する全戸調査を通して」日本社会心理学会第53回大会(同上).
- 岡田安功, 荻原祐二, Moring, B., 内田由紀子「集団内成員の関係性満足に影響力保持と影響力格差が与える効果」日本社会心理学会第53回大会(つくば市) 2012.11.18.
- 荻原祐二, 内田由紀子「成人期における主観的幸福感: 対人関係からの検討」日本社会心理学会第53回大会(同上).
- 矢野裕理, 内田由紀子, 上田祥行, 増田貴彦「ニート・ひきこもりリスクと表情認知の関連」日本社会心理学会第53回大会(同上).
- Norasakkunkit, V., & Uchida Y., "Marginalization due to Globalization May Dissociate Individuals from Local Identity." *Cultural Psychology Preconference, The 14th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology*, New Orleans, USA. 2013.1.16.
- Ogihara, Y., Uchida, Y., Morling, B., & Kusumi, T. "Influence and adjustment in the friendship." *Cultural Psychology Preconference, The 14th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology*, New Orleans, USA. 2013.1.16.
- Akutsu, S., Uchida, Y., Katsumura, F., Ogihara, Y., & Kitayama, S. "Negative impact of seeking independence in a global Japanese company." *Cultural Psychology Preconference, The 14th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology*, New Orleans, USA. 2013.1.16.
- Fukushima, S., Saizen, I., Uchida, Y., & Kondo, K. "A study on collective properties of happiness through the questionnaire survey in Japan." *The 14th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology*, New Orleans, USA. 2013.1.19.
- 講演**
- 内田由紀子「Happiness in Japan before and after the Great East Japan Earthquake」ドイツ日本研究所(東京都) 2012.4.5.
- 内田由紀子「幸福研究の文化心理学的視座: 国際比較からわかること」持続可能性と幸福研究オープニング・ワークショップ(京都大学, 京都市) 2012.5.28.
- 内田由紀子「日本文化と幸福感について——文化心理学からの考察」社団法人国際経済労働研究所, 日本の強み・弱み - その仕分け - 研究会(京都大学, 京都市) 2012.6.1.
- 内田由紀子「幸せのモノサシ——日本の『幸福感』とは」川西市生涯学習センター, 平成24年度オープン講座(全3回) 2012.6.8, 6.15, 6.29.
- 内田由紀子「文化心理学から見た日本文化と心」大阪大学社会経済研究所, 第9回行動経済学研究センターシンポジウム『文化と経済』(大

阪大学中之島センター, 大阪市) 2012.8.22.

内田由紀子「普及指導員の行動に関する調査研究——地域ネットワークを支える普及活動」平成24年度愛媛県普及指導員研修大会(愛媛県松山市) 2012.10.22.

内田由紀子「日本における文化的幸福観と幸福度指標」行動経済学会第6回大会一般向け教育セッション『幸福について——幸福度の社会での活用に向けて』(青山学院大学, 東京都) 2012.12.9.

内田由紀子(指定討論)「東日本大震災と幸福度」行動経済学会第6回大会(同上).

内田由紀子「日本社会における企業文化とメンタルヘルス——グローバル化時代の価値観の揺らぎ検証」平成24年度第8回企業向け人権啓発講座(京都市) 2012.11.27.

内田由紀子「社会心理学からみた普及活動」平成24年度水産業普及指導員研修会, 2012.12.18.

内田由紀子「文化と幸福度: 幸福度への文化心理学的アプローチ」持続可能な発展と主観的福祉にかんするワークショップ, 2012.11.2.

内田由紀子「幸福度とその指標作成における心理学的視点」平成24年環境経済の政策研究第3回研究会, 2012.11.21.

Uchida, Y., "Collective well-being and a proposal for a sustainable society: A cultural psychological perspective," International Expert Working Group, Bhutan, 2013.1.27.

内田由紀子「心理学から見た、まちづくりにおける幸福度の活用」平成24年度川西市トップセミナー及び特別講演会, 2013.2.20.

内田由紀子「グローバル化する日本における幸福」特定領域研究シンポジウム「社会行動の文化・制度的基盤」京都大学, 2013.3.3.

内田由紀子「社会心理学の視点で捉えた信頼関係構築」しがの地産地消推進事業にかかる推進会議(長浜市) 2013.3.13.

内田由紀子「成熟国家における新たな幸福への挑戦」京都幸福会議特別セッション, 2013.3.20.

内田由紀子, 竹村幸祐「普及員のワザについての社会心理学的検証——社会心理学調査から見てきたもの」普及研究会(農林水産研修所つくば館) 2013.3.28.

ワークショップ企画

「持続可能性と幸福研究」ネットワーク(2012年5月より).

新聞掲載等

Uchida, Y. Don't worry be happy. Monocle, vol.06, issue 52. 2012年4月号.

Uchida, Y. Did the 2011 Disaster Make Japanese Happier? ウォールストリートジャーナルブログ版, 2012年4月9日.

内田由紀子「農幸民族〜識者から」日本農業新聞2012年5月17日.

内田由紀子「原発事故30%が事実描ききれなかった」NHK京都放送局, 2012年5月24日放送.

内田由紀子「新聞報道記者アンケート 京大など調査」京都新聞2012年5月25日.

内田由紀子「35%の記者が原発事故報道で事実を描ききれず」『サイエンスポータル』2012年5月25日.

内田由紀子「五輪人間ドラマも熱い」読売新聞(京都山城版) 2012年6月18日.

内田由紀子「幸福度とは」『サイエンスポータル』(全5回), 第1回「大震災が若者に与えた影響」(2012年7月2日掲載), 第2回「関係志向に帰帰も」(2012年7月4日掲載), 第3回「相反する要求に悩む若者たち」(2012年7月9日掲載), 第4回「団塊ジュニアの苦難」(2012年7月17日掲載), 第5回「関係志向を支えるシステムの再構築を」(2012年7月25日掲載).

内田由紀子「『幸せ』を感じる町に(大塩民生川西市長・新川達郎同志社大学教授との鼎談)」『広報かわにし』平成24年9月号.

内田由紀子「幸せの数値化, 解はどこに」日本経済新聞「創論」2012

年9月23日.

内田由紀子「日本人の幸福観と幸福度指標」『心理学ワールド』2013年1月号, 5-8.

内田由紀子「リアル30's」毎日新聞社2012年1月17日.

内田由紀子, 竹村幸祐「農をつなぐ仕事——普及指導員とコミュニティへの社会心理学的アプローチ」『サイエンスポータル』「科学のおすすめ本」(書評), 2012年12月25日.

内田由紀子「メンタルヘルス・幸福度とワーク・ライフ・バランス」カエルジャパン通信第41号, 2013年2月28日配信.

社会活動

内閣府, 幸福度に関する研究会委員会(内閣府, 東京都).

ブータン International Expert Working Group コミティー.

日本ドイツ研究所, 顧問.

阿部修士

論文

Abe, N., "Neuroimaging studies of false memory: a selective review," Psychologia, 2012, 55, 131-145.

Ito, A., Abe, N., Fujii, T., Hayashi, A., Ueno, A., Mugikura, S., Takahashi, S., Mori, E., "The contribution of the dorsolateral prefrontal cortex to the preparation for deception and truth-telling," Brain Research, 2012, 1464, 43-52.

Hashimoto, R., Abe, N., Ueno, A., Fujii, T., Takahashi, S., Mori, E., "Changing the criteria for old/new recognition judgments can modulate activity in the anterior hippocampus," Hippocampus, 2012, 22, 141-148.

阿部修士, 森悦朗「パーキンソン病における認知機能障害」『BRAIN and NERVE』2012, 64, 321-331.

著書

阿部修士, 藤井俊勝「嘘をつく脳」, 菅原直行編『社会脳科学の展望——脳から社会をみる』新曜社, 2012年, 35-61頁.

学会発表・ワークショップ等

阿部修士, ジョシュア・グリーン「腹側線条体における報酬感受性は不正直な行動を予測する」第2回社会神経科学研究会(自然科学研究機構岡崎コンファレンスセンター, 岡崎市) 2013.1.31.

伊藤文人, 藤井俊勝, 阿部修士, 川崎伊織, 林亜希子, 上野彩, 吉田一生, 境信哉, 麦倉俊司, 高橋昭喜, 森悦朗「他者の顔に対する価値表象に関わる神経基盤の性差」第2回社会神経科学研究会(同上). 阿部修士「嘘を理解する脳のメカニズム」第76回日本心理学会(専修大学, 川崎市) 2012.9.12.

阿部修士, ジョシュア・グリーン「腹側線条体における報酬感受性はヒトの不正直な行動を予測する」第14回日本ヒト脳機能マッピング学会(京王プラザホテル, 札幌市) 2012.7.5.

伊藤文人, 阿部修士, 藤井俊勝, 林亜希子, 上野彩, 麦倉俊司, 高橋昭喜, 森悦朗「正直な反応と嘘の反応の準備における背外側頭前野の役割」第14回日本ヒト脳機能マッピング学会(同上).

畑中千紘

論文

高嶋雄介, 畑中千紘, 井上嘉孝, 古川裕之「トイレ空間にみる現代の意識」『箱庭療法学研究』2012, 25(2), 13-24.

長岡千賀, 小森政嗣, 吉川左紀子, 桑原知子, 大山泰宏, 渡部幹, 畑中千紘「心理臨床初回面接の進行: 非言語行動と発話の臨床的意味の分析を通じた予備的研究」『社会言語科学会誌』2012, 14-1.

畑中千紘「最新のトイレにみる現代のこころ——トイレの自立と影の喪失」『こころの未来』2012, vol.9, 47.

畑中千紘「現代の『フツー』の大学生」『立命館大学学生サポートルーム報告書』2012, 第4号, 7-10.

Hatanaka, C. "From Dual Personalities to Reflected Adult. Consciousness in the Psychotherapy of Dissociative Identity Disorder : The Dialectic Movement between Fake and Real."『箱庭療法学研究』25 (3), 75-90.

学会発表

畑中千紘「発達障害の世界における境界と定点——雷恐怖を呈する女子との箱庭療法から」日本箱庭療法学会第26回大会(米子コンベンションセンター, 米子市) 2012.10.28.

田中崇恵, 小木曾由佳, 加藤のぞみ, 井芹聖文, 土井奈緒美, 河合俊雄, 田中康裕, 黒川嘉子, 高嶋雄介, 畑中千紘, 長谷川千紘「発達障害へのプレイセラピーによるアプローチ(1) 新版K式発達検査を用いた検討」日本箱庭療法学会第26回大会(同上).

河合俊雄, 黒川嘉子, 田中崇恵, 小木曾由佳, 加藤のぞみ, 井芹聖文, 土井奈緒美, 田中康裕, 高嶋雄介, 畑中千紘, 長谷川千紘「発達障害へのプレイセラピーによるアプローチ(2) 治療プロセスからの検討」日本箱庭療法学会第26回大会(同上).

畑中千紘「On the Dialectics of Seeing Through Symptoms in the Psychotherapy of Dissociative Identity disorder: Beyond the trauma theory and the integration model.» The International Society for Psychology as the Discipline of Interiority (Berlin, Germany) 2012.7.23-25.

畑中千紘「Beyond the integration model in the psychotherapy of Dissociative Identity Disorder: Abandoned childhood」3rd International Joint Conference of the IAJIS and the IAAP (Braga, Portugal) 2012.7.18-21 (ポスター発表).

講演

畑中千紘「発達障害のコミュニケーション」(京都家庭裁判所, 京都市) 2012.10.30.

長岡千賀

論文

Komori, M., Kamide H., Kawamura, S., & Nagaoka, C., "Asymmetry in Facial Expressions as a Function of Social Skills." IEICE Transactions on Information and Systems. 2013, E96-D (3).

Komori, M., Nagaoka, C., "The Relationship between Seating Locations and Instructor-Student Entrainment in a Classroom." Kansei Engineering International Journal. 2012, 11 (4) :179-182.

長岡千賀, 小山内秀和, 前田駿太「発達障害児への作業療法におけるセラピストの専門的技法」『電子情報通信学会技術研究報告』, 2012, 112 (45), 143-148.

Nagaoka, C., Kuwabara, T., Yoshikawa, S., Watabe, M., Komori, M., Oyama, Y., & Hatanaka, C., "Implication of silence in a Japanese psychotherapy context : a preliminary study using quantitative analysis of silence and utterance of a therapist and a client." Asia Pacific Journal of Counselling and Psychotherapy. in press.

長岡千賀, 佐々木玲仁, 小森政嗣, 金文子, 石丸綾子「行動指標を用いた心理臨床の関係性に関する定量的検討——描画法施行場面を題材として」『対人社会心理学研究』, 2013, 13, 31-40.

学会発表, ワークショップ等

長岡千賀「より良い保護者面談をするために: 対話の時間構造と内容の分析に基づく考察」自主シンポジウム発達障害児の学習支援と心の発達~保護者支援と合わせて~(企画: 京都大学霊長類研究所・小川詩乃) 日本LD学会(仙台市) 2012.10.8.

長岡千賀「子どもが療育に通うことによる保護者の認知の変化: 縦断的調査による検討」, 日本心理学会第76回大会(専修大学, 川崎市) 2012.9.11.

小山内秀和, 長岡千賀, 鈴木淳子, 田辺肇, 内田由紀子, 高橋雄介, 2012 ワークショップ「より良い質問紙調査を行うために——作成から実施まで」(企画: 小山内秀和, 長岡千賀), 日本心理学会第76回大会(同上). Nagaoka, C., Yoshikawa, S., Kuwabara, T., Oyama, Y., Hatanaka, C., Watabe, M., Komori, M., "A Comparison of Experienced, Novice Counselor and Non-counselor in Recall of Client-Presented Information in Therapeutic Interview." Proc. the 34th Annual Conference of the Cognitive Science Society (CogSci 2012), Sapporo, 2794, 2012.8.3.

Komori, M., Kamide, H., Kawamura, S., Nagaoka, C., "Effect of Social Skills on the Asymmetry in Facial Expressions." Proc. the 34th Annual Conference of the Cognitive Science Society (CogSci 2012), Sapporo, 1822-1827, 2012.8.4.

Komori, M., Matsumura, N., Miura, A., Nagaoka, C., "Relationships between periodic behaviors in micro-blogging and the users' baseline mood." Proc. 13th ACIS International Conference on Software Engineering, Artificial Intelligence, Networking and Parallel/Distributed Computing (SNPD 2012), Kyoto, 405-410, 2012.8.9.

講演

長岡千賀「自閉症児への作業療法におけるセラピストの専門的技法」企画セッションコミュニケーションの進化と未来: 霊長類からジェミノイドまで(企画: ヒューマンコミュニケーション基礎第一種研究会), HCGシンポジウム(熊本市), 2012.12.10.

上田祥行

論文

Ueda, Y., & Komiya, A., "Cultural Adaptation of Visual Attention: Calibration of the Oculomotor Control System in Accordance with Cultural Scenes." PLoS ONE, 2012, 7, e50282.

Ueda, Y., & Saiki, J., "Characteristics of Eye Movement in 3-D Object Learning : Comparison between Within- and Cross-modal Object Recognition," Perception, 41, 1289-1298.

学会発表, ワークショップ等

Ueda, Y., & Yoshikawa, S., "Task-irrelevant Happy Faces Facilitate Visual Search Performance," Vision Sciences Society 12th Annual Meeting, Naples, USA. 2012.5.11.

Higuchi, Y., Ogawa, H., Ueda, Y., & Saiki, J., "Object identities facilitate response to a target in spatio-temporal contextual cuing," Vision Sciences Society 12th Annual Meeting, Naples, USA. 2012.5.12.

Yoshikawa, S., & Ueda, Y., "Smile Wins : Perceived Dominance of Facial Expression in Face-to-Face Confrontation Scenes," 24th Annual Convention of Association for Psychological Science, Chicago, USA. 2012.5.25.

Nunoi, M., Ishida, A., Ueda, Y., & Yoshikawa, S., "Face-To-Face Situation Enhances Positive Facial Expression Rather Than Videophone Situation," 24th Annual Convention of Association for Psychological Science, Chicago, USA. 2012.5.26.

上田祥行, 小宮あすか「文化の典型的な風景への順応による眼球運動の変化」日本心理学会第76回大会(専修大学, 川崎市) 2012.9.13. 樋口洋子, 小川洋和, 上田祥行, 齋木潤「系列の潜在学習における位置とアイデンティティの役割」日本心理学会第76回大会(同上).

Ueda, Y., & Yoshikawa, S., "Task-irrelevant Happy Faces Facilitate Visual Search Performance," 43rd NIPS International Symposium "Face Perception and Recognition." Okazaki, Japan. 2012.11.1.

Yoshikawa, S., & Ueda, Y., "Perceived Dominance of Facial Expression in Face-to-Face Scenes," 43rd NIPS International Symposium "Face Perception and Recognition", Okazaki, Japan. 2012.11.1.

矢野裕理, 内田由紀子, 上田祥行, 増田貴彦「ニート・ひきこもりリスクと

表情認知の関連」日本社会心理学会第53回大会（茨城県）2012.11.18.
上田祥行「視覚と触覚を通じて形成される三次元物体の脳内表象」第15回CAPSインタラクショナル研究会（関西学院大学，西宮市）2012.12.10.

上田祥行，小宮あすか「文化特有の風景は文化特有の注意プロセスを産出する」日本心理学会「注意と認知」研究会第11回合宿研究会（愛知県）2013.3.10-12.

樋口洋子，上田祥行，小川洋和，齋木潤「系列の潜在学習における課題依存性」日本心理学会「注意と認知」研究会第11回合宿研究会（同上）.

山本哲也

学会発表，ワークショップ等

山本哲也，山本洋紀，三浦健一郎，澤本伸克，福山秀直，河野憲二「ヒト視覚皮質における輝度・反対色チャンネルの最適空間周波数の視野位置依存性」日本視覚学会2013年冬季大会（工学院大学新宿キャンパス，東京都）2013.1.25.

長谷川千紘

学会発表

Chihiro HASEGAWA, “Features of narrative in patients with thyroid disease.” Poster. IVth International Academic Conference of Analytical Psychology & Jungian Studies. Braga, Portuguese. 2012.7.20.

長谷川千紘「甲状腺疾患患者の『語り』と主体」日本心理臨床学会第31回秋期大会（愛知学院大学，日進市）2012.09.15.

田中崇恵，小木曾由佳，加藤のぞみ，井芹聖文，土井奈緒美，河合俊雄，田中康裕，黒川嘉子，高嶋雄介，畑中千紘，長谷川千紘「発達障害へのプレイセラピーによるアプローチ（1）——新版K式発達検査2001を用いた検討」日本箱庭療法学会第26回大会（米子コンベンションセンター，米子市）2012.10.28.

河合俊雄，黒川嘉子，田中崇恵，小木曾由佳，加藤のぞみ，井芹聖文，土井奈緒美，田中康裕，高嶋雄介，畑中千紘，長谷川千紘「発達障害へのプレイセラピーによるアプローチ（2）——治療プロセスからの検討」（同上）.

奥井 遼

論文

Okui, H. “Body and the Understanding of Others: The Phenomenology of Language in the Work of Merleau-Ponty”『臨床教育人間学』2012, 11, 75-81.

奥井遼「身ぶりと言葉による『学び』——人形遣いのわざ習得場面における行為空間の記述」『ホリスティック教育研究』16, 2012, 69-82.

奥井遼「苔の行，あるいは身心変容技法——羽黒修験・秋の峰に関する身体論的考察」『身心変容技法研究』2, 京都大学こころの未来研究センター，2013.

著書

Okui, H. “Who Is Manipulating the Puppet?: A Phenomenological Analysis of Puppet Performances in Awaji Island, Japan.” In Diaz Benavides, Daniel (ed.) Cuerpos y Folklore (s) : Herencias, construcciones y performances, (Lima, Peru: R&F Publicaciones). 2012, 75-83.

学会発表

Okui, H. “Phenomenological description of embodied experience: A case of puppet performance in Japan.” The 30th International Congress of Psychology, Cape Town, South Africa, 2012.7.26.

奥井遼「身体化された行為者（embodied agent）としての学び手

——メルロ＝ポンティの『身体』概念を手がかりとした学びの構造」第55回教育哲学会大会（早稲田大学，東京都）2012.9.17.

奥井遼「羽黒修験の身心変容技法——荒澤寺の秋の峰入りを中心に」第6回身心変容技法研究会（京都大学，京都市）2012.10.4.

奥井遼「身ぶりと言葉による『学び』——人形遣いのわざ習得場面における行為空間の記述」第四回教育の現象学研究会（学士会館，東京都）2013.1.6.

講演

「伝統と心——久高島の神人・淡路島の人形」淡路三原ロータリークラブ50周年記念講演会（兵庫県南あわじ市）2013.2.23.

千石真理

論文

千石真理「ガンを善知識として」『大法輪』，大法輪閣，2012年12月号，188-194.

著書

千石真理「内観療法」井上ウィマラ，葛西賢太，加藤博巳編『仏教心理学キーワード事典』，春秋社，2012年，246-247.

Mari Sengoku, “One Dies as One Lives: The Importance of Developing Pastoral Care Services and Religious Education,” Buddhist Care for the Dying and Bereaved. Jonathan Watts & Yoshiharu Tomatsu, Eds. Somerville, MA : Wisdom Press, 2012. 12, 95-110.

講演

千石真理「内観心理療法とスピリチュアルケア」ビハラー山陰発足総会（本願寺山陰教区教務所，松江市）2012.6.22.

千石真理「Naikan Psychotherapy in relation to Buddhism.」築地本願寺英語礼拝（築地本願寺，東京築地）2012.6.30.

千石真理「内観心理療法と仏教教育」第51回広島可部地区仏教夫人大会（安佐北区民文化センター，広島市）2012.9.2.

千石真理「ビハラー活動について」第12回中央仏教学院通信制山陰教区同窓会（本願寺山陰教区教務所，松江市）2012.10.15.

千石真理「輝いて生きよう」鳥取県連合婦人会人権啓発講演会（船岡公民館，鳥取市）2012.11.24.

千石真理「ビハラー活動」浄土真宗西本願寺派外国人教師研修会（本願寺西山別院研修所，京都市）2012.12.12.

国際フォーラム，シンポジウム

Mari Sengoku “Introduction to Naikan——Your Heart Treasure.” 2012 International Network of Engaged Buddhists (INEB) International Forum (縁起の智慧と幸せの教え——世界のエンゲージドブuddhistと描くポスト3.11) (孝道山仏殿，横浜市) 212.11.9.

千石真理他「自殺とアルコール問題——持ちたいね，ふんばる力」市民公開セミナー，シンポジウム「生と死を考える」（名古屋国際会議場，名古屋市）2013.2.3.

ワークショップ，研修会

千石真理他「第13回 わく・湧く・ワークショップ」（稲盛記念館小会議室）2012.9.19.

千石真理他「第14回 わく・湧く・ワークショップ」（稲盛記念館小会議室）2012.11.7.

千石真理他「メンタルヘルス研修会——過大なストレスへの対応」（京都府立東稜高校）2012.1.9.

新聞掲載

千石真理「内観法生かし人に寄り添う」（インタビュー）中国新聞2012年5月12日.

●2012月10月1日 上廣こころ学
研究部門特任准教授に熊谷誠慈(京都女
子大学発達教育学部専任講師/仏教学
・チベット学)が着任。

●10月4日 第3回京都大学ブータ
ン研究会(於:稲盛財団記念館2階
225会議室)。発表:熊谷誠慈「ブータ
ンの歴史と仏教」、コメンテーター:小
西賢吾(日本学術振興会特別研究員
PD・大谷大学)。

●10月4日 第6回身心変容技法研
究会「シャーマニズム/修験道におけ
る身心変容技法」(於:稲盛財団記念館
3階中会議室)。発表1:アルタンジ
ョラー(こころの未来研究センター・
ワザ学共同研究員・科学研究協力者/
文化人類学)「モンゴルのシャーマニズ
ムにおける身心変容技法」。発表2:
奥井遼(こころの未来研究センター上
廣こころ学研究部門特定研究員/教育
学)「出羽三山・羽黒修験の身心変容技
法」、総合討論・司会進行:鎌田東二。

●10月18日 第2回ブータン文化講
座「イエズス会宣教師の見たブータン
——仏教とキリスト教」(於:稲盛財団
記念館3階大会議室)。講演:ツェリ
ン・タシ(ブータン王立自然保護協会、
RSPN)、通訳・解説:今枝由郎(フラ
ンス国立科学研究センター、CNRS)、
コメンテーター:熊谷誠慈。

●10月20日 第1回こころを整える
フォーラム「沖縄久高島と京都の中学
生の『地元文化自慢授業』」(於:稲盛
財団記念館3階大会議室)。趣旨説
明:鎌田東二、挨拶:兼島景秀(沖縄
県南城市立久高小中学校長)。久高中
学校(沖縄県南城市久高島)の生徒に
よる「島自慢授業」、西賀茂中学校(京
都市北区)・和知中学校(京都府船井
郡京丹波町)の生徒による「地元文化
自慢授業」。コメンテーター:やまだよ
うこ(京都大学名誉教授・立命館大学
特別招聘教授/発達心理学)、閉会挨
拶:新宮雅之(京都府京丹波町立和知
中学校長)、司会:鎌田東二。〈特別関
連企画〉記録映画上映『久高オデッセ

イ第二部 生章』(大重潤一郎監督作品)。

●11月1日 ジェニファー・クロッカー
博士講演会 Jeniffer Crocker (Professor
and Ohio Eminent Scholar, Ohio State
University) “The Constructed Self: The
Costly Pursuit of Self-Esteem and
Other's Regard” (於:稲盛財団記念館
3階大会議室)。司会進行:内田由紀子。

●11月7日 第14回わく・湧く・ワー
クショップ「イメージワークとメディ
テーションのタベ」(於:京都大学稲盛
財団記念館3F小会議室1)。

●11月13日 「平成24年度関西・広島
フィールドワーク」のため開智中学校
(埼玉県さいたま市)の生徒がセンター
を訪問。震災とこころのケアに関する
センターの取り組みについて、畑中千
紘上廣こころ学研究部門助教、長谷川
千紘上廣こころ学研究部門研究員のレ
クチャーを聴講。

●11月25日 京都府/京都大学こ
ころの未来研究センター共同企画シン
ポジウム「ワザとこころ」パートII—
祇園祭から読み解く(於:稲盛財団記
念館3階大会議室)。趣旨説明:鎌田
東二。映画上映『京都歳時記 祇園
祭』(大重潤一郎監督)。基調講演:脇
田晴子(滋賀県立大学名誉教授・石川
県立歴史博物館館長・文化勲章受章
者)「祇園祭から見るワザとこころ~祇
園祭の世界観」、報告1:橋本正明(八
坂神社権禰宜)「祇園祭の神事」、報告
2:吉田孝次郎(公益財団法人祇園祭山
鉾連合理事長)「祇園祭の山鉾巡行に
ついて」。パネルディスカッション・司
会進行:鎌田東二。

●11月29日・30日 3rd International
Symposium on Prefrontal Cortex-
Searching for Mechanism of Mind:第3
回前頭前野国際シンポジウム——こ
ころの仕組みを探し求めて(於:稲盛財
団記念館3階大会議室)。Organizer:
Shintaro Funahashi, Satoru Otan (i
Université Pierre et Marie Curie-Paris
6 France), Yukiori Goto (McGill
University, Canada)。

●12月4日 第4回京都大学ブータ
ン研究会(於:稲盛財団記念館2階
225会議室)「Bhutan Transport 2040
を紐解く」。発表:塩見康博(立命館大
学理工学部専任講師)、コメンテータ
ー:中嶋智之(京都大学経済学研究所
教授)。

●12月6日 第7回身心変容技法研
究会「『吾に辱(はじ)見せつ』を考
える——『負の感情』の発生と鎮め方」
(於:稲盛財団記念館3階中会議室)。
発表1:鎌田東二「『古事記』からの
アプローチ」、発表2:高見友理(島
根大学教育学部附属教育支援センター
講師)「臨床心理学からのアプローチ」、
総合討論・司会進行:鎌田東二。

●12月15日 こころの未来研究セン
ター研究報告会2012「こころを知り未
来を考える——感情と身体」(於:稲盛
財団記念館3階中会議室、ポスター会場
は大会議室)。挨拶:吉川左紀子、研究
報告:船橋新太郎「ものの好みはなに
で決まる?」、カール・ベッカー「看護
師の燃え尽き:こころが職場に及ぼす
影響」、鎌田東二「『はじ』の文化)再
考——『古事記』からルース・ベネデ
ィクトまで」。指定討論:加藤忠史(理
化学研究所脳科学総合研究センター、
シニア・チームリーダー/精神医学、
脳科学)。総合討論(本誌34~39頁参
照)。

●12月18日 第8回身心変容技法研
究会「教育と身心変容技法」(於:稲盛
財団記念館3階大会議室)。発表1:
鈴木晶子(京都大学大学院教育学研究科教授
/教育学)「わざの学習・学習のわざ」、
発表2:川口陽徳(東京大学大学院教育
学研究科博士課程/教育学)「『関係』を
めぐる攻防——『わざ』の継承を支える
『三者関係』」、総合討論・司会進行:
鎌田東二。

●12月26日・27日 こころの科学集
中レクチャー2012「fMRI研究の基礎と実
際」(於:稲盛財団記念館3階大会議
室)。講師:定藤規弘(自然科学研究機
構生理学研究所大脳皮質機能系心理生

理学研究部門教授)。

●2013年1月 阿部修士上廣こころ学
研究部門特定助教が平成24年度生理研
究会でトラベルアワードを受賞。

●1月7日 スティーブン・ハイネ教授
(ブリティッシュコロンビア大学/Dr.
Steven J. Heine, Professor of Psychology,
University of British Columbia, Canada)
が来日。2013年7月26日まで滞在。

●1月25日 アーサー・ザイエンス博
士講演会(於:稲盛財団記念館3階中会
議室)。Dr. Arthur Zajonc (Mind and
Life Institute, USA) “The Mind & Life
Institute: Twenty-five years of
Interdisciplinary Dialogue and
Research on the Nature of Mind,
Consciousness and Reality.” 挨拶:吉
川左紀子。司会進行:熊谷誠慈。

●1月30日・31日 第9回/第10回
身心変容技法研究会(於:稲盛財団記
念館3階中会議室)。第9回「ベルク
ソンと身心変容技法」、発表:篠原資明
(京都大学人間・環境学研究科教授/
美学、詩人)「あいだ哲学で語るベルク
ソン」、指定討論:棚次正和(京都府立
医科大学医学研究科教授/宗教哲
学)、総合討論・今年度の総括。司会進
行:鎌田東二。第10回「芸能と身心変
容技法」(一般公開)、基調講演:松岡
心平(東京大学大学院総合文化研究科
教授/中世文学・能楽研究)「中世の身
心変容技法——能を中心に」、報告
1:木村はるみ(山梨大学准教授/舞
踊学)「神事芸能と身心変容技法」、報
告2:奥井遼「淡路島の人形浄瑠璃と身
心変容技法」、総合討論・司会進行:鎌
田東二。

●1月18日~28日 千石真理研究員が
京都大学ブータン友好プログラム第10次
ブータン訪問団に参加。

●2月16日 こころの未来研究センタ
ー連携MRI研究施設開設記念シンポジ
ウム「脳科学の地平を拓く——こころ
と社会につながる新たな知」(於:稲盛
財団記念館3F大会議室)。開会挨拶:
吉川左紀子、来賓挨拶:澤川和宏

(文部科学省研究振興局学術機関課
長)代読:小坂井克也(文部科学省研
究振興局学術機関課課長補佐)、来賓
挨拶:井村裕夫(元京都大学総長・財
団法人先端医療振興財団理事長)、特
別講演:定藤規弘(自然科学研究機構
生理学研究所)「領域架橋共同研究に於
けるMRIの役割——社会神経科学を例
に」、坂井克之(東京大学大学院医学系
研究科)「ヒト前頭前野と認知制御」、本
田学(国立精神・神経医療研究センター
神経研究所)「感性的質感認知へのイメ
ージングからのアプローチ」、Joan Chiao
(Northwestern University, U.S.A.)
“Cultural neuroscience: Mapping cultural
and genetic diversity in the developing
brain.” Julie Grèzes (Ecole Normale
Supérieure, France) “The interplay
between the limbic and the cortical motor
systems.” Shihui Han (Peking University,
China) “How do we understand and share
others' pain? The effect of social group
relationships”。司会進行:阿部修士。

●2月17日 平成24年度こころを整
えるフォーラム「観阿弥生誕680年・世
阿弥生誕650年記念——観阿弥と世阿
弥の冒険」(於:大江能楽堂)。挨拶:
吉川左紀子、趣旨説明:鎌田東二、基
調講演:観世清和(二十六世観世宗家)
「能の世界と苦悩の表現」、ナビゲータ
ー:鎌田東二。実演:観世清和、舞囃
子「敦盛」。講演:松岡心平「能の発生
とその時代」、鼎談:観世清和+松岡心
平+鎌田東二(司会)「観阿弥生誕680
年・世阿弥生誕650年記念 観阿弥と
世阿弥の冒険:伝統と革新」。

●2月25日 ブータンからの訪問団
(王立ブータン大学、ブータン教育省、
王立ブータン病院からの計7名)がセ
ンターを訪問、教員と交流。

●2月27日 シンポジウム「日本の聖
地文化——相模国一宮寒川神社と延
喜式内社研究」(「癒し空間の総合的研
究」プロジェクト)。第1部『日本の
聖地文化——寒川神社と相模国の
古社』(鎌田東二編著、創元社、2012

年3月刊)からの提言]。話題提供者:
原田憲一(前京都造形芸術大学教授・
現在NPOシンクタンク京都自然史研
究所特別研究員/地球科学)、中野不
二男(JAXA主幹研究員・京都大学宇宙
総合学ユニット特任教授/宇宙人文
学)、五反田克也(千葉商科大学准教授
/花粉分析)、湯本貴和(前総合地球環
境学研究所教授・現在京都大学霊長類
研究所教授/生態学)、河角龍典(立命
館大学文学部准教授)、司会進行:鎌田
東二。第2部 総合討論「日本の聖地
文化と寒川神社と延喜式内社研究」、コ
メンテーター:加藤迪夫(寒川神社方徳
資料館副館長・寒川神社禰宜)+話題提
供者。

●3月1日・2日・3日 2012年度こ
ころの科学集中レクチャー「こころの
謎——社会生態学的アプローチと脳神
経科学からの挑戦」(於:稲盛財団記
念館3階中会議室・大会議室)。講師:
山岸俊男(玉川大学脳科学研究所脳科
学研究センター教授/社会心理学・実
験心理学)、北山忍(ミシガン大学心理
学部教授、文化・認識プログラム所長
/文化心理学・文化神経科学)、大石繁
宏(バージニア大学心理学部教授/社
会心理学・人格心理学・幸福感)。3
月3日のプログラムは特定領域研究「実
験社会科学——実験が切り開く21世紀
の社会科学」文化班によるシンポジウム
との共同開催。講演:Steven J. Heine
(University of British Columbia)
“Positive Self-Views, East and West”、
講演:石井敬子(神戸大学)「文化的価
値の維持と個人の選好」、内田由紀子
「グローバル化する日本における幸福」、
ディスカッション。

●3月20日 京都幸福会議2013(主
催:京都市、京都経済同友会、共催:
こころの未来研究センター他。於:立
命館大学朱雀キャンパス)に吉川左紀
子センター長と内田由紀子准教授が参
加。